
ETERNAL CHILDREN ~永遠の子供達~

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNAL CHILDREN ~永遠の子供達~

【著者名】

ラサ

【ノード】

N9709Z

【あらすじ】

遠い未来、人類のほとんどが滅びを迎えた中、日本で唯一生き残った人間達の物語。人類の滅亡を防ぐために科学者シイナは閉鎖された空間「ドーム」で特別な少女マナを育て上げた。しかし、マナはかつて実験体として処分したはずのアルビノの少年ユウによってさらわれてしまう。

人類の滅亡を受け入られないシイナの計画には、マナはどうしても必要だった。そして、マナをさらつたユウにも、マナはどうしても必要だった……。

逃げ場のない未来に取り残され、翻弄される人間達がたどり着く先は、希望か、それとも絶望か。

第1部 完結しました。感想お待ちしております。

0-1 (前書き)

内容はなんちゃってSFですが、少々ハードな展開や部分もあるので、お読みになる際は注意が必要です。

その部屋に、窓はなかつた。

外部からの有害なものを全て遮断するよう作られたためである。空調の行き届いた完璧な空間に、換気としての役割を担う必要はないかつた。

だが、観賞としての役割を補う代わりに、部屋の側面にはスクリーンパネルが窓を似せて張り巡らされ、外の景色を投影するようになつてゐる。もちろん、好みの景色に切り変えることも可能である。

「綺麗ね」

マナは無意識にそう呟いていた。

今彼女が見ているものは、そこに本当の窓が存在したならばそのままに映る、青い空だつた。明るさを含んだ青に、はつきりとした大きな白い雲が形を変えながら流れしていく。

このスクリーンから見る外界の景色を、マナはとても気に入つていた。それは、彼女の瞳がじかに見ることのない、決して触れることも感じることのないものだからだ。

マナの知つている世界は、この白い壁の中だけだ。彼女は太陽の光の下に立つたこともなれば、暗闇を照らす月光も、星の瞬きも見たことがない。草の間を抜けていく風に吹かれたこともなれば、柔らかな地面の感触も知らなかつた。

識ることはあっても、感じることはない。

それがマナの全てだつた。

「本当の風つて、どんなもののかしら。あんなに草を揺らして、もしそこにいたら、どんな感じがするのかしら」

最近、マナはよくそんな感慨に囚われる。この白い壁の向いの、まだ本当に見たことのない世界へ出ていきたいと。

自分を育ってくれた優しいシイナは、外は人間の生きていけるところではないと教えてくれた。太陽が沈んで、一夜明ける前に、人

間は自然のもたらす暗闇の恐ろしさに耐え切れず発狂しているのだと。実際にそれを試して、発狂して死んでしまった人間がいたといふことも記録に残つてゐる。

それを聞かされた時、幼いマナは泣いてしばらくは明かりを消して眠ることはできなかつた。そして、太陽が沈んだ後の外の様子を見ることは、生まれてから十四年間、一度もなかつた。

それでも、マナは外界に対する憧れを止めることはできなかつた。スクリーンに映る外界の景色は穏やかな雰囲気を漂わせ、いつも以上に彼女の憧憬をかきたててやまない。

「 そうよ。太陽が沈むまでなら、いいんじゃないかしら。今度

博士の機嫌がいい時に頼んでみよう」

マナがそんな風に心を飛ばしている間に、オートドアが開き、静かに部屋へ入ってきた人物がいた。

「 マナ。もう時間よ。いらっしゃい」

自分の名を呼ぶ声に、マナは振り返つた。

「 博士」

マナを呼んだのは、二十代後半の美しい女性だ。マナの育ての親とも言える。色素の薄い髪は襟足にとどくほどで切られて、少々男性的な感を与えている。年齢よりは若く見えるその面差しは、些か感情に乏しく、冷ややかな美貌を際立たせていた。

対照的に、マナは腰までとどく黒髪を揺らして、少女らしいあどけない笑顔で、シイナのもとへとかけよる。大きな瞳が印象的に映るあどけない顔立ちは、無邪氣さもそのまま表わしていた。

自分より大きなシイナを見上げるマナは、時には冷酷とさえ見えるその美貌が、自分に向けられるときは暖かく慈愛の深いものになるのを知っていた。透き通るような、感情に乏しい声も優しく響く。マナは母親に対する愛情を知らないが、劣らぬ想いでシイナを愛していた。この閉ざされた世界に存在する数少ない人間の中で、唯一彼女だけが同性であったことも、その理由と言えよう。

「 博士、今日は何か起こりそうな気がするの。とても、不思議なこ

と

「まあ。マナには隠し事はできないわ。何でもお見通しなのね」

「どうしたの、博士。何かあつたの？」

好奇心を隠さずに、マナはシイナの腕に絡みついた。

「そうね。学習が終わつたら教えてあげるわ」

「何なの、博士。隠さないで教えて」

「それは見てのお楽しみよ。さあ。行きましょう」

一人は部屋を出て、大きく緩やかな弧を描く長い廊下を歩いた。この科学技術の粋を懲らして造られた建造物 ソーラーパネルで外面を覆つた半球のドーム が、マナの世界の全てだった。地下十階の更に奥の最下層に動力維持のための設備を据え、底部の中心点からは頂点へとエレベーター八台を据えている。

内部は、一階をホールと倉庫にして、二階から十階までをケーキを配分するように均等に四区域に分けており、管理、研究、居住、生産と、それぞれの機能別に各技術者によって統制されている。各区域は偶数階ごとに全ての区域と通じるようになつてはいるが、それぞれの職種に応じて立入が厳しく規制されている。

今、マナとシイナがいるのは研究区域である。シイナはこの区域の責任者でもあった。

マナはこのドームの構造を知識として理解していたが、実際に彼女が知つてているのは、研究と居住区域のぐく一部分だけだった。だが、マナにはそれが苦にはならない。それは知る必要のないことだからだ。

マナは選ばれた人間なのだ。だから、それ以外は何も重要なことではない。そう、教えられてきた。

今も彼女は、何も知らずにシイナに連れられて、居住区の自分の部屋から平行に移動し、研究区一階の学習部屋へと移動している。

研究区の三階から五階分までは存在しない。その空間は、床をぶちぬいて造つた植物用の大きな温室となつており、エレベーターへ向かう直線の廊下側面は特殊コーティングを施したガラスが張り巡

らされていた。

マナとシイナが向かうその先で、長身の青年が、ガラスの向こうの実験用植物の温室を眺めている。

初めに彼に気づいたのは、マナだった。続いて、シイナも気づき、二人は立ち止まつた。

「

マナはじつと彼を見つめた。見たことのない男性で、シイナと同じくらいの年代だということはわかつた。視線に気づいたかのように青年は振り返る。しかし、そこには何の感情の揺らぎも見えない。逞しい、または、男らしい、そんな形容を、青年は持ち合わせてはいなかつた。すらりと痩せて、華奢なように見える、美しい、だがどこか退廃的な翳りを漂わせる青年だつた。

「やあ、シイナ」

声をかけられたシイナは、無表情に青年を見ている。

「部屋で待つようにと伝えておいたわ。なぜ廊下に？」

「ああ。退屈だつたからね。温室を見ていたんだ」

言いながら、初めて彼はマナに目を向けた。興味深げな眼差しで。

「君が、マナかい？」

「ええ

「はじめまして。君の夫になるフジオミだ」

優しく微笑う長身のフジオミを、マナは驚いて見上げた。表情を見せると、途端に先程の退廃的な名残は消え失せ、人懐こい和らかな印象になる。

「まあ、あなたがあたしの旦那様なの。はじめまして、あなた。マナと呼んでください。お風呂になさいます？ それともお食事が先ですか？」

「は？」

突然の、わけのわからない発言に、惑つフジオミは、マナの背後でシイナが噴きだした。

「どういう教育をしたんだい、君は」

「マナは今、歴史で『家族』について学んでいるのよ。古い創作書が教科、ディスクなの。少し間違った概念を持っていても大目に見てあげて」

「まあ、いいけれどね」「肩を竦めるフジオミに構わず、シイナはマナに視線を向けた。
「さあ、マナ。残念だけど、もう勉強の時間よ。行きなさい」「でも博士。あたし、まだフジオミといたいわ。お話したいの」「学習が終わつたらいいわ。今日はそれで終わりよ。レストルームで待つているわ。いいわね」

「はい」

膨れた顔をしながら、それでもマナは頷いた。こういうとき、シイナは決して譲らない。そして、約束を破ることも決してないのだ。廊下を駆けて曲がり角まで来たとき、マナはそっと立ち止まり、振り返った。

「」

シイナとフジオミは何か話をしているようだった。マナには気づいていない。もう一度、マナはじっとフジオミを見つめた。

「彼が、あたしの伴侶になる人なのね」

「ほうっ、と、息をついてマナは笑った。

「すごく素敵。優しそうだし。よかつた」

話には聞いていたのだ。夫となるフジオミのことは。

だが、マナはそれまで一度もフジオミに会ったことはなかった。否、シイナ以外の人間と、彼女は接触したことはこれまでになかった。シイナ以外ここにいるのは、みんなドームを維持するためにオリジナルである人間から複製された、クローン体ばかりなのだ。

初めて見る、自分と同じ立場の異性であるフジオミに、マナの興味は尽きない。

じつとシイナとフジオミを見ているマナに、しかし、彼らのもうが気づいた。

マナは驚いたように振り返ったシイナに手を振ると、予定された

今日の 学習 を終えるために学習室へと向かつた。

「どうじゅつもり？」

マナがいたときはがらりと変わった、突放すような口調。シイナは苛立しさを隠さずにつじオミを振り返り、見据えた。視線を受けとめるフジオミは、さほど気にしたふうもない。まるでなれっこだとでも言いたげに。

「まだマナの 教育 は済んでいないわ。計画が完全に終わってもいないし、あなたのことを事前に説明する間もなかつた。あの子はこちらが驚くほど勘が良すぎるの。余計な刺激を与えられては困るのよ。一体どういうつもりなの！？」

強い口調に、フジオミは微笑した。

「いいのかい、マナが見てるよ」

シイナが振り返ると、慌てたように手を振り、すぐに少女は消えた。小さく舌打ちして、シイナはフジオミに向き直る。

「私の質問にまだ答えていないわよ」

「君は確かにこの計画の責任者だが、あくまでもそれは名目上にすぎないということさ。カタオカにも、僕を拘束することはできないしね」

カタオカとは彼等の議長で、現存する一つのドームを統括する、彼らの社会の実質的な指導者である。

だが、指導者は存在しても、独裁はなかつた。完全な権利をもつ人間の数が少ないために、直接民主制なのだ。この社会での決定権を持つものは、クローンではない人間。彼等は全て議員となり、指導者の下、議会を召集し、決議する。議会の承認を得なければ、何も事が運ばないようになっている。それは、かつての彼等の世界にあつた政策の名残だつた。

だが、何事にも特権がある。フジオミもまた、特権を持つべき人間であつた。

「じぱりべりまーじこる。部屋の用意はわたしてあるから不都合はないよ」

「また勝手に話を通したのね！ 私に何の断りもなく」

「じゃあ、許可を」

フジオミは言つ。

「今、許可をくれ。君が許してくれれば、それですむ」

「」

その口調は、拒否されることを全く念頭においていないようにも

聞こえた。

フジオミはもう一度繰り返す。

「シイナ、許可を」

シイナは強く唇を噛んだ。

「好きにすればいいわ。私よりあなたに決定する権利があるのだから」

「結構」

シイナの反応を楽しむよし、フジオミは微笑つた。彼に対する憎悪に近い感情がわいたが、辛うじて、シイナはそれを表情に出さずにするんだ。

「なぜここへ来たの。あなたはこの計画に乗り気ではなかつたはずよ」

きつい口調にフジオミは軽く肩を竦める。

「君に会いたかったからだと言つたら？」

シイナは表情を変えることもなく、じつとフジオミを見つめた。それ以外、何の反応もない。

あきらめて、フジオミは吐息をついた。冗談の通じないことはわかつてゐるらしい。

「正直なところ、考えが変わったのを」

「考え？」

「ああ。食わず嫌いはやめることにするよ。相手を知らなきや、好きになリよつもないだろ。なるべくなら、相手にもいやな思いはさせないよ」

せたくないしね」

シイナは、侮蔑の感を隠さず口に吐ついた。

「あなたに、相手を思いやる気持ちがあるところの？　自分のこと
にしか興味がないくせに。あなたにとって重要なのは、自分の楽し
みだけでしうに」「たこ

だが、シイナの言葉にも、フジオミは気にしたふつもなく頷いた。
それが事実であることを、彼自身が認めていた。

「だからこそ、楽しめるよう努力するのさ。せめて自分が不快にな
らない程度にね」

永い歴史の中で、今、人という種が滅びを迎えるとしていた。

原因はわからなかつた。ただ、徐々に人間から、生殖能力が奪われていた。それがどの種族にも平等に訪れたことは、大いなる運命であつたのかもしれない。

半世紀ほど前に、人類のほとんどは地球上から消え去つたと推測される。最初に、陸続きであるコーラシア、アフリカ大陸に住む人間が死に絶えた。なぜか死は、感染するかのように広大な大陸にいる人々に襲いかかつていつたのだ。

そうして、オーストラリア、アメリカ両大陸に住む人々も相次いで死に絶えた。

かつて『日本』と呼ばれた経済大国は、辛うじて現在までは生き長らえた。だが、彼らを絶滅から救つたのは、島国であつたということだけが原因ではなかつた。

人類の滅亡が戦争や災害ではなく、生殖能力の衰えによつてもたらされると発表されてから、世界は恐慌状態に陥つた。日本も例外ではない。それ以前からの著しい人口の激減により、日本人の総数は、全盛期の半数にも満たなかつたといつ。それでも、他国からの移住や帰化を特例としてしか認めなかつたこの国は、自らの滅びは己れの国だけで迎えることを選んだのだ。

彼等の社会を支える支柱となつたのは学者達だつた。生物学、遺伝子工学、人類学その他の専門的な知識を持つ者達が来たるべき時に備えて日本社会を根本から覆した。

いわゆる、鎖国 状態に入ったのである。

科学技術の粋をこらしてドームという完全なる閉鎖空間を作り出し、外部からの接触をいつさい排除した。

その当時では、己れのことに手いっぱいだった他国は、どこもこの小さな島国に関心を持たなかつた。もちろん国内での反対もあつたが、元来己れの国以外を排除しがちな状況であつただけに、強行突破されてしまえば、人々は意外にすんなりとその対策を受け入れ始めていった。

ただ、前回と違うのはどの国との交渉も完全に断つたということだ。

その頃までには、彼らはあらゆる弊害を克服していた。

人口の減少に加えて、完全自給自足がなつたこの小さな島国は、ただ自分達の血脉が永遠に生き続けることだけを考えればよかつたのだ。

だが、いかなる高度な技術をもつとしても、生命の領域を支配することはできなかつた。

現在、この島に存在する人間は、登録上で一百人たらず。ただし、純粹な人間は、その四分の一にも満たない。そのほとんどは、クローニングによる複製体であつた。そして、複製体のほとんどは、世代を重ねるごとに生殖能力をもたずく産まれるようになった。

クローンは、もはや人間とははつきりと区別されており、労働用として扱われている。

生殖能力を失いながら細々と続く人間が終わりを迎えていく一方で、彼らはクローニングによる技術を駆使して、彼らの社会を保ち続けた。その奇妙な形態こそが、彼らの未来をねじまげていくことも気づかぬまま。

ねじまげられた未来にからうじて生き残る人間達。

それが幸か不幸かは、彼ら自身にさえ、すでにわからなくなつていた。

突然のエマージェンシー。

この時、学習を終えたマナを迎えて、フジオミとシイナは研究区のレストルームでコーヒーを飲みながら休憩を取っていた。初め、三人は驚いたものの、ちょっとしたミスだろうと深刻には考えなかつた。

だが、一分を過ぎてもやまない警報に、徐々に彼等の内に奇妙な不安が沸き上がる。

「何が起つたんだ？」

「わからない。事故かもしない。ここから動かないほうがいいわ。

管理区域に通信しましょう」「

シイナが、机上のコンソールで管理区域への通信を始める。数秒してスクリーインとは違う壁面の大きなモニターに、クローン体の職員の姿が現われる。

「何があつたの？」

『侵入者です。何者かがラボの通風口から侵入しました』

その耳慣れない言葉に、マナが息をのみ、フジオミが問い返す。

「侵入者？ そんなものが、外から来たつて言つのか。馬鹿なことを言わぬいでくれ」

何処かのんびりした問いかにも、無理はなかつた。自分達を取り巻くこの世界に、外敵がいようはずもない。彼らはそれを事実として知つていたのだ。

『ほ、本当なんです。そちらに向かっています。早急に退避してください』

「動物じゃないのか。ある程度知能があれば、通風口に入り込むこともある

「生体反応を確認したの！？ 監視モニターが捕えたものをこっちにまわしなさい、はやく！！」

苛立たしげにシイナが叫ぶ。

モニターが切り変わり、侵入者の姿を映した。

「！」

その瞬間、モニターのディスプレイに大きな木製のテーブルが投げつけられた。同時にスクリーンの風景が消え、窓のない部屋は人工燈の明かりだけが浮き彫りになる。

「きゃあ！！」

マナの悲鳴。

モニターに氣をとられたシイナとフジオミが振り返る。

「」

薄暗い視界の中、ぐつたりとしたマナを抱きあげている者に、フジオミは愕然とした。それは、未だかつて彼が目にしたことのない、不思議な容姿だった。

抜けようのない白い肌。銀糸のような髪。見据える瞳は薄闇でもそれとわかる、炎のような赤だった。マナと同じくらいの少年だ。声も出せずに、フジオミはその少年を凝視していた。

「コウ！！」

シイナが叫んだ。

それがフジオミにさらなる驚愕を与える。今、シイナは少年の名前を呼んだ。彼女は彼を知っているのだ。

赤い瞳が鋭くシイナを睨んだ。だが、すぐに踵を返して部屋を出ていった。マナを抱いたまま。

「待ちなさい！！ マナをどうする気！！」

シイナが後を追う。フジオミが数秒遅れて続く。マナ一人を抱えているというのに、少年の速さは一人を凌いでいた。

「シイナ、君はあの子を知っているのか？ 何だ、あの異様な姿は

「

シイナは彼を見ようともしない。ただ前だけを見つめていた。そ

の顔色は心なしか青ざめていた。

「実験体よ。まだ生きていたなんて

」

忌ま忌ましげな呟き。走りざまに、シイナは廊下に備え付けられた非常時用のエマージェンシーコールをメインコンピュータに送り込む。彼らの前後で、両脇の壁から出てきた扉が廊下を仕切つていく。

彼らの前の通路も仕切られていくが、シイナは手慣れた手つきで扉につけられたコンピュータパネルを操作し、前へ進む。

フジオミはシイナに従い、ユウと呼ばれた少年とマナを追うが、途中奇妙なことに気づく。

非常時には、通路を仕切る全ての扉とエレベータは自動的にロックされ、特別なコードでなければ開かないようになっている。だが、最初の扉以降、シイナが開けるより前に開かれた扉は、壊したふうもなく、真っすぐに非常階段へと向かっている。内部構造に詳しくなければ、こんなことはできない。

これは事実だ。

明らかにあの少年はここを熟知している。

シイナは少年を実験体だと言つた。

（しかし、一体何のだ。なぜ、そんな少年が、よりもよつて 外からやつてきたんだ？）

このドームを離れては、我々人類は生きられないというのに。

そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

普段はめったに使わない非常階段をかけおり、シイナとフジオミは一階を目指した。

一人で逃げるのとはわけが違う。少年はマナを連れている。出でいくとしたら、入ってきた通風口からは不可能だ。

そして、それ以前にシイナはよくわかつていた。

（これは報復だ。自分に対する）

だからこうして、追つてこいとでも言わんばかりに逃げている。

一階へ着くと、奇妙な騒めきに満ちていた。外へ通じる扉の前に

は、少年がいる。そして、作業員であるクローン達は、それを遠ま
きに見ているだけ。無理もない。誰もこんな事態を予想だにしてい
なかつたのだから。

「マナに傷一つでもつけたら許さないわーー！」

シイナの叫びにも少年は無言だった。信じられないことに、ロッ
クされたはずの扉を手も触れずに開け、外へ消えた。

「マナーー！」

シイナが開け放たれた扉へとかけよる。吹きつける風は一瞬奇妙
な渦を描いたが、すぐに止まつた。

「

そして整備された敷地の遙か彼方の草地にすら、シイナとフジオ
ミは一人の姿を見つけることはできなかつた。

「なんてことなの……マナがさらわれるなんて……」

「

ひつきりなしに届く不快な音が、覚醒とともに大きくなつていいく。それはマナにとつては、紙が散らばる音に聞こえた。たくさんの紙が、床に落ちていく音。心の何処かで、それは違うとも思つてたが、他に思い当る音を知らなかつた。そんな音を聞きながら、マナはゆっくりと瞳を開けた。

「

始めて視界に映つたのは、薄暗い天井の壁だつた。光の明度も彩度も、マナが今まで見たことのないものだつた。まだ夢を見ているのかもしれない。そう、マナは感じた。何故、こんなに暗いのだろう。さつきまで、あんなにも明るかつたのに。一、二度瞬きをしても、マナに視界の光の加減は変わらなかつた。だが、背中にあたる、ベッドの感触が違う。体に触れているシーツの感触も。

奇妙な違和感が、徐々にマナの意識を覚醒させていく。

(何かが違う)

五感の全てが、訴えかけていた。

マナは飛び起きた。

そして、視界にその少年を見いだして驚く。

「

見たこともない容姿だった。彼女が今までに見た人間やクローンは皆髪も瞳も黒かつたのに。

だが、ここにいる少年は違う。銀の髪に赤い瞳。抜けるような白い肌を持っている。

「あなたは、誰？」

「コウ」「

低い声で、少年は名を叫びた。端正な容姿は、まだ少し、少年らしいあどけなさを残している。

「ここは、どこ？」

「ドームの外だ」

「えー？」

「ドームの外だ」

繰り返し、少年は叫んだ。それでも、マナはその言葉が信じられないかった。

さっきまで自分はドームにいたのだ。それなのに、どうして。マナの思いを察してか、少年は身体を預けていた壁面の布から身体を離し、それをざつと横に引いた。

布のかけられていた壁にはそのままガラスをはめこんである。この剥出しの作りは、何世紀か前の物だと彼女は確信する。そしてその向こうには、彼女のまだ見たことのない世界が広がっていた。

「嘘……」

思わずベッドから立ち上がり、窓に駆け寄り、そのまま立ちすくむ。

薄闇よりも濃く影を落とす巨大な闇が見える。

それは全て前世紀の遺物だった。

かつては繁栄を極めただろう高く聳え断つ建造物は、今は見る影もなく廃れ、錆びれ、崩れかけている。今いるこの部屋も、それと同じ廃墟なのだろう。

窓の薄闇の中、聞いたことのない騒めきがひしひしひに耳にこだまする。

窓の端に映る、外に蠢く巨大な影。

マナの恐怖はこよによ高まる。

「いや…あたしを帰して。」そのままじや死んじやう、ドームに帰して…

「死ぬ？ あんた、病気なのか？」

訝しげにコウが問う。しゃがみこんだマナに、近づいてくる。

「いや、傍に来ないで…」

恐怖で、マナは混乱していた。

その眼差しを、少年は強ばつたような青ざめた顔で見ていた。

「俺が恐いのか？ あんたたちとは違う姿だから、恐いのか？」

「」

「でもこの姿は、俺が望んだものじゃない」

コウは苦々しげに顔を歪めていたが、今のマナにはそんなことを思いやる余裕はなかつた。

その時、一枚ドアの向こうで声がした。

コウが振り返る。

マナはいよいよ身を竦める。

「コウ、帰ってきたのかい」

「おじいちゃん」

ドアが片側だけ奇妙に斜めの角度で開いた。

部屋に入つてくる人物を見るなり、マナは悲鳴をあげた。

薄汚れた見慣れぬ型の長衣を身に纏い、長い杖を持つた老人の姿は、マナの瞳には異様にしか見えなかつた。髪は見事な白髪で、同じく白い髪が顔の下半分を覆い胸までどぞいてこる。

「おやおや、嫌われてしまつたようだの」

さほど氣にしたふうもなく、老人は微笑つた。微笑うとかすかに見える皺のある肌に、さらに深い皺が刻み込まれる。だが、マナは顔を両手で覆つたまま震えている。声を殺して泣いているようだつた。

老人はその様子を眺め、それからコウに視線を向ける。

「コウ、その子のお守りはおまえに任せることにしよう」

「おじいちゃん…！」

「私を当てにしていたのかい？ それは見当違いといつものだよ。私は反対した。おまえは聞かなかつた。おまえの行動は、おまえが責任をとりなさい。お休み」

ゆつくりと杖に体重を預け、老人はユウに背を向けて、来たときと同じに静かに部屋を出ていった。

ゆつくりと、ユウはマナを振り返つた。

「マナ、泣くなよ。おじいちゃんは恐くない。優しい人だ。それに俺、あんたを殴つたりとか、そういうことしたりしないよ」

優しくかかる声。だが、マナは泣きじゃくつたまま首を振り続ける。

「いや。いや。帰りたい。博士のところに、フジオミのところに帰りたい」

「マナ……」

自分にのびてきた手を気配で感じ、マナは心底怯え、身を竦ませた。両手で顔を隠し、少しでもこの恐怖から逃れる術を探した。だが、震える身体は、やがて何の危害も与えられないことを訝しみ、恐る恐る顔をあげた。

ユウはそこから動かずに、じっとしていた。目が合つて、振り切るようすに視線を逸らす。

マナは、自分の反応に傷ついた顔をしたユウに、驚いた。

それは、高ぶっていた感情を落ち着かせるのに、十分だった。

涙が、いつのまにか止まった。

そのまましばらく、マナは少年を凝視し、少年は唇をきつく咬んだまま顔を背けていた。

彼は別に、危害を加える気ではないのだ。自分一人が恐がつているだけなのだ。そう理解すると、まだ少し恐怖は残つたが、心には余裕ができた。

ユウは動かない。

マナはゆつくりと立ち上がり、ユウのそばへと近づいた。

実際に行動することで確かめると、今度は疑問が浮かぶ。

なぜ彼は、自分をここへ連れてきたのか。

「…ユウ…？」

それでも、ユウはマナを見ようとまじなかつた。

「俺はただ

ためらうような低いユウの声が、マナの心に素直に届いた。

「あんたと、話をしたかったんだ」

「ユウ…」

ユウはとても淋しそうに見えた。

「ここには、あなたたちしかいないの？」

「ああ

では、無理もない。あんな奇妙な人物と一人だけなんて、自分になら耐えられない。

ひとりよがりな解釈を、マナはした。そう考えると、彼女はユウが可哀相になつた。

「ひとりだったの？」

「ああ

「淋しかつたの？」

「ああ

ゆつくりと、マナはユウへ手をのばした。

ユウは動かなかつた。

少し安心して、マナはユウの手を優しく握つた。

ユウは、奇妙な顔つきでマナを凝視している。

マナはまた少し不安になつたが、笑つて言つた。

「手をつないでいると、あたたかでしよう？ 具合が悪くなると、博士にこうしてもらつたの。こうすると、淋しくないのよ」

促されて、ユウはマナの横に座つた。手はつながれたままだ。

不思議なことに、触れた手から、波のように穏やかな感覚が伝わる。そんなことは、今までにはなかつたが、それが逆に、マナを落

ち着かせた。

「あたし、まだ少しあなたが恐いの。だから優しくして。怒らないで。そうしてくれたら、あたし、あなたといても恐くなくなると思うの」

「ウは不思議そうな顔をしてマナを見つめた。

「恐くなれば、俺といてくれるのか、マナ?」

「ええ」

「どうすれば、恐くない?」

真摯な眼差しを、コウはマナに向けた。マナは少し戸惑った。

赤い瞳がじつとこちらを見つめている。見れば見るほど、コウの容姿はマナには不思議なものに思える。

「その瞳」

「え?」

「あなたの瞳で見ると、みんな赤く見えるのかしら?」

「」

しばしの間をおいて、コウは声をあげて笑った。その表情は歳相応にあどけなく、マナの恐怖心を残らず拭い去るには十分だった。

「ひ、ひどいわ。あたし、本気でそう思つたのに」

「じゃあ、マナの瞳は茶色いけど、みんな茶色に見えるのか?」

「ち、違つけど、でも、本当に、綺麗な赤だから」

「綺麗?」

コウは訝しげな表情でマナを見つめた。なぜそんなことをいつの間にかわからないといった表情だった。

「綺麗よ。濁つてない、本当に綺麗な赤。あたしも、こんな綺麗な色だったらよかつたのに」

マナは顔を近づけて、じつとコウの瞳を覗き込んだ。

「ずっと昔には、もっとたくさん的人がいて、ここだけじゃない、海の向こうの別の大陸で生活していたんですね。その人達は、あたしとは違う種で、髪の色も瞳の色も違うの。金の髪や銀の髪、瞳の色は青や緑。あなたみたいな赤い瞳をしていた人も、きっといた

「マナは変わってるのね

「変わってる?」「

「誰も俺の髪や瞳のことは話さなかつた

「どうして?」

「俺がこの髪と瞳を嫌いだからさ

「こんなに綺麗なのに?」

「そう面と向かって言つたのはマナだけだ。だからマナは変わってるのさ」

「綺麗なものは大好きよ。だから、ユウの髪も瞳も好きだわ」「

膝の上に頭を預けて、マナはユウへ視線を向けた。

「どうしてかしら。さつきまで、あなたがとても恐かったの。でも、今は違う。何だか、初めて会つた気がしないの。懐かしいような気が、するの。変ね。本当に、初めて会つたばかりなのに……」

話し疲れたのか、いつのまにかマナは微睡み始めていた。睡魔にまけて、田蓋が閉じられた。

「マナ?」

ユウはそつと名前を呼んだ。だが、返事はない。ユウはマナの顔を覗き込んだ。まだ幼い少女の寝顔に、ユウは苦痛に耐えるかのような表情を向けていた。

「

そうして、朝が来るまであどけない寝顔を見つめていた。

外が明るくなつていぐのに気づくと、ユウはマナを起こさないよう静かに抱き上げ、ベッドへと横たえた。そして、そつと部屋を出た。

階段を下り、すぐの部屋をノックする。

返事はないが、ユウはドアを開けた。中に入ると開いたままの力一テンから差し込む光で、すでに部屋は明るかつた。

老人はベッドにはいなかつた。窓に斜めに背を向けた振り椅子に腰を下ろしていた。

ユウは黙つてそちらの方へと向かつた。

目を閉じていても老人が起きていることこ、気づいていた。

明けてゆく薄紫の中で、振り椅子の軋む音だけが静かに響く。明るく照らされた老人の顔に、まだそう濃くならない影が優しく落ちた。

「おじいちゃん」

「気がすんだかね」

ゆつくりと老人は目を開け、ユウに手を差し伸べた。

ユウは黙つてその手をとる。

「ごめん、おじいちゃん。俺、悪いことをしたよ」

「誰に対して、悪いと思つているんだね？」

「」

「ユウ、あの娘はおまえの望むものにはなれんよ。それを、忘れんようにな」

「わかつてる」

ユウは静かにその場に座り込んだ。

失われたものを求めるのがどんなに愚かなことか、ユウはすでに知つていた。

「でも、おじいちゃん。マナは、俺の手を優しく握つてくれたよ。朝になるまで、そうしてしてくれた」

「」

「おじいちゃんと同じに、あたたかな、手をしてた……」

ずっと、欲しいものがあつたのだ。ずっとずっと、それだけが欲しくて。

「ちゃんとわかつてるよ。子供じゃないもの。俺だつてもう、わかつてるんだ」

瞳を閉じて、ユウはそれきり動かなかつた。老人は優しく、ユウの髪を撫でていた。

マナが田を覚ましたのは、太陽が顔を出してからだった。いつのまにかベッドに横たえられていたことに気づき、起き上がるとまず窓へと向かつ。

青い空に浮かぶ雲は、流れるように動いていく。

初めて迎える朝の明るさと、熱、光の強さは、皮膚に心地よい刺激を与えてくれた。

崩れた廃墟の群れから顔を出す巨大な樹木は濃い緑を風に揺らめかせていた。

「昨日の音は、これだつたのね」

木々の騒めきも、昨日と違つて優しく耳に届いた。

地は足の長い草が一面覆い尽くし、風の方向を指し示し、靡いていた。

風に揺れるたびに微妙に色を変える緑達。

「ああ なんて綺麗なのかしら…」

これまでになく、マナは眼に見える美しさというものを実感した。直に見る自然の景色に、これほどまでに感じるものがあるのだと

いつも、彼女は知らなかつたのだ。
もっと身近に、見て、感じてみたい。

思つてしまえば、後は簡単だつた。

やり方もわからない鍵も、試行錯誤で解いて窓を開ける。

一斉に風がマナの長い髪を後ろへと靡かせた。

「きや

その勢いに、思わず瞳を閉じる。

眼に見えない何かがぶつかつてくるような、そんな突然の感覚だ

つた。

強いだけの感覚は、やがて身を包むように穏やかで優しいものへと変わる。

マナは自分の髪が緩やかに背中に触れては離れるのを確認して、瞳を開けた。

剥出しの手が、風にさらされている。

開いた指の隙間を、風が抜けていく。

ただそれだけのことが、マナにひとつでは風に触れているという重大な現実だった。

風を感じていることも、全てが夢のようすで、けれども確かな現実なのだ。

いつしてここに立つてみると、昨日までの自分のいたあの銀色のドームがいかにもつくりものめいた絵空事のようにも思える。

それほど、マナのこの体験は深い衝撃を彼女に与えたのだ。
「なんて綺麗なの。こんな世界が、あつたなんて……」

チチチと、木々のざわめきの間から聞こえる音。

マナはどこかで聞いたことがあると思った。ビードだつただろう。ぱさぱさと、梢の間から飛び出したものを見て、マナは納得した。

「鳥ねー 鳥のさえずりだわー！」

以前学習した教科ディスクの中にあった映像を思い出していた。種類はもう覚えていないが、小さな可愛らしげ鳴き声は、記憶の隅に残っていたのだ。

「なんていう鳥のかしら」

聞いてみようと思つて、そこで、はたとマナは気がついた。

「コウがない。

周囲を見回すと、奥のドアは開きっぱなしになっていた。

顔を出して覗いてみると、そこは長い廊下だった。

廊下の両脇の壁には、今マナがいる部屋と同じ造りのドアが等間隔に備え付けられていた。

「コウ……

呼んでみたが、返事はない。

左側に視線を向けると、階下へと通じる階段の手摺りに気づいた。たくさんのドアをあけてユウを探すより、まず下へ降りてみよう

とマナは考えた。

マナは知らなかつたが、この廃墟はかつては多くの人間が宿泊する場所として使われていたのだ。その階だけでも部屋数は多くあつた。

階下へ降りてみると、造りが変わっていた。外へ通じる、これまたガラス張りの入り口がある。広い空間だが、四方にどこへ続いているのかわからない細い通路がたくさんある。階下へと通じる階段のすぐ隣の部屋の扉だけが開いていることに気づき、マナはそつと覗き込んだ。

ユウと老人がいる。

老人は木でできた椅子に座つていた。

その膝に頭を持たせて、ユウは動かなかつた。

初めて見たときは驚いたが、もう老人の姿に怯えることはなかつた。

どうしてあんなに怯えたのか、今は不思議なくらいだ。

「

何だかひどく、その光景はあたたかくて、なぜかマナには声がかけられなかつた。どうしようかと考えてしばしおぎた時、

「マナ？」

不意に、ユウが気づいた。

マナのほうが驚く。

互いの視線が相手を認め、ユウは慌てたように老人から離れた。

「あの、あたし、目が覚めたら誰もいないから」

ユウはマナに声もかけずに部屋を出る。

走るように細い通路の一つへと消えていく。

「マナ、入つておいで」

振り椅子に座つたまま、老人は声をかけた。

「ユウは朝食の支度をしに行つたんだよ。それまで、私の相手をしておくれ。おまえさんに話があつたんだよ」

マナは言われたとおり部屋へと入つた。

老人の傍のベッドの上に座る。

「あの、昨日はごめんなさい。あたし、驚いてしまつて、それで」

老人は首を軽く振つて微笑んだ。

「いいんだよ。人間は、未知なるものを恐れるようにできている生き物だ。知つた上でどう判断するかが問題なのだよ」

マナは、その穏やかな老人の態度に安堵した。

そうなつたら、今度は好奇心を押さえ切れなくなつた。

「ユウとあなたは、どうしてこんな廃墟に住んでいられるの？ こ^こは古い時代に造られたものでしよう？ 管理システムのない不^便な建造物だとディスクで見たのに」

「ドームでしか生きられない、教えられたのかね？」

マナは素直に頷く。

「だが、私達は生きている。人から教えられることも大事だが、自分で実際に確かめ、知ることもとても大事なことだ。おまえさんは私達とともに一晩この廃墟で過ごし、何事もなくこつしてここにいる。それが、おまえさんの判断すべき事実なのだよ」

事実。

その何度も使い古された言葉は、老人の唇から語られると、ひどく重要な響きを持つているように感じられた。

「私達は登録を抹殺された人間なんだよ。もつゞれぐらい前ながらわからないが、我々の何十代か前の祖先が、ドームを離れて外の世界で生きることを選んだ。わずかな機器と、食料となるだろう種子を持つてな。当時の生活は困難を極めたと聞くよ。無理もない。それまでの人々は、全てを機械に頼つて生きていたのだから。挫折して戻つていった者もいたという。だが、残つた人々はこの世界と

バランスよく共存することを学び、そうして私達の代まで続いてきたのだ

「信じられない。そんなことが、可能なの…」

「マナ、おまえさんは、今までドームの中の世界しか知らなかつただろ？が、もひとつと、それこそ気が遠くなるほど遙かな昔には、我々はこの空の下で自由に生きていたのだよ」

「」

「昔の人間にできたことが、今の我々にできないと思うのかね。身体的に、退化したわけでもない。退化したのは、精神の面においてなのだよ」

深い、心に染み透るような声を、マナは聞きもらさないようじつと耳を傾けていた。

「どんなに時が過ぎようと、世界はいつでも我々に優しい。それを先に切り捨てたのは、我の方なのだ」

老人は、大きな窓から見える、足早に影を落としては去っていく雲を、瞳を細めて見送った。

その顔は、この景色を愛おしむ想いに溢れていた。

「外の景色を見て、美しいと思わんかね。この世界は、美しい光と色に満ちている。どの時代より、きっと今、世界は一番美しいだろうと私は思っている。

この廃墟が、かつてはこの地の至る所に立ち並んでいた時代、大気は汚れ、水は淀み、地は腐り、木々は死んでいた。

だが今、大気は澄み、水は潤い、地は清らかに、木々は優しく歌う。

連鎖という言葉を知っているかね。全ては循環するのだよ。植物も、動物も、もちろん人間も、全てが等しく地上をめぐる生命の環の中にあつた。

だが、人間はいつからかその環の中から外れてしまった。この時代の中で、今は人間だけが異質なのだ。我々がこのような時代を迎えたのも、当然のことなのかもしれん…」

「 」

マナは正直、老人の言つことを全て理解できたわけではなかつた。ただ、熱心に聞き入つていたそのわけは、老人の言葉が今までマナの学んだどれにも当てはまらなかつたからだ。

抽象的な概念と証明のない思想。

マナはそのことにとても興味を覚えた。

物思いにふけるマナに穏やかな視線を向け、老人は言葉を繋ぐ。「ユウを、許してやつておくれ。あの子はまだ子供だ。我々が大事に大事に甘やかして育ててしまつた。優しい子だが、とても淋しがりなのだ」

「あなたが、いたのに？」

「私がいてもだよ。あの子にとつて必要なのは、決して手に入らないものだ。それ以外の何を与えても、あの子は決して満たされないのだ」

「ユウの欲しいものつて？」

「決して会えないもの。決して許されないもの。決して愛せないものの。あの子が望んでいるものは、そういうしたものだ。あの子自身がそれを一番よく理解している。だから、淋しいのだ。

そして今、ユウはおまえさんの中に、手に入らなかつたものを重ねている。だが、おまえさんはそれにはなれない。おまえさんはいずれ戻る子だからな。すまんが、それまでは私達と一緒にいておくれ。ユウも落ち着けばおまえさんを返す氣になるだろう」

「いいわ。あたし、ここが何処かもわからないの。ひとりでは帰れないわ。きっともう少ししたら、博士が来てくれるかも知れないし、それまでは一緒にいてもいいわ」

「ありがとう、マナ。おまえさんは優しい子だね。では食堂へ行こうか。きっとユウが朝食を作ってくれているはずだ」

老人が杖を支えに椅子から立ち上がり、ドアに向かつてゆっくりと歩きだす。マナはその後ろ姿に、無意識のうちに呼び掛けていた。

「おじいちゃん」

呼んでから、マナは狼狽えた。

呼んでみたかったのだ。

ユウガ老人をそう呼ぶのが、とてもあたたかく、優しい感じがしたから。

振り返った老人は、そんなマナの動揺を気にしたふうもなく、次の言葉を待っている。

「そう、呼んでもいい……？」

ためらいがちにかかる声に、老人は穏やかに微笑う。

「ああ。いいとも。さあ、食事にしよう

「シイナ。連絡は受けている。詳しい状況を説明してくれたまえ」
シイナがその部屋に入るなり、重みのある穏やかな声がかかる。
「説明なら、後でいやというほど」報告します。それよりもカタオ
力、すぐに捜索隊を編成してください。一刻も早く、マナを取り戻
さなければ」

カタオ力は、椅子に腰掛けたままシイナを見つめていた。五十年
の貴禄を備えたこの男は、シイナの焦燥とは裏腹に、落ち着いてい
た。

「待ちたまえ。そんな大がかりなことを私一人で決めるわけにはい
かない。議会を召集しよう。議員にすぐ集まるように言つ。一日待
つてくれ」

「一日つ！？ あなたにはことの重要さがわかつていないのでですか
！？ サ拉われたのは、マナなんですよ！？ 彼女は、我々人間に
残された唯一の女性なんです。彼女を失えば、私達は滅びるだけだ
というのに、なぜそう悠長に構えているんです」

「無駄に焦つてもよい結果は生まれない。マナはさ拉われたのだろう
？ ならば生命の危険は、今のところはないのではないかね。マナ
の命が目的なら、彼が侵入した時点で実行されているだろう」

「だからといって、この先もマナに危害を加えることがないと、言
い切れますか。我々人間は外界の苛酷な環境に耐えられるほど強く
はない。マナもそうです。急激な環境の変化に、マナが耐えられる
のかもわかりません。一刻も早く救出しないと

「だが、捜索を開始しようと、行き先に、見当はあるのかね。外
は広い。捜索は日数もかかるだろう」

「指揮なら私がとります」

「いや、それはいかん。君にはドーム内を統括する役目がある。こ

「には、君は必要不可欠なのだ」

「

悔しいことに、それは事実だった。研究区域の統率だけではなく、シイナは事实上このドームを統率していた。もともとの統率は力タオ力が行なっていたのだが、数年前から彼はこのドームの全権を彼女に委ねていたのだ。

「では、今すぐに議会の召集を。急げば明日の朝には議会を開けるはずです。

あなたは我々の議長です。数少なくとも権限はあります。今すぐ行使してください」

言い捨てるど、もう用はないといわんばかりの態度で、シイナは部屋を出、足早に進んだ。苛立たしさが足取りをも急がせる。

「議会は召集されることに?」

前方からかかる声。

視線を向けると、フジオミが浴室扉のすぐ脇の壁に背を預けて立つていた。

「あなたはまた出席しないつもりなの」

「僕には、あえて発言すべきことはないよ。例え時間がかかるうとも、君の望みは通るだろう。そのためだけの議会だ。僕が出る必要はない」

言いうつに、シイナは苛立った。自分の行動を揶揄しているようにも聞こえる口調を、彼女は昔から大嫌いだった。

「この世界で一番嫌いな男。

なぜこんな男がいるのだろう。

自分がどれだけの義務を背負っているのか、真に理解してもいいない。

ただ己れの快楽のためのみに生きていく。

一番腹立たしいのは、そんな男でも、この世界で一番必要だとう事実だ。

唇を強く噛んで動かないシイナを、フジオミは訝しげに見つめた。「疲れているようだね。そんなに気を張りつめていると君のほうがまいってしまうよ」

「あなたは何とも思わないの!? もうわれたのは、あなたの 伴侶なのよ!!」

見当外れな配慮に、シイナは堪え切れずに叫んだ。

しかし、思いもかけないシイナの怒りに、フジオミは一瞬戸惑いはしたもの、すぐに納得したように肩を竦める。

「愛しいと思うほどには、まだ愛していないからね」

そんな飄々とした彼の態度が、シイナにはますます腹立たしかった。

「あなたといふと苛々する」

言い捨て、その場を去ろうとするシイナを、フジオミは興味深げに眺めていた。まるで玩具の動きを楽しむかの如く。ややあつて、シイナの背後に声がかかる。

「じゃあ、僕の性欲の処理は?」

立ち止まるシイナ。ゆっくりと振り返る。

「マナがまだなら、君が当然相手をしてくれるんだろう? わの義務だ」

「今がどういう状況かわかつてゐるの!? あなたは

「僕は正直な質でね。嘘はつけない」

悪怯れずに言うフジオミ。

シイナは叫びだしかけたが、結局それをやめた。あきらめたようにフジオミの脇を通り抜け、彼の部屋に入ると、乱暴に白衣を脱いだ。

「そこまでにしておいてくれよ。僕の楽しみがなくなる」

フジオミの楽しげな声に、シイナは激しい嫌悪を覚えたが、黙つ

て彼が近づいて来るのを許した。

「半月ぶりだけど、君は、誰かと寝た？」

「くだらないことを。こここの職員はクローンよ。あなたのように性欲があるわけないわ」

「それは結構」

フジオミは慣れた手つきでシイナの身につけているものを剥いでいく。

シイナは彼とのセックスが何よりも嫌いだった。

所詮無駄な行為だとわかつてゐるのに、なぜこの男の欲望はつきないのだろう。

遙か昔、人類は性交を繁殖のためではなく己れの快楽のために行なつていたという。

人間だけが、繁殖期を持たずに欲望を脳でコントロールする。それは人類の始祖が直立歩行を始めた進化の過程からだという。

そしてその時から、人類は地上を支配する征服者としてあらゆる生物の上に立つた。

地上を支配し、その繁栄を極め、もてあましていた人類は、もはや繁殖のための性交を必要としなくなつていたのだろうか。

自然界では、繁殖のための伴侶を選ぶ権利があるのは雌だ。けれど、人間は違う。人間

は何においても雄 男が権利を優先している。同じ動物でありながらのこの違いは、一体何に起因するのだろう。

答えは簡単だ。シイナは思う。

人間は 特に男は、繁殖を重要視しないのだ。だからこそ他の動物と違い、女を軽んじ、奴隸のように扱い、力づくで従わせ、己れの快楽のためのみの性交を続ける。

やがて人間からは生殖能力が奪われた。

それと同時に性欲も奪われた。一握りの特別な人間を残して。

自然に反した形態が、今日のような結果を齎らしたのだとすれば、男性優位の人間社会が滅びの一端を担っているのだと言つても、あ

ながち嘘ではないのかもしない。

しかし、繁殖という自然界の掟に反して行なわれる性交の結果がこれだとすれば、人類はなんという重い代償を支払ったのだろうか。

「何を考えてるんだい」

耳元にささやく声に、シイナは思考を中断される。

フジオミもまた、今までの男達と同じに愚かな行為を繰り返している。

それなのに、やはり彼は選ばれた者なのだ。彼の中には昔のままの血が流れている。強い欲望と、命への渴望と、未来への希望が。それだけは、認めざるをえない。

「何も

ベッドに押し倒されて、唇が重なる。愛撫する手に、じつとシイナは耐えた。早くこの行為が終わってくれることを。

「

フジオミの手は、身体の奥の、忘れ果てていた記憶を甦らせる。それが、いやだった。

シイナには、もともと性欲はなかった。

フジオミの相手をするようになつてからも、自分の内に性的な欲望が芽生えることはなかつた。

それ自体に、嫌悪さえ感じていた。

だが、フジオミは違つた。

彼は正常な男性だつたし、性欲を処理する相手が必要だつた。

生殖能力のあるものは同性との性交は禁じられていたので、必然的にシイナが相手にならざるをえなかつた。

彼女はすでに自分に生殖能力がないことを知つていた。

生殖のない行為は無駄だと彼女は議会で述べたが、却下された。

それは彼女に与えられた義務であると。

そして、シイナはフジオミに抱かれた。

初めてフジオミと寝た時のことを、シイナはまだ覚えている。

二人とも、十四歳だった。

シイナにとつてそれは恐怖以外のなにものでもなかつた。身体を愛撫される嫌悪と、貫かれる苦痛に、彼女は泣き叫んで解放を求めた。

だが、フジオミは己れの欲望を満たすまで、決して彼女を解放しようとはしなかつた。

そして、彼女は悟つたのだ。

生殖能力のない、けれど女性体である自分はただ、この男の性欲の処理として扱われるだけなのだと。

その事実は、彼女の誇りを踏み躡つた。

全てにおいて他より抜きんでていた彼女であつたが、子供が産めないということだけで、自分の意にそまぬことを強制され、従い続けなければならないのだ。

それは、隸属以外のなにものでもない。

決して対等の人間として扱われることのない怒りが沸き上がる。

彼女は己が身を呪い、疎んだ。

だが、それ以降何度もフジオミに抱かれても、彼女はただ従順に従つた。

決して泣き叫ぶことはしなかつた。

それこそが、彼女に許された唯一の自尊心であつたのだ。

シイナにとつて苦痛としか言えない行為が終わり、彼女はすぐに衣服を身につけた。

部屋を出でていこうとするシイナに、背後からフジオミが声をかけた。

「質問を、いいかい？」

シイナが振り返る。

「手短にして」

その場で聞くつもりだ。

「ユウという少年のあの姿は何だ？ 見たこともない容姿だった。奇形か？」

「遺伝病よ。言つたでしょ、ユウは実験体なのよ。失敗した、出来損ない」

「人体実験をしたのか」

かすかに非難めいたフジオミの口調にも、シイナは動じない。

人体実験は、過去幾度となく繰り返されてきたことだ。

それなくして医学の発達などありえなかつた。

それが事実だ。

シイナは他人が向ける無言の非難を今まで幾度となく感じていたが、特別な感傷はなかつた。あるのは、偽善めいた他者の感傷に対する侮蔑だけだ。

実験対象が、動物から人間に変わっただけだ。

同じ命を扱うことには変わりはない。

むしろ彼女にとつては、人間よりは動物の方が、よっぽど守るべき価値があると考えられる。

同じ動物でありながら、人間は駄目だという考えは、偽善以外のなものでもない。

非難されるべき理由がどこにある、この退廃した世界で。

シイナはかすかに笑んだ。

「ユカは完全な女性体でありながら、子供を産むことはほとんどできなかつた。妊娠しても流産や死産で、もう正常な子供は望めないこともわかつっていた。だから、あれは最後の実験だったのよ」

もう十年以上前のことだ。

ユカなら、フジオミも憶えていた。

今の自分達より少し年上の美しい女性だった。会うたびに優しく笑いかけてくれた。厳しいことも言ってくれた。それはフジオミの

決して理解することのできない母性を、垣間見せるかすかなぬくもりだつた。

フジオミの母は出産の後、我が子に乳を与えることもなく亡くなつてゐる。父もとうになく、彼は物心ついたときから一人だつたのだ。

そういえば、最後に見たあのときも、ユカは身籠もつていた。
事実上純粹なサカキの血脉は、ユカと彼女の兄であるマサトで絶えていた。

彼等の両親はいとこ同士だつた。

マサトは時期が合わず、伴侶を迎えることなく死んだ。
ユカも最後の出産の後、三年ほど経つて事故で死んだ。
だが、それでもフジオミの憶えているかぎり、ユカは幸せそうだつた。

目立つてきたお腹を擦る仕草は美しかつた。

ふと、彼の内に疑問がわきあがる。

そんな彼女が、我が子を実験に使つてくれなどといつものだらうが。

「ユカは、彼女は承諾したのか」

「ええ。むしろ彼女が進んで志願したのだそよ。この実験の成果が次代の研究に役立つようになるとね」

「まさか、同じサカキの、マサトの凍結精子を」

「そう。ユカの最後の人工受精は近親者のものを使ったの。皮肉だわ。他のどの正常な精子を使っても駄目だったのよ。それなのに、近親者の、実の兄の子供だけが、産まれてきた。もちろん、事前に遺伝子操作はしたわ。

でも、こんなに著しい結果ができるなんてね。先天性の遺伝病。しかも、生殖能力もないなんて」

ユカとマサトは極めて正常な強い遺伝子を保有するサカキという家系の子孫だ。シイナとフジオミという家系も、ここに血を少なからずひいている。確かに実験にこれほど最適なものもない。

繰り返された他との交配によってそれぞれ血には薄れたが極めて近いものである。

薄められては重ねられる婚姻も原因して、ほとんどの血筋は絶えてしまった。

出生率と平均寿命の低下。

年老いぬ内に、人々は死を迎える。

結果として、サカキの家系はユウを残して絶えたことになる。

フジオミの家系は正常な彼だけを残して絶えた。

そしてシイナの家系も絶えた。染色体性半陰陽という不妊の彼女を残して。

その家系の血を継ぐ人間がひとりしか存在しないことによって、彼等は彼等の姓を受け継いだ。すでに名前に意味はなく、血筋をたどる証として。

「待つてくれ。君はユカの最後の子供は、ユウだと言つたな？」

「そうよ」

「じゃあ、マナは、彼女は一体何なんだ？」

僕はずつと、マナがユカの最後の子供なんだと想つていた。だが、彼女は サカキ じゃない。ユウにそれを継ぐ資格はないのはわかっている。登録を抹消されたんだからね。だが、マナは正常なはずだ。あの二人は双子ではないのか？」

シイナは首を横に振る。

「マナは今十四よ」

「ユウは

「十六」

淀みなく答えるシイナに、フジオミの違和感はつのる。

「待つてくれ、年齢が合わない。マナとユウは双子の兄妹でさえありえない。マナはサカキではないのか？」

「いいえ。マナもサカキよ。ただし、ユウがいてもいなくても、マナはサカキの名を継げない。あの子の子供が継げても、マナ自身には、その資格はないのよ」

「じゃあ一体、マナは何だ?」

「わからないのも無理ないわね。あなたもマナのことは知らなかつたもの」

そう、それこそが自分の計画だつた。
どんな些細な失敗も許されない、滅びかけた人類を救うべき、長い年月を要する計画。

「マナは
」

恐ろしい告白がフジオミの耳に届いた。

マナがコウ達と暮らし始めてから、すでに四日が経っていた。マナは彼らの生活に驚きながらも、素直にそれを受け入れた。もともと、彼女にとって生活というのは「えられたもの」を享受する事が大前提にあったので、それがドームにいてもここにいても大差はなかつたのである。

マナの日課は、ほとんど決まっていた。

朝起きて朝食を終えると、老人とともに散歩をしながら色々な話をする。その後昼食をとり、今度はコウと廃墟や周囲の景色を散策する。そして夕食をとり、シャワーを浴び、寝る。もちろん、絶えず彼らと一緒にいるわけではない。特にコウはすることがたくさんあるので、散策の最後には、マナはいつも一人にされる。

ここでの生活は、全てコウにかかっているのだから、マナとしても別段文句もない。

ただ一つ、気になることと言えば、朝食を終えて、マナが老人と話をしている時、コウの姿がどこにも見えないということだけだった。

そして、どんなことでも案内してくれる彼らが、決してマナを近寄らせない場所が一つだけあった。それは、彼らの住んでいる廃墟の、地下へ通じる扉の奥だった。

マナは、コウが午前中はそこにいるのかもしれないと思ったが、口には出さずにいた。その間、穏やかな時間が流れていったようにも思えるが、それは表面だけのことだった。

あまりにも違います、この環境で育つたマナとコウにとって、衝突は必然のことだったのである。

そしてそれは、ほんの些細なことだった。

後になってから、マナも、怒ったコウ自身にも何が原因だったの

か思い出せないほど、そんな些細な。

「何でもいいわ。ユウが決めて」

いつもどおりにそう言ったマナに、ユウは苛立たしげな表情を見せた。

「ユウ？」

「馬鹿じゃないのか、あんた！！」

突然声を荒げたユウに、マナは身を強ばらせた。

「自分のことだろ？ 自分が決めるよ、そんなこともできないのか！？」

二人の会話を、少し離れて聞いていた老人が、間に入る。

「これこれ、ユウ。そんなに声を高くして言うこともないだろ。見なさい、マナが怯えている」

「だって、おじいちゃん」

「マナにはマナの、ドームでの生き方があつたんだよ。それを理解しておあげ。自分の望みばかりを押しつけるのもいい方法とは言えんよ」

宥めるようにユウの肩をたたいて、老人はマナを振り返った。潤んだ瞳はじっと床を見つめていた。

「さあ。マナもそんなに恐がらなくともいいんだよ」

マナは近づく老人の身体にしがみついてしゃくりあげた。老人はしばらくその背中を優しく撫でていたが、その後マナの身体を優しく離し、田線を合わせるように屈み込んだ。

「マナ、おまえさんも急に怒られたんでびっくりしたんだろう？」
泣きながらも、マナは頷いた。

「だが、ここで私達といふ以上は、おまえさんもここのやり方を学ばなければならぬよ。どちらがいいか、選ぶだけでいい。少しすつ慣れていくんだよ。わかったかね」

老人のあたたかな感情が伝わる。

「ええ…」

その日は、老人のとりなしで、何とかことなきを得た。

どちらもまだ、子供だった。

彼らが互いの環境を理解しようと努めるには、絶対的に経験値が不足していたのだ。

それでも、理解し合おうと互いにが努力すれば、歩み寄ることはできるのだ。

そう、努力さえ、すれば。

たとえ真の意味で、理解できないとしても。

次の日、マナは外で散策をしていた。

別に目的はないのだが、ここにはマナにとって目新しいものがたくさんありますので、退屈だけは、することがないのだ。
やわらかな風の中、マナは不意に、少し離れた草原に、生き物の姿を見つけた。

「かわいい！！」

思わず、声に出してしまい、慌てて口元を押さえる。

前に学習した時、見たことがあった動物、ウサギだ。耳が他の動物より長いので覚えていた。一匹だけではなかつた。大きいウサギが一匹。それより小さいウサギが三匹ほど、かたまって動いていた。どうやら親子らしい。

（もつと近くで見てみたい）

そう思つた。だが、近づいてもいいものなのかどうか、自信がなかつた。

どうしようかと悩んでいると、視界の隅にコウの姿をとらえた。

「コウ、コーウ」

声をひそめて呼びかけ、急いで手招きすると、コウは訝しげな顔で走ってきた。

自分も興奮していく、マナはユウが手に持っているものにほとんど注意を払っていないかった。

「どうした、マナ」

「ねえ、ユウ、あれ、ウサギでしょう？ 本物のウサギよね。近くにいってみても大丈夫かしら」

マナの指差す方を見つめ、

「いや、だめだ。逃げる」

ユウはすばやく手に持っていたボウガンを取り上げ、ねらいをします。

ボウガンを見たことのないマナでも、それが武器であることはすぐわかった。

「何するの、ユウ！？」

「捕まるんだ。今日の夕飯にする」

マナは驚いた。

(ウサギを食べる?)

ユウの言葉が信じられなかつた。

動物の肉を食べるなんて、聞いたこともない。瞬間に、鳥肌が立つた。

「駄目よ、あんな小さい生き物を殺すなんて！！」

だが、言いおわる前に、矢はボウガンを放れ、狙いを過たずに親ウサギの背中にあたつた。

「！？」

すぐにユウが、ウサギのところに走つていった。子ウサギはすでに逃げていた。

ウサギの耳を無造作につかんで、ユウは平然とこちらに突つてくる。

マナは動けなかつた。身体が震えていた。

すぐ近くまで来た時、生臭いにおいがした。血のにおいだった。

それが、ひきがねになつた。

「なんてひどい！！ 命を殺すなんて、最低だわ！！」

叫ぶよつこ、マナは言葉をぶつけた。

ぶつけられたコウは、なぜそんなことを言われるのかわからないといった顔つきで、マナを見ている。

「何言つてるんだ？ 食わなきやこつちが死ぬんだぞ」

「自分が生きるために、他の生き物を殺してもいいって言つのー？」

そんなの間違つてるわ、おかしいわ！！」

「ウサギは貴重なたんぱく源なんだ。マナだって、食べればうまいって思うわ」

呆れ返つたようにコウは肩を竦めた。

「信じられない、こんなひどいことするなんて。あたしはウサギなんか食べない。絶対食べないわー！」

「わがまま言つなよ、マナー！」

「自分で決めろつて言つたのはコウじゃないー！ あたしが食べないって決めたのよ。どうして怒るのー？」

互いに睨み合つたまま、二人はしばし動かなかつた。口を開いたのは、コウの方だった。

「勝手にしろー！」

苛立たしげに足元の瓦礫を蹴りつけ、コウはその場を離れた。マナはその場に座り込んで昨日に引き続き、声を殺して泣きだした。

「マナ、夕食を食べないんだって？ どうしたんだい？」

日が傾いてきたころ、部屋にこもつたきりのマナの様子を、老人が見にきた。マナはベッドの中でのシーツを頭からかぶつてふて寝していた。

「だつて、気持ち悪いんだもの」

「気持ち悪い？」

がばつ、とシーツを取り払って、マナは起き上がり、老人と向き合つた。

「知らなかつたのよ。ここで食べているものが、動物の体だなんて。動物を解剖するのを、ディスクで見たことがあるわ。あんな小さくて可愛いものの体を食べるなんて、信じられない」

老人は困つたように笑つた。

「そうだな。何も殺さずに、奪い過ぎることなく生きていけるなら、マナの言うとおり幸せだろうけれど、生きるために、必ず人は何かを犠牲にしていくんだよ」

「嘘。だつて、ドームでは動物を食べたりしないわ」

「では、マナが食べるものは一体何から作り出しているんだい？」

問い合わせられて、マナは返答につまる。

「わからない。知らないわ。だつて、いつも用意されてあるから、それを食べているだけよ。ああいうのが初めからあるんじゃないの？」

老人は声を出さずに笑つた。

「マナが食べているのは、加工品だよ。もともとあつたものをそようとわからないようにつくりかえているだけなんだよ」

「じゃあ、あたしが今まで食べていたものの中には、動物の体もあつたの？」

「ドームでの食事を見たことがないから何とも言えんが、多分なきつと豚か、牛なんかだろうな

じわりと、マナの瞳が滲んだ。

「あたし、死んだ動物の体を食べて生きてきたのね」

老人は、マナの隣に腰をおろし、そつと手を握つた。安心させるように。

「マナ、我々人間は、そういう生き物なんだよ。生きるために、別の命を奪つて、それを食べる。人間だけでもない。生き物というの、そういうふうにしか生きていけないよつてできているんだよ

「そんなの哀しそうすぎるわ」

「ふむ。では、じつ思うといい。おまえさんに食べられた動物は、おまえさんの一部になつたのだと」

「一部?」

「そうだ。食べられた動物は、おまえさんの血に融け、新たな肉となつておまえさんとともに生き続ける。だから嘆く必要はない。おまえさんは、自分の命を大切に生きるんだ。それが動物にとつても救われる」

マナは不思議そうに老人を見つめた。

「それは、本当のこと?」

「おまえさんが信じれば、それはいつでも真実なんだよ」「穏やかに諭されて、マナは何となく納得したくなつた。

老人の言葉は、何だかあたたかく心に伝わるのだ。その証拠に、さつきまであんなに哀しかつたのに、今は全然平氣だ。手のぬくもりと一緒に、老人の感情が伝わつたからだろうか。だから、マナはそれを信じることにした。

「ユウは、あたしのこと嫌いなのかしら?」「不意に咳いたマナに、老人は驚いて問ひ。

「なぜそう思うんだい?」

「だって、いつも怒つてばかりだわ。初めはとつても優しかつたのに。怒られたつて、あたしにはどうしようもないのに。あたしにとつてはそれが当たり前だつたんだもの。急に違うつて言われても、わからないじゃない。でも、ユウはそんなことひつとも考えてくれてないんだわ」

「マナは大事に育てられてきたのだなあ

老人の言葉に、マナは微笑んだ。

「ええ。みんな優しかつたわ。博士も、フジオ//も。周りにいたクローン達もみんな。ユウみたいにうるさく言わなかつたし、あたしに怒つたりしなかつたわ」

そこまで言つと、不意にマナの表情が哀しげに歪んだ。

「おじいちゃん、あたしドームに帰りたいわ。ユウに言つてみ

てくれないかしら。」

ウだつて、きっともうあたしの顔なんか見ていたくないはずよ。嫌われてるんだもの。あたしがいなくなつた方が喜ぶかもしれないわ」「マナ。ユウがおまえさんを嫌いになるなんてことはないよ。ただ、ユウにもわからないんだよ。おまえさんにどう接すればいいのかね。ユウは同じ年頃の子供と話したことがない。周りはみんな大人ばかりだったからね」

「ユウも、同じ？」

「ああ。きっとユウも今頃後悔しているよ。なんとか仲直りしてくれ。おまえさんも、ユウと喧嘩したままホームに帰るのはいやだろう?」

「ええ。でも、ユウは許してくれるかしら?」

「大丈夫。おまえさんを許さないなんてことは、絶対にありえないよ。ユウはマナを大好きだからな」

「そりなさいいんだけど」

階段を上がつてくる気配をドア越しに感じて、マナは大きく息を吸つた。そして、大きく吐くと、思い切つてドアを開けた。

「ユウ」

振り返つたユウは、少し驚いた顔をしていた。まるで、マナが自分に話しかけるのが信じられないように。だが、すぐにそんな表情は消える。マナのちゅうじ斜め向かいの浴室に入ろうとノブに伸びていた手が離れる。

「何? 何か用があるのか?」

「ええと……」

かけるべき言葉を用意していなかつたことに、マナは気づいた。声をかければ、どうにかなると思っていたのかもしれない。

「マナ?」

じつとユウを見ていたが、その表情からは何の感情も読み取れな

い。どんな言葉をかけるか考えるより先に、マナはコウの手を両手で捕まえた。

ドームでは感じたことはなかったが、ここへ来てから、マナには不思議な力が現われるようになっていた。コウや老人に触れているとその時の感情がわかるのだ。もちろん、考へていること全てがわかるのではない。ただ、言葉として感じられない感情を、波のように、温度のよう、感じ取ることができるのである。そして、もっと不可思議なことに、コウに対して、この力はもっととも強く働いた。

コウが咄嗟に離れようとするのを、そのまましつかり逃がさない。触れる手から流れこんでくる感情。戸惑いと、痛みによく似た切ない感情だ。

「マナ、これはずるい……」

「だって、言葉だけじゃ コウの気持ちはわからないわ。コウは全部を言つてくれないもの。それに、本当のことをいつでも言つてもくれないわ」

手を離さないマナをあきらめ、コウは溜息をついた。

「言いたくないんじゃないんだ。ただ、どう言つていいのかわからぬいだけだ」「

「コウ……」「

コウの言葉は正直だった。彼の感情には様々な揺れが感じられた。「思つてることを正直に口にするのは、俺には難しい。だって、そんな必要、今までなかつたから」

マナと接するうちに、コウも気づいていたのだ。それまで自分と一緒にいてくれたのは大人達ばかりだったことを。多くを語らずとも、彼らはコウの感情の機微を敏感に察してくれていた。だが、マナは違う。自分よりも年下の少女だ。老人達と接してきたようにはいかないのだ。

「言わなくて、いつもみたいに通じるつて思つてた。おじいちゃん達はみんな、俺が何にも言わなくても俺の言いたいことわかつてくれた。でも、マナには俺の考へることが通じないから、どう

していいかわからなくて、苛々してたんだ」

「ごめんなさい。あたし、自分のことばかりで、ユウの気持ち、全然考えてなかつたわ。あなたも、平気なはずないのに」

「違う。俺が悪いんだ。俺が勝手に苛々してハツ当りしたんだ。わかつてなかつたんだ。俺が考えること、マナもわかるつて勝手に思つてたんだ」

互いの中での、相手に対する疑惑いや怒り、悲しみなどの微妙な感情がとけていくのがわかる。マナはさらに言葉を繋ぐ。

「ねえ、あたしたち、もつといっぱい話しましようよ。やつしてお互いをもっと知るのよ。そうすれば、やつともっと楽しくなるはずよ」

「話すつて、何を話すつて言つんだ？」

「何でもいいのよ。心の中までは、わからないもの。伝えたいことはきちんと言葉にしなくちゃ。あたし、あなたに怒られるたびに悲しくなるの。あなたがあたしを嫌いなんだつて思つてしまつたの。そんなのいやだわ」

「俺は、マナを嫌つたりなんか、してない。ただ、マナが何でも俺に決めてくれつて言つるのがいやなんだ。だつて、何だかどうでもいいように聞こえるんだ。何もおもしろくない、何もしたくない、そんなふうに思つてるからどうでもいいつて答えるんだつて、思つたんだ」

マナは慌てて首を振つた。

「そうじゃないわ。どうでもいいんじゃないの。あたしね、今まで自分で決めたこと、なかつたの。だつて、そういうことは博士がみんなやつてくれたから。あたし、ドームではみんな決めてもらつてたの。それが当たり前のことだったから。ずっとそうだったから。ここではユウが決めてくれると思つてたの」

「俺は、マナに自分で決めてほしいんだ。それが俺の気持ちと違つても、同じでも、とにかく、マナの気持ちが知りたいんだ」

「わかつたわ。今から、そつする。自分がしたいこと、行きたいと

「ころ、見たいといひ、自分で決めるわ。それなら、コウもまつ祭り
ない？」

「よかつた」「うん」

マナはほつとじてコウから手を離した。

「ねえ。あたしたち、怒つたりしきになつたら、ほんの少し我慢
して考えましょ。自分の気持ちをきちんとわかつてもらつたために
は、どんな言葉を使えばいいのか。どう言えば、きちんと伝わる
か、そういうことを、一緒にやっていきましょ。そうしたら、
きっともっと仲良くなれるし、お互にを好きになれるわ」

「俺は、今だつてマナが好きだよ」

「ええ。あたしもコウが好きだわ。でも、やっぱりそれって、言葉
にしなくちゃわからないじやない？　あたし、今コウと話せてよか
つたわ。コウの考えてること、コウが言葉にしてくれたからきちん
とわかつたもの。あなたも、あたしが考えてたこと、わかつてくれ
たでしょ？」「わ

「ああ

「ね、そんなふうにお互いのこともつとわかつたら、喧嘩しなくて
もよくなるわ。それに、前よりもっと好きになれるわ。だから、こ
れからはたくさん話をしましょ」

一生懸命に語るマナに、コウは微笑った。

「わかつた」

「よかつた。じゃあ、あたし、もう寝るわ。おやすみなさい」

「ああ。おやすみ、マナ」

背中を向けてから、マナは思ひ返したようにマナは振り返った。
そして、コウに向つた。

「ねえ、コウ。明日からあたしにも、料理の仕方を教えてくれる？

「マナ！？　無理しなくていいんだー！」

また何を言いだすのかといったよつて、コウは困つた顔をした。
だが、マナはコウが先程言つたようて、自分で考え、自分で決め

るにまた、もつとたくさんののことを知らなければならぬこのではないかと思つてゐたのだ。

そう話すと、ユウは素直に納得してくれた。

「一緒にいるんだもの。あたしもできることをしなくへりや。でも、
自信がないから、ちやんと教えてね」

マナの料理を畱つといつ初めての試みは、驚きの連続ばかりだった。

何しろ、出されたものを食べるだけだったのだから、料理に関する基本的なことさえも知らないのだ。自分が食べていたものが、本当はどうんな形をしていたのか、それを知るだけでも、マナには新鮮だった。

覚えることは、もちろんそれだけではない。

材料を切つたり皮を剥ぐための器具の扱いや、調理のための器具の名称、たくさんありすぎる調味料の使い方、それらの準備や後始末、また食事のためのテーブルセッティングや食器の使い分けなど、きりがないほど学ぶことはたくさんあった。

だが、今度は楽しく料理をすることができた。

朝晩と、料理を作るときだけでなく、空いている時間全てを使って、ユウが最初から丁寧に教えてくれたからだ。マナの失敗を怒ることなく、時間をかけて根気強く教え続けた。

そうして、一週間もすると、食事の支度のほとんどは、マナにもできるようになっていた。もちろんユウも一緒に作るが、下ごしらえ程度だ。仕上げはどんなに時間がかかるてもマナにやらしてくれれる。

マナは朝起きて身支度を整えると、すぐに朝食の準備をする。

テーブルを拭き、食器を並べる。

熱いスープとご飯をよそい、昔ながらの箸で、大皿に持ったおかずを取り分け、つつきあつ。

老人とユウと三人で、一日の予定を話し合ひながらの食事。他愛のない会話で、笑い合いながらの食事。

それは、マナの今まで知らなかつたもの。学びはしたが、実現す

「う」ではないと思っていたもの、だった。

「コウは食器を洗いながら、マナはお皿のお弁当にするおにぎりを握りながら、これから登る、廃墟の東にある森の話をしていた。

「ねえ、コウ。動物は、いるの？」

「ああ。つまくすれば、近くで見れるかもしないな。見たい？」

「ええ。あ、コウ、お塩とつてちょうどいい」

「ん」

「卵は茹でたのを持つてこましょう。それと、飲み物も。お茶がいい？」

「熱いのがいいな」

「ええ。これが終わってからね」

手際よく握ったおにぎりを包むと、マナは手を洗い、お茶の支度に取りかかる。

「お湯は沸騰してからよね。でも、入れるのほ少し温度を下げてから

「ああ」

やかんを火にかけるマナを見ながら、コウが微笑う。

「マナ、料理も、お茶を入れるのも、俺よりずっと上手くなつた」「ほんと!？」

嬉しそうにマナが笑う。自分の料理や手際を誉めてもらいつのはとても気分がよかつた。マナはのみこみがはやく、器用だったのでも、コツをつかめば、コウに教えられたことも一、二度で、すぐにできるようになつてきていた。

今までマナが学んできたのは、ディスクによる知識ばかりだったから、何かを作ったり、身体を動かして体験することはほとんどなかつたのだ。

ドームでも、もちろんすることはたくさんあつた。

ディスクによる学習、健康を維持するためのジムでのトレーニン

グ、そして、たくさんの検査。それがマナの義務だった。

空いた時間は読書や娯楽、ディスクを観るなどはできたが、それもシイナによって厳選されたものを与えるだけ。だから、時間というものは、マナに関係なく、ただ緩慢に流れ去つていくだけのものでしかなかつた。

ここでの時間は、本当にあつという間に過ぎていく。

今までの生活と違い、不便なことはたくさんあつた。それまでマナが当然と思っていたことは、全て他人の手で整えられていたものだつたのだ。

しかし、料理を含め、ここでは生活するために必要なことは全て自分達でしなければならなかつた。

マナは初めて自分が着る服を洗濯し、干すことを知つた。自分の部屋やトイレ、バスルームを自分で掃除することも知つた。畠の草むしりも、水やりも知つた。田を樂しませるために、花を摘んで飾ることも知つた。風の流れ、雲のかたち、太陽の沈む様子で次の日の天候がわかることも知つた。星の位置で、方角がわかるなどを知つた。そして、傍らでそれらを教えてくれる人がいることの喜びを知つた。優しい人達と一緒に過ごす幸福を知つた。

一日一日が待ち遠しく、愛おしく、マナにはとても貴重だつた。今、マナは自分の意志で全て選び、自分のしたいことをすることができた。

自由。

今初めて、それを実感していた。たくさんの言葉を識つていっても、本当の意味で知ることのなかつたそれは、マナにとって、紛れもなく幸福だつた。

小高い山を登りきり、マナとユウは下の景色を見下ろしていく。

もつと西には深緑に覆われた山がそびえている。

「ここからの眺めが、一番綺麗だ」

「ええ。とても綺麗だわ。なんて深い緑のかしら。なんてあざやかな色なのかしら。山も素敵ね。霞んだ緑が、とても綺麗」

「おじいちゃんが言つてた。あそこは、レイジョウだつたんだって」

「レイジョウ?」

「死んだら行くところだつて」

「？死んだらどこにも行けないわ」

当たり前なマナの問いかに、ユウはかすかに笑つてしまつ。

「あ、今あたしのこと笑つたでしよう」

「うん」

「だつて、おかしいわ。死んだら動けないわ。生命活動が終わるつてことだもの」

「身体が行くんじゃないからさ」

「身体以外、人間に何があるつていつの？」

「魂」

「たましい？」

「意識さ」

「死ねば意識は失くなるわ。意識が失くなるつてつことが、死ぬつてことだもの。違うの？」

「おじいちゃんは、身体が死んでも、意識は死なないつて言つてた。身体はかりそめの器で、俺達はみんな、その器に入つているだけなんだから」

「かりそめ？」

「一時的なつてことさ。おじいちゃんがよく使つ言葉だ」

「そんなの、聞いたことないわ」

「じゃあ、おじいちゃんに教えてもらつとい。おじいちゃんはそういうことに対する詳しいから」

言つ終えると、ユウはまた遠くへと視線を向けた。だが、マナは

ユウの先程の話を心の中で反復していた。

「でも、綺麗なところへ行くのはいいことだわ。だって、もし淋しくて何もないところへ行くのなら哀しいもの」

「そうだな」

それから一人は、景色を見ながら、昼食を取った。

山は深緑に覆われ、本当にとても美しかつた。見下ろす景色も茂る緑に覆われ、青い空の端を切り取る、見渡すかぎりの緑の絨毯のようだ。その中にも、若草色がまばらに点在し、太陽の加減であざやかに瑞々しい色合いを変えた。風に誘われるよう、葉ずれの音がする。音も色も、一体となつた一つの美だった。

「こんなに綺麗なのに、どうしてドームのみんなは外に出て見ようとしないのかしら」

「昔は、こんなに綺麗じゃなかつたからね」

「どういふこと?」

「廃墟を見ろよ」

言われて、マナは縁の続く中、一画だけ灰色に埋めつくされるいる廃墟群を見下ろす。四角柱の「じぼ」で、アンバランスな建造物は、確かにお世辞でも美しいとは言えなかつた。

「昔は、あんなのが本当にたくさんあつて、緑なんかほんの少ししかなかつたんだってさ。汚い空気が充满してて、水も土も汚れ放題、ゴミで溢れかえつてたんだって」

「ゴミ? ゴミって何?」

「必要のないものさ。例えば野菜の皮や残り物のご飯や、そんなものかな」

「え? だつて、それは必要なくなんかないわ。だつて、畑の肥料になるでしよう?」

「廃墟に住んでた人間は、畑を作らない。他にも、新しいものが欲しくなると、まだ使えるものでもどんどん捨てていくんだつて。捨てることが、捨てるほどたくさん物があるつてことが、幸せだと思われた時代があつたつて。だから、そこでは捨てる」とは悪いことじやなかつたんだ。そして、みんなで捨てて捨ててゴミだけが

どんどん増えていった。「ミニを捨てるために木を切ったり、山を削ったり、川や海に捨てたりしたって聞いたよ。そんなの、誰も見たって思わないだろ?」

「捨てるくらいなら最初から作らなければいいのに。でも、ますます変よ。だって、今はこんなに綺麗じゃない」

「ずっとドームの中にいたから、外が綺麗になつてたつてわかんなかったんじゃないかな。それに、時間が経てばこの風景だって見なれないものになつてくる。見なれないものを急に目にして、いいとは思えない。だから、誰も見なくなつたのかも」

「あたしが初めておじいちゃんを見て驚いたみたいに?」

「ああ。でも、マナはもうおじいちゃんを恐いとか思つたりしないだろ?」

「それどころか大好きになつたわ」

「そういう気持ちを、きっとみんな持てなかつたんだ。だから誰も外に出でこようとしなかつたのさ」

哀しそうに、マナは頷いた。

「そうね。こんな綺麗な景色なのに。それを綺麗と感じられないのなら、それはとても悲しいことだわ」

空も雲も太陽も風も木も草も花も、マナにとつては全てが美しかつた。

「おじいちゃんの言つたとおりね。世界は、とても美しい色で溢れているわ。空も雲も土も草も花も、みんな美しい色で満ちている。ねえ、ユウ。あたしがドームの中で見たたくさんの中のものの中で、これほど美しいと思えるものはなかつた。きっと、人間の作るどんな人工物も、自然の成し得る造形には適わないんだわ」

世界は美しい。

それに気づかずにはいるのは、とても淋しく、虚しいことだ。

「人間つて、あんまりいいことしてなかつたのね」

「マナ？」

「だつて、おじいちゃんも言つてたわ。この世界では、人間だけが異質なんだつて。人間がたくさんいた頃は、世界はとても病んでいた。やがて、この地上から一人も人間がいなくなつたとき、そのときこそ、世界は一番美しいだらうつて。

あしたちつて、本当はそんなに大事ぢゃないのよ。この世界にとつては、いなくてもいい存在なんぢゃないかしら」

「そうかもな。でも、俺は、マナがいてくれてよかつたよ。おじいちゃんがいてくれて幸せだつた。マナはどう？」

「もちろん、あたしもよ。ユウとおじいちゃんがいてくれて、とても幸せよ」

「それでいいんぢゃないかな」

「え？」

「世界にとつて必要ぢゃなくたつて、別にいいんだよ。自分が大事に思える人がいて、その人から大事に思つてもらえれば、それだけで、俺はいいと思つんだ」

「世界にとつて、異質でも？」

「世界にとつて、異質でも」

「他に何の意味もなくても？」

「他に何の意味もなくても？」

マナはユウの答えに戸惑つた。

「よく、わからないわ。だつて、そんなこと言つた人、誰もいないもの」

「マナ。別に、俺の考えが本当だとか、絶対だつてことぢゃないんだ。ただ、俺はそう思つてるつて、それだけだ。マナが無理にそう思う必要はないんだ。俺もマナも、違う考え方をする。それと同じで、みんなが同じ考え方じゃなくてもいいんだよ」

「本当？ 本当にそれでいいの？」

「だつてマナ、ここにいるのは俺達だけだろ？ 他の誰の許しがいるのを？」

「だつて」

ドームの話はしたくなかった。ユウがそれをいやがるのがわかつて、いたからだ。

「ここはドームじゃないよ」

だが、意外にもユウは笑っていた。

「ユウ？」

「ドームでは許されないことだつて、ここにいればそんなの関係ない。ドームにはドームの考え方ややり方がある。ここでは、この考え方ややり方がある。おじいちゃんはそう言つてくれたよ。俺はおじいちゃんの考え方ややり方が好きだ。だから、好きな方をとる。それをもう帰るわ」

山を下りきるまで、二人は無言だった。ユウはユウで、マナはマナで、全く別のことを考えていた。次の会話までじつくりと自分の考えを整理してから再び唐突に会話をすることはよくあることだつたので、二人は気にもとめていなかつた。

「でも、ユウの考え方は、きっと博士は許さないんじゃないかしら」
そして、口火を切つたのは、マナの方だつた。

「博士？」

「ええ。あたしを育ててくれた人よ。とても優しくて、素敵なの」
瞬間、ユウの表情が厳しく、険しいものになつたことに、マナは気づいた。

「シイナか？」

「ええ、そうよ。どうして知つてゐるの？」

「シイナ」

じつと空を睨んで、しばしのち、ユウは低く呟いた。

「あいつは、人殺しだ」

その言葉に、マナは驚く。

「どういふこと？ 博士が、誰を殺したつていうの？」

「マナ、俺も三歳まであそこで暮らしてた」

「あそこって、ドームのこと？」

「ああ。そうだ」

「嘘、だって、あたしはユウを見たことないし、そんなこと聞いたことないわ」

「会ったとしても、小さかったし、覚えていないのかも知れない。あいつがマナに教えたかったのは当然だ。自分が殺した子供のことなんか、他人に話す訳がない。でも、俺は忘れない。あいつが俺にしたことを。決して」

「嘘よ！ 博士は優しい人だもの、そんな、恐ろしいことできるわけないわ！！」

「あんたはあの女を知らないんだ」

「じゃあ、ユウは知ってるっていうの？ あたしはユウよりもずっと長く博士と一緒にいるのよ。あたしの知ってる博士は、そんなひどいところ一度も見せたことはなかったわ。どうしてそんなこと、信じられるって言うの！？」

次の瞬間、ボタンをひきむぎるようにユウは上衣を剥いだ。

「！？」

膚けた衣服の間から覗く右下腹部には、マナにはわからなかつたが銃で撃たれた上に、化膿し、爛れたまま消えなくなつた痣が、はつきりと現われていた。

「この傷を見る、あいつにやられたんだ。俺はまだ、生まれて三年しか経つてなかつた。あいつは俺を外へ連れていつた。ドームの外へ。初めて見る外の景色に喜んでた俺を、あいつは後ろから撃つた。この傷を見ても、嘘だつて言えるのか！？」

「」

反論できなかつた。わかるのだ。なぜわかるのかはわからないけれど、ユウの言葉は真実だ。それがわかっているからこそ、信じたくなかった。

大好きなシイナ。

優しくて、綺麗で、何でも知っていて、何でもできる、大好きな
彼女がそんな恐ろしいことをするなんて。
他に何も考えられない。

ただ、苦しかった。

「

「止める涙をとめることはできなかつた。

ユウはマナをじつと見つめていた。

「マナは何も知らないんだ。それはマナのせいじゃないんだ……」

「

ユウはそのまま、一人で廃墟へと戻つていった。

「博士……嘘よね、そうよね……」

夕暮れが近づき、部屋の中が徐々に薄暗くなる。
しかし、マナは動かなかつた。

控えめなノックの音にも、扉を開けて入ってきた老人にも、気づいてはいたが動けなかつた。

「マナ。今度は一体どうしたんだね？」

自室の床に座り込んだまま、声をかけられてよがりよく振り返つたマナは、泣きはらして真っ赤になつた目で老人を見上げた。

「おじいちゃん……」

声を出すと同時に、涙があふれる。

マナは老人にしがみついて声をあげて泣いた。

「ユウに聞いても何も答へんし。おまえさんはおまえさんで部屋を出てこんし。最近は喧嘩することもないから安心していたのに、よくまあ、おまえさんたちは」

「だつて、ユウが、ユウが……」

「ユウが何か、おまえさんに言つたのかい？」

マナの頭を優しく撫で、老人は問う。

「ユウが、博士に殺されそうになつたって言つたの。でも、博士は優しい女なのよ。あたしを育ててくれたの。本当に、素敵な女なのよ。おじいちゃん、本当なの？ 博士が、ユウを殺そうとしたの？」

老人は一気にまくし立てたマナの言葉を理解すると、一瞬眉根をよせ、それから、首を振つた。

「そのことなら、私には、わからんのだよ。実際にそれを見たわけではないからな」

老人はマナをベッドに座るよう促し、自分も彼女の隣に腰を下ろ

した。

「ユウを見つけたのは、私と死んだ妻だつたんだよ。私達は、ここに住む前は、もっともっと南の方に住んでいたんだ。そう、もっとドームに近かつた。

その日は仲間も含めて山菜を探つておこりと遠出をしたんだ。歩き疲れて川の近くで休もうと、私達は水音に従つて川へと出た。しばらく休んでいると、妻が突然川へと入つていつてな。驚いてあとを追つていったら、岩の影に引っ掛けつてぐつたりしていたユウを見つけたんだよ。

私達はすぐにユウを住処へ運び込んだ。幸い、弾は貫通していたが、医療設備などなきに等しい。応急処置と輸血だけで、あとはユウ自身の生命力にかけるしかなかつた。幾日も高熱が続き、傷は塞がらずに膿を持ち、私達は何度も、あの子が死ぬのではないかと思つた。ようやく熱がひいても、一月以上、ユウは言葉を話すことさえできなかつた

布ごしに触れた腕から、老人のやるせない痛みが伝わつてくる。

強い感情や相手との接触は、マナに自分のものではない感覚を伝えてくる。ドームで暮らしていたときよりも、それは、今、確実に強くなつていた。

(でも、相手の気持ちがわかるのはいいことだわ。つらい時は、誰でも理解してほしいものだつて、おじいちゃんが言つてたんだもの)

マナは老人の皺だらけの手をとり、優しく握つた。
老人は目を細めてマナを見返した。

「ユウは我々よりもはるかに高い知能を持つている。そのせいかどうかはわからんが、あの子は三歳であったが、誰が、なぜ、自分を殺そうとしたのかすでに脳裏に焼き付けていたのだ。一月を過ぎて、あの子が初めて口にした言葉を、私は今でも覚えている。

私は、そこそこいるのが本当二三歳の子供なのかと思つたよ
「じゃあ、やつぱりユウ以外、犯人が誰かはわからないのね」

「問題は、誰がユウを殺そうとしたかではない。どうでもいい相手なら、ユウはきっとああまで思い詰めはしなかつただろう。

信じていた者の裏切り。それが、ユウの心中に憎しみを植えつけたのだ。だからこそ、私は、あの子が憐れでならんのだよ」

老人は首を横に振り、忌まわしい回想を追い払うかのよつた仕草をした。

「ユウは心に傷を負つたまま成長した。今まで一緒に暮らしてきた私達の誰も、その傷を忘れさせることはできても、癒してやることはできなかつた。

だが、マナ、私はおまえさんなり、ユウの受けた傷を癒してやれるだろ?と思つとるんだよ」

「あたしが?」

「私は、ユウがおまえさんをさらいつけてくることに反対はしたが、本気では止めなかつた。

私はユウが可愛い。ずっとその成長を見守つてきた。

だが、私は確実にユウより先に死ぬ。だから、おまえさんに傍にしてやつてほしいんだよ。おまえさんはユウと歳も近い。何よりユウが、一番にそれを望んでいる。

ユウは一人で生きられる能力を持つていながら、独りでは生きられない。ユウの受けた傷は、それほど深くユウの根本を抉つたのだ。真摯な眼差しを、マナは戸惑いつつも受けとめた。

老人は本気だ。

本当に、マナがここにとどまることを望んでいる。

だが、それはできないことだ。

マナには使命がある。

それはマナの存在意義に等しい。

「あたし、ゴウのこと好きよ。おじこちやんもよ」

後ろめたい気持ちを隠せないまま、マナは言葉を繋ぐ。

「でもね、あたしはフジオミの子を産まなきゃいけないのよ。だから、ずっとここに住むにいられない、と、思つ……」

「それがおまえさんの意志なのかい、マナ?」

「え?」

顔を上げて老人を見つめるマナの瞳は、困惑の色を露にしていた。

「おまえさんは、他の誰に言われたのでもなく、自分の意志で、そのフジオミとかいう人の子供を産みたいのかい?」

真っすぐに見据える瞳に、「こまかしきかない。

「わからない。そんなの、考えたこともないわ。だって、そういわれて育つってきたんだもの。それが当たり前だつて、思つてたんだもの。それじゃ、いけないの?」

「では、考えなさい。幸いここには考へる時間だけはある。マナ、自分がどうしたいか考へるんだよ。他の誰に強要されることはなく、自分の心で、見極めなさい。」

老人の言葉は、それまでマナの考へもしなかつたことを彼女自身に選択させようとしていた。

義務として、使命としてではなく、自分の意思で考へる。

それは、マナにとつてはとても難しいことだつた。

少しずつ新しい世界 別の視点からの見識 を理解しているとはいえ、マナはいまだ十四歳の子供に過ぎなかつた。

(「()にいなきつて、言つてくれればいいのに)

ドームにいたときは、全てシイナがマナのすべきことを教えてくれていた。

マナはただ、彼女の言つとおりにすればよかつた。
疑問さえ、抱いたことはなかつた。それが正しいのだと、ずっと

思つていたからだ。

「おじいちゃん、あたし、間違つてたの？」

不安げに、マナは老人を仰いだ。

皺だらけの乾いた手がマナの瑞々しい若い手を取る。

「こんな世界だ。間違つていることが、悪いことだとは言えんよ。我々人間は、確かに選択を誤つた。だが、今更それを否定できはない。そのまま進むしかない。だからこそ、決断は自身でするのだ。自分が決断したことなら、その後悔ですら自分だけのものだ。誰かの所為にして生きてても、それは本当に自分の生を生きたとは言えんのだよ」

シイナは長い廊下を歩き、カタオカの部屋へと向かつていた。オートドアには自由な入室を許可することを示す緑のライトが点っていた。そのまま部屋の前に立つと、すみやかにドアは左右へ開いた。

「お呼びと聞きましたが」

「ああ。入りたまえ」

カタオカは議会の長でもある。その理由は彼が議員の中でも最年長者であるとともに、ていのいに周囲の責任転嫁でもあると、シイナは思つていた。

議員と呼ばれる者は、そのほとんどが四、五十代である。いま現在の人間の平均寿命は六十歳前後だ。

後は死を迎えるだけの人々は、全てにおいて希薄で、もはや己れの意志すら持つていよいよにも思える。

実際、彼等にはどうでもいいことなのだ、この世界のことなど。もはや己れの死にさえ関心を持たない彼等は、当然のようにマナのこともユウのこともフジオミのことも、未来のこととさえ考えることを放棄している。

「シイナ、未だにマナはユウとともに外の世界で生存しているというのは本当なのかね？」

困惑すら見せない、静かで控えめな口調。

シイナはうんざりしていた。

「本當です。記録を見つけました。このドームへの移住し始めた頃にここを離れて外の世界へ出ていった人間がいたそうです。ここより北の廃墟群にかつての生活跡が見られました。かなり前のものなので、なんらかの理由により、そこからさらに北へ移住したと思われます。おそらく、ユウはその子孫である人間達に保護されたのでしょう」

「どうする気かね？」

「ゴウを追います。マナを取り戻す、それだけです」

感情の起伏すら見せないシイナの口調に、カタオカは眉根を寄せた。

「君は一度彼を殺した。また、殺すのかね」

「生きているのなら、死ぬまで、何度も。彼の能力は、私達には驚異です。私のミスでした。あのとき、私は彼の死体を確認しなかつた」

「愛情はなかつたのかね、彼に対する」

「愛情？ 私に？」

高らかに、シイナは嗤つた。

「そんなものが、今の私達の中には存在すると、本当に思つていいのですか？」

傑作だわ。そんなものを持ち得ない完全体であるあなたに、言われるなんて」

シイナは冷たく微笑つた。本当に、美しい笑みでカタオカを見た。「私は失敗作ですよ。そんな感情など、持ち合わせていいわけがない。あなたでさえ持たないものを、どうして私に持てると思いつですか？」

「シイナ」

「あなたに、愛するということがわかるのですか？ あなたとて、誰も愛さなかつたくせに。全てを愛しているなんて、言わないでください。当の昔に私達から失われた感情について今更議論しても、何にもなりません」

「君の考えていることが、私には理解できないのだ。私達とは違うものだからか？ 君の望みはなんだ？ なぜそんなに、君の意志は強い？ どうしてそんなに、私達と違うのだ？」

「あなたはもう、理解することさえ放棄してしまった。わからないのは当然です」

シイナは一礼してカタオカに背を向けた。

「シイナ、じだわりを捨てたまえ。もはや、誰もがわかっている
その言葉に、シイナは立ち止まる。だが、振り返りはしない。

「我々の滅びは止められない。もう、どうあがいても無理なのだ
」

苛立ちに似た感情を、シイナは微かに顔に表した。
ゆつくりと振り返り、カタオカに視線を据える。

「あなた達は、あきらめたまま残る時を過ごせばいい。
何も残さず、意味もなく、死ぬまで生きればいい。

私は違う。

私はあきらめない。黙つて、何も残さず生きたりしない。
それが例え気休めにしか過ぎなくとも、私は自分の存在意義を見
つけだします。死ぬ最期の瞬間まで、あがき続ける
」

強い意志が、そこにはあった。

けれど、それは、カタオカにとつて最も痛ましく思えるものだと
いふことを、彼女には理解できなかつた。

「シイナ、私は、君が憐れでならない」

だからこそ、こんな言葉にも、傷つきはしない。

「憐れみなら、いくらでもかけてください。今更遅かつたなどと責
めたりはしません。

でもそれは、私にとつてもう何の意味もない」

それ以上の言葉はなかつた。

シイナは再び振り返ることはなかつた。

そしてそのまま部屋を出た。

「

長い廊下を足早に歩きながら、シイナは堪えきれない怒りを感じていた。

ぐだらない不毛な会話を続けたことを後悔していた。

もはや話し合う価値さえないのに。

シイナはカタオ力を尊敬していた。カタオ力は、フジオミにもシイナにも分け隔てなく接してくれた。シイナには、生殖能力がなかつたにもかかわらずだ。

だが、それは愛情からではない。ただ単に、どうでもよかつたのだが、彼にとつては。

だからこそ、あんな決定ができたのだ。

フジオミの発言を尊重しよう。シイナ、君は君の義務を果たしたまえ。

その時、シイナは自分を支えていた世界が壊れたのを知った。
愛されていると信じていた。

例え自分に、生殖能力がなくても。

だが、残つたのは屈辱と、嫌悪と、怒りと、絶望だけだ。

シイナ。私の決定は君をそんなに傷つけたのか。

あの日を境にすっかり変わってしまったシイナに、カタオ力は苦しそうに尋ねた。

まるで、後悔でもするようだ。

だが、もはやシイナには彼の贖罪など、どうでもよいことだった。

壊れたものは戻らない。

優しい過去へは戻れない。

許してくれと言いたげなカタオ力に冷たい一瞥をくれて、あの時

シイナは彼に背を向けた。

もはや彼に対しては、軽蔑しか持てなかつたのだ。

それなのに、フジオミのために自分を犠牲にしておいて、なぜそんなことが言えるのだ。

組み敷かれて恐怖に泣き叫んだあの時間を、踏み躡られズタズタにされた誇りを、自分は一生忘れないだらう。

忌まわしい過去が甦つてくる。

同時に、嫌悪が身を貫く。

嘔吐感に襲われ、シイナはきつと瞳を閉じた。

震える身体を必死に押さえつける。

あの過ぎてしまつた時間を思い出す時、いつも身体が拒絶反応を起こす。それ以外は、フジオミに抱かれているときでさえ、こんなことは起こらないのに。

「

震えが徐々に収まるのを感じながら、シイナは改めて、今回の事件の元凶となつたコウに対して、新たな怒りを感じた。あの時、きちんと殺してさえいれば、計画は順調だつたのだ。
自分の失態だ シイナはきつと拳を握つた。

「何としても、マナは取り戻す。今度こそ殺してやるわ。死ぬまで、何度も」

マナと会わない日が三日続いた。

彼は今、マナが唯一来ない地下にいた。いつものように。この一年、日課となつた作業を機械的にこなす。

体を動かしている間は何も考えなくてすむが、作業が終わればまた、現実を直視しなければならない。

必要な電源だけを残し、それ以外のすべてが消えてることを確かめると、コウは部屋を出ようとして、ふと足を止めた。

ここから出たら、マナに会つてしまつかもしない。

その時、自分は一体何を言えるだろう。

マナの前であんな風にシイナを非難したが、自分にその資格はあるのか。

自分だって、全てをマナに話しているわけではない。
いつもして真実に触れる部分は隠したままだ。

全てを教えもせずに、マナに判断しろなどと、本来なら言える訳がないのだ。

マナが苦しいように、コウもまた苦しかった。

マナを傷つけたいわけではなかつた。

ただ、哀しいだけだ。哀しみだけが、日々に強く、この胸を圧迫していくから。

時折、呼吸していることすら億劫になる。

今ここにいる自分が、嫌で嫌でたまらない。
許してほしいのに。

一番に誰よりも。

どんな愛でもいい。

必要としてほしい。

ここにいてもいいのだと呟つてほしい。

望むのは間違いなのか。
愛されないから憎むのか。

シイナという女を、怒りなしに思い起すことは不可能だった。
だが、今コウは怒りだけでない感情を、呼び起しきさずにはいられなかつた。

向けられた微笑みを。
あたたかな眼差しを。
優しく語られた言葉を。

もうとっくに忘れかけていたあたたかな感情まで甦るのは、苦痛に近い。

コウは胸を押された。

あの頃は、全てを信じていられた。

世界は自分のためだけにあるよ」と、幸福だつた。

「シイナの面影と、マナが重なつた。

シイナのように、いつかマナも、自分から去る。

欲しいものは、決して得られない。

どうして、自分は

コウは顔を上げ、振り返り、ただ一点を凝視した。

「……どうして

決して彼を受け入れない、その姿を。

「教えてくれ。どうして、あんたのその目に、俺は映らないんだ。

生きているのに。触れられるのに。どうして俺だけを切り離すんだ

……

それは決して届かない、声だった。

地下室を出てから真っ直ぐ自室へ戻ったユウだが、気分が晴れず
に外へと向かおひと部屋を出、階段を降りた。

「ユウ?」

階段の踊り場で呼び止められ、苦い思いで顔を上げる。

だが、今は誰とも話をしたくなかった。口を開けば、自分はまた
マナにあたりちらすだろ?。

ユウは黙つて階段を下りて外へと向かつた。
追いかけてくる足音が響く。

「ユウ、待つて。あなたに話があるのよ」

マナの声に、ユウは振り返った。

彼女は真つすぐにユウを見つめていた。

彼が戸惑いを覚えるほど一途に。

マナは階段を駆け下り、ユウの前に立つた。

「ごめんなさい、ユウ。あなたのこと、疑つたりして。とても反省
してるわ。

でも、あたしは博士が好きななの。ユウを好きなのと同じくら
博士もフジオミもおじいちゃんも好きなの。ユウは博士を好きなあ
たしを、許してはくれない? やつぱり、一緒にいるの、いやかし
ら

遮られるのを恐れるように、マナは一息に喋つた。

「

ユウは遠い瞳で、マナを見ていた。

そのままマナを通り抜け、自分を動かすものに想いを馳せる。そ
の感情がどういうものかは、自分からはあまりにも遠すぎて、理解
することはできなかつたけれど。

マナの意志は、もう揺らがない。

彼女は自分で考え、そして選んだのだ。

「シイナは、あんたに優しかつた?」

穏やかなユウの問いに、マナはしっかりと頷いた。

「とても優しかったわ」

マナの気持ちちは、マナだけのものだ。

自分の憎しみが、自分だけのものであるように。

ユウは、それを理解した。そして、受け入れた。

「それなら、いい。あんたはあんたが信じたいものを信じればいい。誰も、人の心に強制はできない。俺が憎む分、あんたは愛せばいい。俺が許さなくとも、あんたが許せばきっとシイナは幸せになる」

不思議と、心は穏やかだった。

マナの瞳は、いつも迷わず自分を見据える。

マナは、今ここにいる自分を、確かに見てくれる。

「マナ、あんたは強い女だ」

「強い？ あたしが？」

「ああ。とても、強い」

自分よりもずっと。

自分は一体、誰を見ているのだろう。

「俺はずっと、あんたに会いたかった。あんたが俺を知るずっと前から、俺はいつか、あんたに聞きたいと思っていたことがあつたんだ」

「それは何？」

「もういいんだ。もう、どうでもいいことだから」

目の前のこの少女が愛しかった。

だがそれは、決して許されないものであることも知っていた。

「それでも、俺は、ずっとあんたに会いたかったんだ」

「

もう何度も見直し、完璧に内容を覚えてしまった報告書に、シイナはもう一度目を通していった。

「

結果はどうあっても同じだつた。
だからこそ、マナを育てたのだ。
未来のために。

ただそれだけのために。

「母体が、必要なよ。完全な生殖能力を持つ女性体が
出来得る限りの精子と卵子は、凍結保存してあつた。
だが、マナがいなければ、それも意味をなさない。

生殖能力を備えた子供の誕生には、その子を産む母親の存在が必要不可欠なのだ。

シイナはもう一度、書類に視線をやつた。

唯一絶対の条件。

女性の体内で育てられる」と。

妊娠・分娩は母子ともに多大な負担をかける。よつて、どちらにも安全な方法として科学技術の粋を懲らし、極めて完璧に近い人工子宮なるものまで作り上げた。

初めは、彼等も安心していたのだ。いつでも欲しいときに子供を得られるようになつたのだから。そして、それにより結婚という概念も、彼等の意識の中では徐々に重要性を失くしていった。

誰でも、いつでも好きな時に子供を得られるのだ。精子か卵子、己れの持つものとは異なるどちらかを提供してもらえば、しかし、世代を重ねる内に、人工子宮で育つた子供はクローンで

あるなしに閑わらず、肝心の生殖能力を持たなくなつていった。

原因に気づくまでには、世界の人口は驚くほどに減つていたといふ。そこまで至つて、ようやく彼等は自分達の現状に危機感を抱いたのだ。

このままでは、人類は滅んでしまうと。

今や人工子宮はクローニングにのみ使用される。

出来得る限りの技術を駆使して母体に近い環境を整えてものこの

事実は、一体何を意味するのだろう。

やはり生命の領域は、人の手には負えぬ代物なのか。

「もつと母体がいれば」

全てが枯渇してきている。

終末が、近づいている。

産まれない子供。

本来、女児のほうが生存率が高いはずなのに、産まれてもすぐに死んでしまう。

ようやく育つても、生殖能力をもたない女が多かつた。

だが、それでも、子宮さえあれば、人工受精は可能なのだ。卵子も精子も、ストックはいくらでもある。

前世紀の人間達は愚かだつたと、シイナは思つた。

彼等の代なら、まだ未来を救うことは出来たはずだ。女性は、まだたくさんいたのだから。

だが、彼女等は未来を考えなかつた。

兆しはあつたろうに、未来を救うことを放棄した。

女達は、自分達の子供を産むことに、あくまでもこだわつた。自分達に連なる子供を産むことにだ。その結果が、今の未来だ。

己れのエゴで、未来が滅ぶというのに、なぜ、誰も、強制的にでも彼女等を従わせなかつたのか。

そして、そのつけを、なぜ、今自分達が支払わなければならないのだ。

わずかに血を繋いできた人間がこのドームで暮らしてきてからすでに2世紀が経っていた。

いくら耐久性に優れても、当時の科学力で造られたものでは年月には勝てない。

新たに造り出すには、人員も、技術も、資源も、少なすぎるのだ。

このままでは、半世紀も待たずに入間は滅びる。

いきつく思考に、シイナは身を震わせた。

「いいえ。まだよ、まだだわ。まだ、私達は救われる。マナが、救ってくれる」

きつくなづく、シイナは唇を噛みしめた。

「シイナに、会っているかね」

カタオカは独り言のように呟いた。背を預けた皮張りのソファーが、ぎしりと音をたてる。

「ええ。マナの居所がつかめないので少々焦っているようです」

カタオカと向かい合つて座るフジオミは、グラスを口へ運んだ。

「マナ　か。いくつだったろうか、その子は」

「十四です。もう五年もすれば、ユカのようになれる娘になるでしょう」

「ユカ　そうか、彼女が死んで、もう十四年も経ったのか……」

ユカは、カタオカの伴侣であった女が産んだ子供だった。もちろん彼の子供ではない。

子供の産まれにくいこの社会では、いつしか一妻多夫制を取り入れていた。

身体の弱かつた妻は、一人目の子を産むとすぐに亡くなつた。

それがツシマとサカキの血を引くマサトとユカの兄妹だ。

力タオカ自身は、自分の子供をとうとうその腕に抱くことはなかった。

ユカは何度も身籠つたが、そのほとんどは流産であった。

生殖能力があり、妊娠することができるので、なぜか育たない子供達。

その度に衰えていく彼女の身体。

力タオカはユカに数えるほどしか会っていなかつた。彼女自身に、興味すらなかつた。

妊娠、出産は、多大な疲労を、肉体とその精神にかける。

子供を産むためだけの道具のように扱われる彼女。

そのためにユカは複数の夫を持つていた。

それでも、彼女はそれを不満に思うことさえないようだつた。

未来のために。

誰もが口をそろえて言つ。

その内の一人に、かつては自分も入つていた。

若かつた自分は未来を考えながら、その実何も理解してはいなかつたのだと苦々しく思い知る。

現実を見るがいい。

(未来など、何処にある　　?)

彼女を、シイナを、マナを、女達を犠牲にしてまで繋ぐ未来に、何の価値があつたというのだろう。

いきつく先は、すでに決まっていたことだつたのに。

それはすでに、同胞達にも、考えればわかる簡単なことだつたのだ。そう。考え方、していれば。

自分達は、どこかで何かを間違つた。

今になつてそれに気づく自身の愚かさを、カタオカは自嘲した。

「カタオカ？」

「いや、すまない。考え方を、していてね。もし計画が失敗しても、私は別にもう、どうでもいいのだがね。シイナには聞き入れてもらえないなかつたが」

「シイナにも、本当はそんなことはどうでもいいんですよ。彼女に必要なのは、自分に何ができるかということです」

そして、フジオミから逃れること。

マナがいれば、彼女はフジオミから自由になれる。

フジオミ自身それに気づいていた。が、別段氣にも止めなかつた。自分が満たされていれば、相手などマナでもシイナでも変わりないと思えた。

「フジオミ、君は自分の立場をどう認識している？ その義務を、どう考えているんだね？」

カタオカにとって、それは真摯な問い合わせであった。だが、フジオミには愚問だった。

なりたくてなつたわけではなかつた。
ただ生まれたときから、決められていただけだ。

全てが自分の意志ではどうにもならないことだつたから、彼にとっては全てがどうでもいいことだつた。その点では、フジオミもまた、マナと同じく『自身』を持たない人形に過ぎなかつた。

「僕には何も考へることなどありませんよ。義務は果たしましょう。ですが、それ以上を望まないでください。望まれても、僕には期待に応えるだけの氣力も情熱もありはしないんです。

あなた達が、僕等をそう造つた。ならばあなた達もそれ以外を考えるのはやめてください。今更後悔されても、何にもならない。

中途半端な優しさを見せるより、彼女を殺してでも止めてやつたらいかがですか。それさえもできないのなら、見え透いた偽善を振

りかざすのもやめるべきです」

「

黙り込むカタオカを、フジオミは憐れにも思つ。確かに彼はシイナを傷つけただろう。義務を優先して、その信頼を裏切ったのだから。

だが、彼だけを責められようか。

カタオカもまた、自分達と同じに義務を強いられた人間であるに過ぎないのだ。

「すみません。言いました

「いや。いいんだ」

大きな吐息をついて、カタオカは首を振つた。

「実際、我々は袋小路に追い詰められている鼠のよつなものだ。マナと君の子供が産まれれば、それで最後だ。それ以上増えることはないだろう。そして、マナにも正常な子供が産めるとは思えない。ユカがいい前例だ。今更過ちを繰り返すつもりはない。いずれ終わるなら、今終わらせて、大して変わりはないとも思えるのだよ」

「シイナにとつては、もつと前に言つてほしかつた言葉ですね。なぜ、今更それを僕に言つんですか」

「あの頃は、私もまだ、ありえない可能性に縋つていたんだよ。そして、シイナを傷つけた。私は後悔しているんだよ。君のために、シイナを犠牲にしたような結果になつたことを」

フジオミは大して気にした風もなく肩を竦めた。

「正直、僕には全てがどうでもいいことなんです。シイナのよつに何かに情熱をそそぐ対象もないですしね。僕はただ

「ただ、何だね」

「したいことのある人間がいるなら、そちらを優先させてやつたほうがいいと思つていいだけです。そんな風に何かに夢中になれるなんて、尊敬に値しますからね」

「だが、シイナの情熱は危険だ。すでに一度、殺人まで犯しかけている。生命の尊さを、彼女は真に理解していない。生命の重さはみ

んな同じだ。例え、それがどんな生命でも

フジオミはカタオカの言葉に、純粹に驚いた。彼の口から、生命の尊厳を聞こうとは思つてもいなかつたのだ。

「平氣でクローネングを繰り返してきたあなたとは思えない言葉だ」
フジオミの揶揄に、カタオカは表情を強ばらせた。誰にでも触れられたくない部分はある。痛みを伴う後悔であるなら、それは尚更だ。

カタオカは強ばつた口調で告げる。

「私が常に平静であつたと、信じたいのならそつすればいい。だが、問題は私ではない。

「シイナだ。彼女を、止めなければ

「止められますか、あなたに」

「いいや。できないだろ。シイナは一度と、私に心を開くまい。
私は彼女の信頼を裏切つた。君では、止められないかね」

「できません。信頼を裏切つた点では、僕も共犯でしょう。僕等は
彼女に義務を強いた。それを続ける以上、それ以外で彼女を拘束す
ることはできませんね」

シイナの面影が脳裏をよぎる。

フジオミの知つてゐるシイナは、いつも怒りと嫌悪しか彼に向け
ない。フジオミの方は、いつもそれを興味深く観察してゐた。シイ
ナを見ていると飽きなかつたのだ。

あの決して殺せない情熱は、一体何処から生まれるのだろう。同
世代で生まつていながら、この違いは一体何なのだろう。

フジオミにはわからなかつた。彼等の立場が、その魂の形成を大
きく変えてしまつていたことを。

選ばれた者と、選ばれなかつた者とに。

「　彼女を、自由にしてやつてはいけないかね？」

カタオカの思いがけない言葉に、フジオミは我に返る。

「すみません。今なんと？」

「シイナを、自由にしてやつてはどうだらう」

ためらいがちなカタオカは断定を避けてはいるが、フジオミにはそれが明白だ。

自分から、彼女を自由にしてやつてくれとカタオカは頼んでいるのだ。

随分虫のいい話ではないか。今更。

「では、マナを見つけてください。マナがいるなら、シイナはいりません。いつでも自由にしてやつていい」

「フジオミ」

「それができないなら、お断わりです。あなたと同じように僕だつて自分が大事だ。見返りもないのに奉仕なんてできませんよ」

その日の午後、珍しく部屋にいなかつた老人を探して外に出たマナは、廃墟の北の少し離れたところに、不思議なものを見つけた。草を隔てて剥出しになつた土が広がつてゐる。均等な間隔に、おびただしい数で土が盛り上がつてゐる。そこに何かを隠しているようだ。

その小さな山の上には、がつしりした木が立ててある。その木の全てを、マナはすぐに数えることはできなかつた。あまりにも数が多い。

よく見ると、立てられた木には新しいものもあれば、朽ちかけてぼろぼろのものもあつた。

老人は手前の方の、まだ新しい木の前に立つてゐた。そこには、草に混じつて、可愛らしい小さな白い花が疎らに咲いていた。

マナは静かに老人に近づいた。だが、声はかけなかつた。老人は静かに瞳を伏せて両手をあわせ、そのまましばらく動かなかつた。

「おじいちゃん。ここは何？」

だいぶ待つて、痺れを切らしたマナが問う。老人がマナに視線を向けた。

「墓だよ」

静かな声が、淋しげに響いた。

「はか？」

「そう。みな、私をおいて死んでしまつた。彼等は、ここに眠つてゐる」

「死んだ人を、土の中に埋めるの？」

非難めいた声音に、老人は穏やかに微笑つて振り返つた。

「そうだよ。それこそが連鎖というもののなんだよ、マナ。我々はあらゆるものを持して食してゐる。だから、死ぬときが来たら、私達

は今まで奪つてきたものを還さなくてはならないんだ」

「還すつて、どうするの？ 死んでからどうやって還せるの？」

「私達が、唯一所有できるもの、肉体を、土に還すんだよ。死ねば身体は腐敗する。それがよい土壤を育て、そこに新しい生命の誕生を齎らすんだ。

ここに眠る彼等は、土に還つたのだ。土と同化して新たな命を産み出し、自らもやがて新たな命となる。それこそが自然の理だ。全てが等しく循環することが。だが、一時、人間はそれを放棄したんだよ」

「どうやって？」

「体を、焼いたのさ。焼いて、石の囲いの中に閉じこめた。思えばその頃から、人間はおかしくなりはじめたのかも知れん」

憂えた瞳で、老人は遠くを見つめていた。

「大地には浄化作用がある。形あるものを分解し、己れに取り込み、一部として、もう一度新たなものに産み出す。全ての命を再生する、そんなことができるのも大地だけだ。人間は、それを忘れてはいけなかつた」

老人は、その時初めて、マナを振り返った。そして深い感慨をこめた眼差しで彼女を見つめた。

「マナ。全てのことには、意味があるのだ。それが何なのかを探すのが、人間の生きるということだ。この世界で意味のないものは何もない。全ての生命に、意味があるのだよ。そう、死ぬまで、いや、死んでも

「死んだら、それで終わりでしょう？」

不思議そうに、マナが首を傾げる。

「ある意味では、それが正しい。だが、昔、人は死んでも魂は残るのだという思想があつたんだよ」

「ユウに前に聞いたわ。あの西の山は、魂が行く場所だつて。レイジョウっていうんでしょう？ 魂つて、あたしたちの意識なんですよ

「ああ。魂とは、人間の核とも言えるものだ。そう、例えるなら、我々は肉体という入れ物の中に閉じこめられた意識であるということだ。だから、肉体が生きている間は、それが自分だと錯覚する。だが、肉体が死ねば、魂は解放される。痛みもなく、哀しみもなく、苦しみもない彼方へ」

「かなたって？ 魂は、何処にいくの？」

「さあ、それは何処か私にもわからない。まだ死んだことはないからなあ」

「死んだことないのに、どうして魂がどこかにいくなんてわかるの？」

「信じているんだよ。死で全てが終わるなんて、あんまりいい考えとは思えないからね。そういえば、古い宗教には生まれ変わりの思想もあったそうだが」

「おじいちゃん、宗教って何？」

「私にも、よくはわからんがね、ある特定の、神、または特別な人間の思想を信じることだそうだ。いわゆる、人の心の支えとなつたものか」

「神って言うのは？」

「人間ではないもの、我々を、いや、我々だけでなく、この世界全てを創つたもののことをそう呼ぶのだ」

マナは眉根を寄せた。

この神という概念を、彼女は理解できなかつた。

マナの知識の中に、神というものはない。宇宙、地球、生命の誕生、それら全てはテイスクの中で見聞きしただけのことで完結していたからだ。

シイナは、マナに倫理や哲学という抽象的な精神世界に関することを教えなかつた。非科学的なものを全て排除したのだ。

そんな彼女の表情から、老人は簡単に付け加えてやつた。
「要するにだ、我々普通の人間とは違い、できないことを全てできるもののことだ」

「じゃあ、コウだわ！ コウが神なんだわ、コウはあたしたちと全然違う。なんでもできるし、髪も目も、色が違うわ」

老人は苦笑した。

「コウは人間だよ。あの髪と目の中の色は そう、生まれたときからの病気なのだ。血が近すぎるために起つる」

「血が近いって、どういうこと？」

「マナと同じ血を持つもの。例えば、マナの母親、父親、マナの母親から産まれたマナの兄妹、マナの両親の兄妹、その子供達。これらはみんなマナと同じ血を持つ。近親者、または血族ともいう。血族同士婚姻を結ぶことで起きやすい遺伝病、これは身体のメラニンという色素が欠乏して、黒い組織をつくれなくなるというものだ。だから髪と目、肌の色が薄く赤くなってしまう」

「じゃあ、コウのあの力は？」

「それは私にもわからん。あれもまた濃すぎる血が要因なのか」

「ドームには、コウみたいな人はいなかつたわ。血が濃すぎるとうのは、いけないことなの？」

「血族結婚は古い時代からの禁忌とされてきた。不妊や障害、遺伝病など、さまざまな弊害が現われるからだ」

「ああ。わかるわ。ドームにはクローンがたくさんいるけど、クローンはみんな子供を作れないもの。それに、クローンなんて『えられたことしかできないの』

マナの無邪気な口調に密かな侮蔑が含まれてることを悟り、老人はゆっくりと首を振った。

「マナ、そんなふうに言つてはいけない」

厳しい口調に、マナはにわかに怯えた。

「おじいちゃん？」

「マナ、おまえさんは優しい子だが、知らなすぎる。この世界に生きているものは全て慈しむべきもの、慈しまれるべきものなのだ。生命とは、そこに貴賤を見いだすものではない。みな平等に尊いものなのだ。例えそれが、自然の理に反するものであつても」

マナはまた、混乱した。そんなことを、シイナは教えなかつた。

クローンは、知能のレベルも高くなく、人間としても扱われていな
い。自分達とは違うのだと、以前自分に言つたのだ。そのことを老

人に語ると、老人は小さく笑つた。

「では、おまえさんは、自分とは違ひコウや私を、生きる値打ちの
ないものだと思うのかい？」

「そんな！！ 一度も考えたことないわ、そんなこと。あたしは、
ユウもおじいちゃんも大好きだもの」

「では、その気持ちを他のものにも向けておあげ。誰しも、望んで
そうと生まれることはできないのだよ。そして、それは誰の所為で
もない。

望んだものになれなかつたことを苦しむものは多い。それを蔑ん
ではいけない。その傷を、理解しよつと努めなければならないのだ
よ」

「ええ、そうね。『めんなさい』、おじいちゃん。あたし、いけない
ことを言つたわ。おじいちゃんやユウを蔑んだりするつもりはなか
つたのよ」

「わかつてゐるよ、マナ。おまえさんはずっと、そう教えられてき
たのだから無理もないね。ただ、これから知つてほしいのだよ。こ
の世界に生きる全てのものの美しさと、かけがえのなさを。

この世界は、全てが愛おしい存在で満ちている。今ここに立つし
て立つて呼吸をしていること、それだけで、私は本当に生きている
ことがすばらしいと思うのだよ」

「知りたいわ、あたしも」

憧憬の眼差しで、マナは老人を仰いだ。

「どうして、おじいちゃんの考えていることは、こんなにあたしと
違うのかしら。あたしは、今まで呼吸することの意味を感じたこと
はなかつた。それがどんなに大切なことなのかも。教えられなきや、
わからないものなの？」

「そうだね。自分で気づける人もいるが、マナ、私も教えてもらつ

たんだよ。母にね

「母　　お母さん　ね！！　教えて、おじいちゃん。お母さんて、どんな人？」

マナは老人の衣服の袖を握り、話をせがんだ。老人はそんなマナに優しく語りかける。「そうだな。とても、落ち着いていて、静かで、いつも母からはいい匂いがしていたのを憶えているよ。優しく、私をとても愛してくれた。時には厳しく、叱つてもくれた。

一度、私が　　そう、おまえさんよりもまだ小さいとき、母のいいつけを破つて、夜、外に出たことがあつたんだよ。幸い何事もなく戻ってきたが、そのとき初めてぶたれたんだ。そして、その後彼女は私を抱きしめて泣きだした。本当に彼女は私を愛してくれた。ああ。懐かしいね。本当に、とても、懐かしいよ。彼女に会いたい。話したいことがたくさんあるのに」

「いいわね。おじいちゃんには、お母さんがいて。あたしにはないわ。あたしのお母さんて、どんな人だったのかしら。おじいちゃんのお母さんみたいに、優しい人だったのかしら」

「きっとねうだよ。子供を愛さない母親はいないからね」

「本当？　みんなそうなの？　あたしがおじいちゃんを好きみたいな気持ちなの？」

「そう、そして私がおまえさんとコウを思つ気持ちと同じものだ」触れた手から感じる暖かな感情に、マナは安堵した。老人は、マナを愛してくれている。それがわかるのはとても嬉しかった。

「親が子を愛するということは、自分を愛するのと似ている。自分から分かたれた一部だから、きっと切り離して考えるのは難しいのだろう。だが、それは決してそれ以上であつてはならないのだ」

「それ以上つて？」

「母と息子。父と娘。彼らは最も惹かれあつてはならない存在だ。何故なら彼らは最も濃い血を、その身に有しているのだから」

「ああ。つまり、伴侶　としていけないってことなんでしょう？」

「それに、歳も離れすぎているもの、無理があるわ

「マナは何にでも興味をもつ。ユウ以上だ」

老人が笑う。だが、マナは当然のように頷いた。

「だって、あたしは何も知らなかつたのよ。ドームで教えてくれたことも大事だけど、それはほんの少しだわ。あたしは知りたいのもつともつと、たくさん、いろんなことを」

マナは老人の腕にぐつとしがみついた。

「おじいちゃんは好きよ。あたしに色々なこと教えてくれるもの。あたし、ここに来てよかつた。そうじゃなかつたら、何にも知らないまま、博士に言われるままだつかも知れないもの」

老人を見上げると、皺深い顔が静かに微笑んでいた。

「あたしね、考えるの。まだ決められないけど、おじいちゃんの言つたこと、きちんと考えるのよ。自分がどうしたいのか。

でも、それを決めるには、あたしまだ何も知らなすぎるの。だから、決めるためにも、もつともつといろんなことを知りたいの」

驚いたことに、少しづつ、マナは人形から脱し始めていた。自己を確立し、学び始めている。その成果は恐るべき速さでなされるのだが、それについて、マナの心には同時に不安が芽生えていく。「どうして博士は、あたしに何も教えてくれなかつたのかしら」

次の日もマナは老人とともに時間を過ぎていていた。ユウはいつも食事が終わると約束のように地下に姿を消す。

マナはそれを、今でもずっと不思議に思っていたのだが、やはり口にすることはなかつた。それに、ユウのいない間に老人の話を聞くことが、マナにとっては楽しみになつていていたからだ。

「今日は、海の話をしよう」

「うみ？」

「そう。この地球の表面の大部分を占める太古からの水だ」「知ってるわ。塩分を多量に含んでいるんでしょう？だから塩辛いって。青いのよね？」

「ああ。とても美しい色をしているよ。マナにも見せたいね。あの美しい海の色を」

マナを見ていながら、老人の瞳は、どこか別の そう、マナのまだ見たことのない海を見ているのだろう。老人はマナに話して聞かせるとき、よくそんな遠い瞳をするのだ。

マナは正直、それが羨ましかつた。

老人の感情を読むことはできるが、見えないものを見ることはできなかつたからだ。

「初めて地を覆う濃く青い水を目の人あたりにしたとき、涙が出たよ。こんなにもすばらしい光景が、あつていいものかと。

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。私の生涯の中で、あれほど美しいものを見るることは、きっともうないだろうなあ」

食い入るように見つめているマナに気づいて、老人はそつと笑つてマナの頭を撫でた。

「今度、ユウに連れていってもらいたい。あの子の力ならば、すぐだ」

「本當?」

「ああ。きっとマナも感動するよ。涙が出るほど、綺麗だと感心されただといいんだけど」

マナは正直言って、そのように感じられる自信がなかった。
老人の田と自分の田は、こつもどにかが違うのだと思えてならなかつた。

遠い瞳をして、そこにはないものをとても幸せそうに見る老人の目は、きっと、自分とは比べものにならないほど美しいものを感じられるのだと。

「マナ、ユウを頼むよ」

「?」

「あの子は、きっとおまえさんのためなら何でもしてくれる。どんな願いも、叶えようとするとだろう。私から言つのも何だが、おまえさんを、この世界の何よりも大事に思つている。それを、忘れないでおくれ」

その言葉に、何故かマナは不安なものを感じとつた。

「どうしたの、おじいちゃん? 急にそんなこと言つてだして。何だからもう会えない、何処か遠くへ行くみたいに」

「おや、そんなふうに聞こえたかね?」

「ええ。嫌だわ、おじいちゃん。そんなこと冗談でも言わないで。あたしたちをおいて、何処へも行かないでね」

「どうやら、マナにいらぬ心配をさせてしまったようだ。まあ、中へ入る。もう田があんなに高い」

老人は杖を持ちなおし、開いているまつの手でマナの肩に触れた。
その足取りが、何だかいつもより重そうに見えた。

「ああ。きっともうすぐ……」

一步一步、ゆっくりと前に進みながら、遠くを見つめて、老人は呟いた。

それが一体何を意味するのか、マナはまだ知らなかつた。

その日につつて、老人はいつまでも部屋から出ではこなかつた。
「ユウ、おじいちゃんどうしたのかしら。いつもなら、とっくに起きてくれるはずなのに」

「起こしてくる。マナはここにいて
ユウが老人の部屋へと走つていく。
マナは自分の席につき、湯気のあがる朝食を見つめていた。
しばしのち、

「マナ！！

「！？」

突然、ユウの声が脳裏に響いた。触れてもいないのに伝わってくる
強い感情。こんなことは初めてだ。

「ユウ！！

いやな予感がする。マナは食堂を出、老人の部屋へ急いだ。扉は
開いたままだ。中へ駆け込む。

「おじいちゃん、ユウ！！」

ユウは老人を抱き上げ、ベッドへと運んでいく途中だつた。

「おじいちゃん、どうしたの？」

「倒れたんだ。マナ、薬を。いつものやつでいいから
「ええ」

ベッドの脇に落ちていた錠剤を、マナは拾いあげた。備え付けの
バスルームに行き、グラスに水を入れ、戻つてくる。

ユウは老人の背中を支えて起こしてやると、薬を口に入れてやつた。グラスを口に運び、ゆっくりと傾けると、老人は静かにそれを飲んだ。

「おじいちゃん、大丈夫？」

マナが心配そうに問うと、老人は安心させるように笑った。

「……ああ、大丈夫。少し、目眩がしてね。薬を飲んだから、もう落ち着くだろ?」

だが、老人の顔は血の気が引いて、病的に白くなっている。

「何か食べないと」

「ああ、では何か温かいスープでももらえるかい?」

「ええ。すぐ温めて持つてくるから、待つてて」

マナは急いで部屋を出ていった。食堂へと向かう足音が、老人の部屋まで微かに届いていた。

「　その時が、来たの?」

老人に視線を向けずに、小さくせきやきが洩れた。
立つたままのユウを見、老人は椅子に座るよう促した。

「ああ、そろそろ、いかねばならんようだ」

「おじいちゃん」

「わしがいなくなつても大丈夫かい?」

血の氣のない渴いた指が、椅子に座つたユウのそれに重なる。ユウは取り乱したりせず、落ち着いていた。

「　大丈夫だよ。わかつてたから。何も心配ない」

「　そうか……」

老人は悼ましげにユウを見つめた。まるで苦痛を堪えるかのよう

に。

「おじいちゃん?」

「　おまえは、いつも哀しみを内に閉じこめてしまう。私達は、おまえに、心をそのまま伝えるということを、教え忘れてしまったのかも知れないなあ。」

でも、ここにはマナはない。私達だけだ。心をそのまま表して
もいいんだよ」

ユウが困惑したように老人を見る。

「どうしてそんなことを？」

「おまえが、とても可哀相に見えるからだよ。いつも、決して手に入らないものを求めすぎているように、とても可哀相に見える」

老人の言葉に、コウは一瞬目を瞑り、それから痛みを感じるようになり、「うう、一度ぎゅっとかたく目を閉じた。

「コウ

「おじいちゃんの言つとおりだ。俺には、何も手に入らない。いつも、俺は独りだ」

老人はかすかに首を振る。

「独りではないよ。おまえは、決して独りではない」

「だって、おじいちゃんは逝つてしまつじゃないか。どんなに俺が頼んでも、みんな先に逝つてしまつじゃないか！…」

「コウ

「いつだって、俺は独りだ。みんな俺から離れていく」

涙の伝うコウの頬を、老人は引き寄せ、横たわったままの胸に抱いた。

「コウ。私が死んでも、おまえは独りにはならない。マナがいるよ。あの子が、おまえの傍にいてくれる」

コウはかすかに首を振る。

「マナだつて、いなくなる」

「いいや。マナはおまえを選ぶよ。きっとずっと、マナはおまえと一緒にてくれる。私達が与えてやれなかつたものを、マナが、おまえに惜しみなく与えてくれるだらう」

「

マナが部屋にいても、老人は眠つていてことのほうが多くなつた。起きていても呼吸が荒く苦しそうに見える。

量が増える薬は、老人の体力を奪わないように深い眠りを与えてしまうのだ。

「おじいちゃん、いつになつたらよくなるの？　あたし、何かでき

ない？ どうしたら苦しいのがなくなるの？」

珍しく起きていても楽そうに見える老人に、マナは問うた。

「ありがとう、マナ。でも、これはもう治らないんだよ」

「どうして？ 病気なんでしょう？ だったら原因がわかれれば治せるはずだわ」

「マナ、これは病気ではないんだ。寿命なんだよ。年をとりすぎて、命がつくるんだ。死ぬんだよ、もうすぐね」

穏やかな口調にそぐわない内容だった。

マナはじっと老人を見つめていた。老人は横になつたまま顔だけをマナに向けていた。

「死ぬって、どういふこと…？」

聞きたくないよつに、小さな声だった。わかっているのに、何だからそれはまだマナにとって理解できるものではなかつた。

生命活動が停止すること。それが死。

知識としてはわかる。だが、それが自分にとってどのよつな作用を及ぼすのか、見当もつかなかつた。

「もう一度この目を開けないとどうことだよ。もう一度とコウやおまえさんとこんなふうには話せないとこうことだよ。

死とは、永遠の解放でありながら、時には残酷だ。愛しこのものとの永遠の別れも、確かにそこには在るのだから

「いや……」

マナは首を振った。

「マナ」

「いや、そんなのいや

マナは老人の死という言葉をにわかに理解した。もう会えなくなるのだ。もう、話せない。この瞳が、マナがあんなに憧れた美しい思い出を遠い眼差しで見ることがなくなるのだ。それは想像でも耐えられないことだ。

「おじいちゃん、いやよ。どこにも行かないで」

涙が、マナの頬をとめどなく流れる。

「マナ、哀しんではいけない。残される者の哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにはなれない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に向かえなくなるんだよ」

「そんなのわからない。あたしたちをおいていくの？　ここにあたしとコウを残して逝ってしまうんでしょう？　そんなのいやだもの」

溢れる思いを止めることはできなかつた。

今、老人が死を迎えることはできなかつた。老人が、死のうとしているのだ。

「いや、いや、おじいちゃん。死んじゃいやよ。何でもするから、お願ひ、死なないで」

「マナ……」

「嘘でしょ、おじいちゃん。何処にもいかないで」

涙に濡れるマナの頬に、老人はそっと手を伸ばした。だが、その手は震えていた。拳げる」とか「もつやつとなのだ」ということが、マナにさらなる恐怖を『える。

「マナ。自分が何であるのかを見極めるのだ。生きていること、今ここに在ることだけでは、意味はない。意味とは、自分が決めるもの。自分で見いだすもの。それがあれば、どんなになつても、きっと生きていることはすばらしいと思える。

私は幸せだつたよ。とてもすばらしい人生だつた　たくさんの仲間達と、そしておまえさんたちとすこせて、本当に、良かった」老人の呼吸が、浅く、速くなつていぐ。

「おじいちゃん！」

震える老人の手を、マナは必死で握つた。少しでも震えを止めた。そうしないと、存在がすりぬけていつてしまいそうに思えた。

「マナ。おまえさんはいい子だ。本当に、いい子だ。おまえさんとユウは、私の生涯の中で、一番あざやかな色だつた」

老人は、マナの背後にじつと立ちゆくユウを見た。

「おじいちゃん……」

「コウ。マナを守りなさい。全ての苦しみと哀しみかひ、マナを守るのだ。それができれば、おまえも幸せになれる。きっと」

「おじいちゃん、でも、俺は

「幸せになりなさい。一人とも

静かに、老人は目を閉じた。

それきり、動かなかつた。

「おじい、ちゃん…？」

答える声は、永遠に失われていた。

「いや……」

永い凍えた沈黙の後、マナの声がかすれて漏れた。

「いやよ、こんなのにや。おじいちゃん、目を開けてよ。ねえ、起きて。約束したじゃない。もつとたくさん、いろんな話をしてくれるって言つたじゃない……」

「マナ

「いやよ、いやあつ……」

「マナ……」

コウがマナを強く抱きしめた。その瞬間、混乱したマナの中に、自分のものではない、もつと強く、もつと深い哀しみが入り込んできた。息がつまり、激しく、心の中だけで渦をまく感情の嵐。

「こんなに深い哀しみを知らない。

「こんな哀しみを、自分は持てない。

これは、コウのものだ。

「マナ、仕方ないんだよ。おじいちゃんはもう、十分生きたんだ。人間は、いつか死ぬんだ。おじいちゃんにも、その時が来ただけなんだよ」

マナは顔をあげ、そう言つた。コウを見つめた。

彼は、何処か虚ろにも思えた。

マナはコウの背に手を回し、しつかりと彼を抱きしめた。

「コウも泣きたいのね。泣いてもいいわ。一緒に、泣きましょう。そうしないと、コウのまづが、壊れちゃうわ」

「

「苦しいの。これから、どうすればいいの。大好きだったのに。ずっと一緒にいたかったのに。」

マナは肩に、コウの熱を感じた。押ししつけるようにマナの肩に額をあて、彼はずっと黙っていた。

それでも、コウは泣かなかつた。泣けなかつた。

深く激しく、その心の内は泣き叫んでいるのがわかるのに、その感情は、決して表には出でこない。

冷たい壁に押さえつけられていよいよ、コウはただ黙つてマナを抱きしめていた。

「まだマナは見つからないの！？」

「一日おきの外からの通信は、シイナにとつて決して喜ばしいものではなかつた。

「搜索を続けなさい。あらゆる廃墟を探すのよ。見つかるまで、帰つてくるのは許さないわ！！」

叫んで、シイナは通信を無理矢理切つた。

「

苛立ちでおかしくなりそうだ。

搜索に向かわせたクローンは、そのほとんどが外に出たことのない者達だつた。それ以外のクローンはドームを維持する重要な仕事についているため、そこを離れられない。かといって、シイナが自ら行くことは許可されない。彼女はあくまで指揮することを許可されただけ。搜索中彼女の身に何かあつては困る故に。

シイナは、このドームの全てを掌握している。全ての機能は彼女を通じて円満かつ円滑に行なわれる。カタオカは指導者ではあるが、事後報告という形で把握するのみ。その全権をシイナに任せている。彼がシイナより強い権限を持つのは、あくまで議会においてだけなのだ。

「

カタオカも、その他の議員も、クローン達も、シイナにとつては役に立たない厄介者にしか思えなかつた。

考えることさえ放棄した人間達。受け身にしかなれない無能者。

役に立たないのなら、生きている価値さえないので。

いっそ一思いに殺してしまいたくなる。生きていくてもかまわない。さつさと死んでくれればいいものを。

「まったく、なんてことかしら

椅子に身体を沈み込ませながら、シイナは大きく吐息をついた。

マナとコウの搜索は、思うようにはかどらなかつた。

無理もない。いくら小さな島国とはいえ、それは、他の大陸と比べてのことだ。

ドームは、島の中心よりやや南に位置している。気象すら「ントロールし、苛酷すぎる環境を克服したとはいえ、無理な変動はどこかに歪みを引き起こす。穏やかにめぐる四季に対して、少しでも無理を避けようとしての対策であつた。

登録上の全ての人間とクローン達が南へ下った今、北はすでに彼らにとって未知の世界であった。減少しすぎた人口と進んだ科学力のために、穀物等を育てるための広大な土地を確保せずともよくなつたのだ。

打ち捨てられた建造物は廃墟と化し、各地に無残な姿を残している。多く、そのどれか一つに、コウ達は隠れ住んでいるのだらう。

「マナ……」

マナの身が、シイナは何より心配だった。外の世界で、どんなに恐い思いをしてくるだろう。どんな苛酷な生活を強いられているのだろう。

考えるだけでいてもたつてもいられなくなり、シイナは振り切るように部屋を出た。探しに出たい自分を押さえ、仕事に戻らなければならぬ。感情を静かに押さえる。足早だった彼女の歩みが、徐々に戻っていく。

緩いカーブを描く廊下から直線に移動し、エレベーターへ向かう。その時、温室を見ているフジオミの姿を捕らえた。足音に気づき、フジオミが振り返る。

「やあ

今は、彼の存在そのものにさえ、苛立つ。

こんな男が、今もつとも価値あるものだとほ。

エレベーターに乗り込むシイナに続き、フジオミが独り言のよつに呴く。

「議員達は、もうあきらめたほうがいいと思つてゐるらしきね」
同時に身体にかかる浮遊感。

「あなたも同じ意見なの」

フジオミは肩を竦める。

「さあ。どうでもいいというのが僕の正直な意見だが、君が望むのなら、君の好きにすればいい」

この事態が、彼にとつて実に愉快なことのようだ、フジオミの口調は嬉々としていた。

エレベーターが止まると同時に、ドアが開く。黙つて廊下を歩きだすシイナに、背後からのフジオミの声。

「知つているかい、シイナ」

不愉快さを隠さず、シイナは応える。

「何なの？」

「その昔、この地には美しい鳥がいたそうだよ。だが、人間が自分達の利益を満たす間にその鳥は繁殖の場を奪われ、乱獲され、とうとう滅んでしまった。

自分達の愚かさに気づいた人間があらゆる努力をしても、結局それらを救うことはできなかつた。滑稽なのはそのあとさ。別の大陸の全く同じ鳥を連れてきた。スペアがあるからそれで代用しようとした

歩みを止めて、シイナは振り返つた。

フジオミはかすかに微笑つていた。

「何が言いたいの」

「いいや。ただ、人間の愚かさはどんなに時を経ても変わらないもののかと思つてね」

肩を竦めるフジオミを、シイナは苛立たしげに睨んだ。

「私の行為が愚かだと言いたいの」

「耳に痛い真実は素直に聞けないものさ。僕が何を言つても君の耳には『冗談としか聞こえない』ようにな」

シイナの手が上がつた。その手は鋭く風を切り、フジオミの頬を

打つた。

「いきなり、それはないんじゃないか」

あくまで彼は冷静に問う。それがシイナをより怒らせることを知つていながら。

「人類は滅びないわ。フジオミ、あなたには選ばれた者としての自覚が足りないようね。くだらないおしゃべりに時間をつぶす暇があるのなら、マナの心配でもすればいいわ」

「マナ、マナ。君の口から出る言葉はその名だけだな。まるで恋しているみたいだ」

フジオミが息をつく。

「君自身の望みは？　君が君のために望むことは、何もないのか」「私の望みは、マナが叶えてくれる。それこそが望みよ。そのためには、何を犠牲にしてもいい」

「じゃあ、僕の意志も？　マナを愛していくても、それが義務だと」

「ええ。そうよ。あなたとカタオカだって、私に義務を強いたじゃない。私はあなたを愛してもいい。それでもあなたは抱いたわ。同じ気持ちで、マナも抱けばいい。」

大いなる目的の前には、個人の些細な感情など、意味を持たない。あなたとカタオカが私にそれを教えた。あなたには責任がある。義務がある。特別な人間なのよ。それを、もつと自覚して行動しなさい

い

「だがそれは、僕が望んだわけじゃない。君が望んで、そう生まれたのでもないよ」

冷徹とも思えるフジオミの声。

その言葉の無責任さを、彼は自覚していなかつた。そしてそれが、どれほどシイナを傷つけるのかも。

「今まで散々その恩恵に浸かってきたくせに、今更勝手なことを言わないで！！」

堪えきれずに、シイナは叫んだ。

「あなたはマナとの間に子供をつくるのよ。それがあなたの義務だわ。私は私の義務を果たしている。あなたもあなたの義務を果たしなさい。それができないのなら、今後私に指一本触れないで！！」

感情の高ぶりを押さえきれずに、シイナは不覚にも溢れた涙にさえ気づかなかつた。

気づいたのは、フジオミが意外にも、彼女がかつて一度だけ眼にしたことのある表情を、その顔に見せたからだ。

あの、悪夢のような夜の中で

いやつ、フジオミやめてやめて、ちついやあーー！

一の腕を押さえつける確かな痛み。

どんなに泣いて叫んでも、彼は繋いだ身体を離してはくれなかつた。引き裂かれるような痛みと恐怖しかなかつた。あまりの恐怖と苦痛に、彼女は自ら意識を手放した。目を覚ました時には覚めてくれる悪い夢だと祈りながら。

だが、目を覚ましても始まるのは悪夢の続きだけ。全てが終わつた後も残る身体の奥の鈍い痛みを感じて、シイナは無言で涙を流し続けた。

シイナ。

ためらいがちにかかる声。

虚ろな瞳で見返すシイナには、おぼろげなフジオミが映る。

まるで、大切にしていたものを自らの過ちで失ったような、どう

しうつもない後悔とよく似たやるせない感情が、瞳から伝わる。

それは、壊れてしまった一人の関係を、もしかしたら彼も悔やんでいたのかもしれない、一瞬だけシイナに思わせる表情だった。

めまぐるしく甦る忌まわしい過去に、シイナの身体が拒絶反応を示した。

嘔吐感と激しい震えに身体が支えを失い、膝が崩れる。

「シイナ！？」

驚いたフジオミがとっさに腕を伸ばし、シイナを支えようとする。

「私に、触らないで！！」

鋭い眼差しで、シイナはフジオミの手を拒んだ。

「」

「言つたはずよ。義務を果たす気ががないのなら、私に触れるのは許さない。

さあ、消えて。その姿を私に見せないで。これ以上、私を不愉快にさせないでっ！！」

伸ばした手を、しばしまよわせ、フジオミは引いた。

視線が絡み合い、わずかな沈黙の後、フジオミは無言で背後のエレベーターに乗った。シイナは壁に寄り掛かり、しばし泣いた。

空が、心なしか高くなっているように思えた。

気がつけば、雲は以前よりずっと高い位置に浮かんでいた。

老人の遺体は、清潔な布に包まれ、外に運びだされた。

墓所に埋めるのだと、マナはユウから聞いていた。

老人の墓は、あの、白い花の咲く墓の隣だった。

前の日からすでに掘っていた穴に、ユウは静かに老人の身体を横たえた。ゆっくり静かに、土がかけられていく。

「おじいちゃん、苦しくないの？」

虚ろなマナの声に、ユウもまた、虚ろに答える。

「マナ、これはもうおじいちゃんじやないよ」

感情のない呟き。

ひどく乾いた答えに、不意にマナは意識をはつきりとユウに向けた。

ユウは黙つて土をかけていた。

その眼差しさえも虚ろだった。心は、何処にもなかつた。

「ユウ」

「おじいちゃんだったものは、もうこの身体の中にいない。俺達が会いたいおじいちゃんは、もう何処にもいないんだ」

ユウの心は、傷つき、痛み、壊れかけていた。

いつもそうだったのだ。

だが、それを押さえつけているから、いつまでも癒されることがない。

今はつきりと、マナは理解した。

(いけない。ユウを傷ついたままにしておいてはいけない)

痛烈に、そう思った。

「違うわ、コウ。そんなことない。おじいちゃんはいるわ。この世界の何処か、死んだ人がみんな行く場所で、ちゃんとあたしたちのことを見ていてくれてる」

機械的に作業を続けるコウの腕を、マナは捕まえて止めた。

そして、自分の方を向かせた。

作業を止められても、コウは動かなかつた。

こんなコウを見たくなかった。

コウを呼び戻したかった。

老人の死とともに失われようとする、コウの本質を。

虚ろな眼差しは決してマナを捕らえてはいなかつたが、それでも、マナは言つた。

「ねえ、コウ。おじいちゃんは言つたわ。死んでも終わりじゃないつて。おじいちゃんは解放されたのよ。痛みも哀しみも苦しみもない彼方へ、みんなが待つてる場所へ、行くことができたのよ」「真摯なマナの言葉に、コウは虚ろな眼差しをゆっくりと向け始める。

「おじいちゃんはいるの。あたしたちがいつか死んだら行ける場所で、待つてる。あたしたちは、そこでまた会えるの」

「また、会える　？」

「ええ。会えるわ」

「　そこには、みんながいるんだ」

「ええ、そうよ」

マナも、本当にそんな場所があるのかはわからなかつた。

けれど、信じたかつた。

そして何より、この田の前の傷ついた可哀相な魂を少しでも癒したかった。

「そうよ。痛みも苦しみもない場所で、みんな幸せなの」

「だから、『哀しんではいけない。哀しみが強いと、死んだ者は心安らかになれない。』いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に

向かえなくなる』『

虚ろなユウの声。

「でも、マナ。俺は 哀しいんだ
不意に、静かな咳きがこぼれた。

「ユウ』

「魂だけでもいい。どんな姿でもいい。ここに、いてほしかった。
哀しそぎて、どうにもならないんだ。どうして、俺はいつも
そつと、マナはユウの頬を引き寄せ、抱きしめた。温もりを、伝
えるよう』

「俺がおじいちゃん達と暮らしが始めた時は、もっとたくさんいた。
みんな優しかった。とても楽しかった。大好きだった。でも、みんな
死んでしまったよ、俺をおいて。おじいちゃんも死んでしまった。
もう誰も、いなくなつた」

マナには、ユウの哀しみがわかつた。彼を愛しただろう人達の愛、
彼が愛しただろう人達への愛が、痛いほどわかつた。

「あたしがいるわ。ユウ』

哀しまないでとは、言えなかつた。

自分はユウより長く老人とすこしたわけではなかつた。それでも、
その死は心に深い哀しみを残した。愛した人達が自分をおいて死ん
でしまうのを常に見届けねばならない哀しみと苦しみは、一体どれ
ほどの傷を、彼の心に刻みつけたのだろう。

「あたしが、あなたの傍にいる』

「マナ、あんただけは、俺より先に死なないでくれ。俺はもう、お
いていかれるのはいやだ』

「ええ。約束するわ。あたしは決して、あなたより先には死ない
ユウの身体は震えていた。

安心させるよう、マナはいつまでもユウの身体を抱きしめていた。

ユウは眠らなくなつた。

眠れなくなつたというほうが、正しいかもしれない。そして、マナの傍を離れなくなつた。まるで、目を離したらもう一度と会えなくなるかとも言つよう。

大丈夫だとマナが何度も言つても、ユウは親の後を追う雛鳥のように離れない。

マナは不安だった。傍にいるのがいやなのではない。眠らないユウが、日に日にやつれていくのがわかるからだ。だが、マナは自分がユウのために何をすればいいのか、わからなかつた。

そうして、一週間が過ぎたある朝、ユウは倒れた。

「ユウ！？」

かけよつたマナは、ユウの顔に手をやつた。呼吸はしている。生きている。

「よかつた、死んじやつてない…」

きっと身体が限界を訴えたのだらう。ユウは意識を失っていた。眠つているのだ。

マナの力ではユウをベッドまで運ぶことはできなかつた。ユウの部屋に行つて枕と掛布を取つてくる。

意識を失つても、ちつともユウは樂そうに見えなかつた。眠りが浅いのか、身体が何度も痙攣する。白い肌は、死ぬ間際の老人を思わせた。

頭の下に枕を入れ、掛布で身体を覆つ。

（ユウも、おじいちゃんみたいに…）

そう考えただけで泣きたくなる。

マナは老人に会いたかつた。彼なら、きっとユウを救けてくれるのに。

人は何度も生まれ変わって、何度も地上に甦るのだと、老人は言つた。

「でも、そんなに待てないわ。いつになるのかも、それがおじいちゃんのかも、わからないわよ……」

今、会いたいのだ。

戻ってきてほしいのだ。

「淋しいわ、おじいちゃん。ユウもあたしから離れていつたら、どうすればいいの？ あたしも待つてればおじいちゃんのところに行ける？」

口に出してから、突然それが一番いいことのようにも思えた。老人が戻つてくれないのなら、自分達が老人のところへ行けばいいのだ。

そこには老人が言ったように、きっとみんながいるのだろう。ユウが失つてしまつた、たくさんの愛しい人達が。

そこに行けば、ユウも自分も、淋しくはないだろう。

信じられないだろうが、昔この地にはたくさん的人がいたんだよ。たくさんの車が行き交い、夜には星よりも輝く光が地上を照らした。その時、きっと人間はこの世界で自分達にできないことはないだろうと思つていたに違いない。

この世界に比べれば、人はとても無力なものだ。だが、彼等はそれにどうとう気づかなかつた。気づかないまま、過去において過ちを犯し、未来において償いを求める。

この美しい世界の中で、人間だけが、醜いのだよ。なぜなら、人間だけが、産みの力を軽んじるからだ。生命を軽んじ、冒涜し続ける。その愚かな行為の結果が、今のこの世界なのだ。

いずれこの地上に、人間はただの一人もいなくなる。人だけがいないこの地上は、きっと永遠に近い時を過ごすだろう。全ての風が地上を優しく通り抜け、そこには私達が決して得られなかつた全ての静穏がある。

目に浮かぶようだよ。その光景が。

それがきっと、この世界で最も美しい光景になるだろう

きつとこの地上ではない別の場所に、みんな行くから、いなくな

るのだ。

「でも、今は駄目よ。おじいちゃん、ユウを連れていかないで。行くなら、一人で行くから、ユウだけ連れていかないで」

びくんと、ユウの身体が跳ねた。

「……？」

目を覚ます。自分を覗き込んでいるマナの顔を視界に捕らえ、些か驚いているようだった。

「ユウ……」

「マナ　どうして、俺、何で……？」

「倒れたのよ。よかつた、おじいちゃんみたいに死んじゃうかと…それが限界だった。」

「マナ？」

マナの大きな瞳から、見る間に涙があふれる。マナがユウにぎゅっとしがみつく。

「マナ、ごめん。心配かけたね」

「あたしをおいていっちゃいや。ユウもおじいちゃんみたいにあたしをおいていくのかと思つたわ

「行かないよ。マナをおいて、どこにも行かない」

「行くんなら、一人で行かなくちゃ。一緒に行かなくちゃいやよ」

マナは涙に濡れた顔を上げて言つ。

ユウはなぜか強ばつた顔でマナを見下ろしていた。

「俺と一緒に……？」

「ええ。一人ならどこにでも行けるわ。おじいちゃんも言つてたもの。ユウは、どこにでも連れてってくれるって」

ユウは、何か考えているようにも見えた。瞳には、何か強い意志が感じられた。

「マナ、本当に俺と一緒にいく気がある？」

「ええ」

「後悔、しない？」

「しないわ。だって、ユウと一緒におじいちゃんのところへ行くん

だもの

「ぐくりと、彼の喉が鳴った。

何かをためらっているようにも見えた。

「じゃあ、目を開じて…」

言われるままに、マナは目を開じる。

「少し、苦しいかもしない

」

「少しでしょ。いいわ

首筋にかかる指は、なぜか震えていた。

だが、苦しいと思える時は来なかつた。ただ震える指がマナの首筋にかけられたまま、混乱したような感情が伝わってくるだけだ。不意に、コウの手が離れた。

「コウ？」

目を開けて、マナは驚いた。

コウが泣いているのだ。

「コウ、どうしたの？」

コウは首を横に何度も振つた。

「ごめん、マナ……」

「どうして泣くの、コウ？」

「……マナが望むなら、どこにでも連れていいく。何でもしてやる。でも、おじいちゃんのところへは、連れていけない…」

「コウ」

激しい後悔と、それによる苦痛が、コウの内に感じられた。

「今は駄目だよ。今はまだ、その時じゃない。俺には、できない…」

両手で顔を覆つて泣くコウを、マナは抱きしめる。

「コウ、泣かないで。今じゃなくてもいいのよ。いつでもいいわ。いつか、一人で行きましょう。一緒に行くのよ。ね？」

「ごめん、マナ。ごめんなさい、おじいちゃん…」

マナにしがみついて、声をあげて泣くコウが、なぜそうするのかマナによくわからなかつた。だが、泣きたいだけ泣いたら、きっと

…

とユウは前のように戻れると、それだけは思えた。

かなりの時間が流れ、いつしかユウの嗚咽が途切れ、感情の波が穏やかになつても、二人はただじつと、互いを支え合うように離れなかつた。ぬくもりが服越しに伝わるのが心地よかつた。

「ユウ、海が見たいわ

唐突にマナが言つた。

「マナ？」

「おじいちゃんが言つてた。海が見たかつたつて。あたしも見たいわ。おじいちゃんが見たがつてた海を。海なら、いい？」

肩ごしに、ユウは笑つた。

「ああ、いいよ」

マナは体を離して、ユウを見つめた。

もうユウの感情は穏やかだつた。

それどころか、いつもより大人びてさえ見えた。

大丈夫。

そう思つた。

だが、思わず事態がこれから起ることを、二人はまだ知らなかつた。

「シイナ！！」

管理区域のヘリポートへ向かう途中の彼女を呼び止める声。もちろん、フジオミだ。

「何の用？」

うんざりした口調で振り返るシイナ。

「さつきの「ールは？ 何かあつたのか？」

「マナの居場所がわかつたわ。捜索隊のレーダーに確かな生体反応があつたそうよ」

それだけ言つと、シイナは、また歩きだした。が、その横に、フジオミが並ぶ。

「僕も行こう」

「何ですってっ！？」

あからさまに非難の眼を向けるシイナに、フジオミは一向に頬着しない。

「近い未来の妻を、救いにいつて何が悪い？」

口調には、揶揄するような響きが残っていた。

「私の邪魔をしたら許さないわよ」

「仰せのままに」

俺がいって言つまで、田を開じていて。

「コウの言葉を守つて、マナはじつと田を開じていた。

「コウ、もつとい？」

「まだだよ。少し歩くから。絶対田を開けちゃ駄目だよ
風に重なる、聞いたことのない音。

踏みだした足は不意に沈んだ。ざらついた感触がする。滑るような、柔らかな感覚。踏みしめるたびにサクサクと音がした。いつも土の硬い感触とは違う。

「コウ、土が軟らかい。変だわ

「土じゃないよ。砂だよ」

「すな？」

「そう。海の近くにある。草がほとんど育たない乾いた細かい粒」

両手をひかれて、恐々とマナは歩いた。
風は湿つてこむよつて思えた。

今まで嗅いだことのないにおいがする。

マナの知らない音は前へ進むごとに徐々に近づいてくる。ますますきつく田をつぶつた。

「コウ、恐いわ。この音は何？」

「見ればわかるよ。さあ、田を開けて」

コウが田の前からよける気配がした。

「もういいの？」

「ああ。海だ」

マナは静かに田を開けた。

そうして、田の前に広がる海原を、初めてその瞳に映した。

「

水だ。

見渡すかぎりの青い水だ。

これは海。

群青の水の中、白く寄せては返す、これは波だ。老人の言葉が、マナの視界に映るものとぴったりと重なる。

「これが、海……？」

「ああ、そうだよ」

海の向こうは雲に一直線に遮られていた。それがかえって、この地上が実は球体であるということをマナに認識させた。平らに見える水平線は、大きな球の一部に過ぎないのだと。ただ、大きすぎるだけで誰もそれに気づかないのだと。

潮騒が、全てをかき消していく。

なんて、世界は美しさに満ち溢れていることか。

知らず知らず、涙が溢れた。

「マナ、どうかしたのか？」

頬を伝う涙に気づいて、ユウが問う。

「ううん。違うの」

マナは涙を拭おうとはしなかった。ただじつと、海を見ていた。

「おじいちゃんの言つてたこと、本当だつた……」

初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。

こんなにもすばらしい光景が、あつていゝものかと。

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。

今マナの眼前に広がる海は、老人の心と同調したような感慨を彼女に与えた。

なんて、美しい。

言葉にできない、こんなものが自分の中にあるなど、マナは今まで知らなかつた。

溢れる涙を止めることができない。

これが、海。

濃い青に染められた、まるで意志を持つかのようにぞくめく、これが海なのだ。

人という存在のなんと矮小なことか。この偉大な世界の中のほんの一部分にしかすぎない。

これは全ての命の母。

全ての命を継ぐ存在。

「

全てが、愛しかつた。

この世界にある全てのもの、生きている全てが愛しかつた。

ここで、こうして風に触れていくこと。海を見ていふこと。生きて、感じていてることが、愛しかつた。

「ユウ、すごいわ。すばらしいわ。こんなに綺麗な所に、あたし達、住んでたのね。今まで知らなかつたの悔しいくらいよ。ゲームの中にずっといて、こんな綺麗なものを見たことがなかつただなんて、馬鹿みたい。本当に、馬鹿みたいだわ」

マナは泣きながら、ユウに抱きついた。

「綺麗ね。本当に、なんて綺麗なのかしら。ここから、生命が産まれたのね。ここから始まつて、あたし達、ここにいるのね」

老人が夢見るよつに語つた美しい世界が、確かにそこに在つた。

「音がする」

不意に空を見上げ、ユウは咳いた。

「波の音だけよ。何も聞こえないわ」

「いいや。何か来る。あれは？」

ユウはじつと空を見つめたまま動かなかつた。マナもユウの視線の先へ目をこらした。

「？」

やがて雲の切れ間に、小さな黒い影が見えた。波の音に重なる、

マナには耳慣れない機械音。

「あれ、何？」

「旧式の軍用ヘリだ。空を移動するものだ。乗つてるのは、三人

？」「？」

マナはユウの腕に触れる。

次の瞬間。

「あいつだ！」

凄まじい殺氣を、マナはユウから感じた。憎しみの全てが、上空のへりに向けられている。当然のように彼女は悟つた。の中に、シイナがいる！！

「マナ、隠れろ！」

刺すような緊張感。能力が発現する。ユウの身体が宙に浮いた。

「今度こそ、殺してやる！！」

手が離れる。彼はシイナを殺す気なのだ。

「待つて、ユウ。ダメよ、行かないで！！」

マナの叫びも、もうユウには届いていなかつた。

木陰に消える小さな姿を追つて、シイナは歎嘆の声をあげた。

「マナだわ！！」

「シイナ、危ない！」

フジオミはシイナの腕を捕らえたまま、自分も下を見下ろした。そして見る。

地上から真っ直ぐにこちりへと向かつてくる、白銀の髪と、赤い瞳の少年の姿を。

「コウ！？」

見つけたシイナの反応も速かつた。操縦席へ急ぎ、叫ぶ。

「銃をかしなさい！！」

「シイナ、何を？」

振り返るフジオミは銃を手に立つシイナを見た。

「殺してやるわ。今度こそ」

銃を構え、開いた扉の向こうを、シイナは凝視していた。

「」

上空に静止したままの機体の高さで、コウはいた。怒りに満ちた瞳が、シイナだけを見据えている。対するシイナは、能面のような無感動な表情で、銃口を向けたままコウを見た。

一人の視線が、完璧に重なる。どちらも決して、相手から目を逸らさない。一瞬でも逸らしたらやられると、本能で悟っていたのかかもしれない。

「どうして死なかつたの」

「！！」

そんな小さな泣き声を、コウだけが聞いた。

そしてそれが、あらゆるもののは緊張感をやぶつた。

「シイナ、止め……！」

フジオミは、シイナの肩の震えで、トリガーを引こうとしている」とをその瞬間、感じた。

とつさに触れた手から、衝撃が伝わる。

同時に、コウの身体は糸が切れた人形が倒れるように唐突に視界から消えた。

「殺したのか！？」

蒼白となつてフジオミが問うた。

「失敗よ。手応えがなかつた」

対するシイナは冷静だ。

苛立たしげにフジオミの手を振り払う。

邪魔をされて狙いが狂つたのだ。絶好の機会だったというのに。

「今度邪魔をしたらあなたでも撃つわよ、フジオミ」
言いながら、風が吹き付ける開いた扉から下を覗いたシイナは身を強ばらせた。

すぐ下に、コウがいたのだ。

「！」

シイナはもう一度、今度は片手で銃を構えた。

「シイナ！？」

コウの鋭い叫びとともに機体が傾いた。シイナが足元をすくわれる。

「！？」

シイナの身体が、一瞬空に浮いた。そのまま重力に引かれる

「シイナ！？」

とつさにフジオミはシイナの手を引いて中へ引き戻す。
次の瞬間、激しい衝撃が機体を襲つた。

「きやあ！？」

シイナは床に叩きつけられた。

「！？」

フジオミがバランスを崩す。扉脇の手摺りを掴んでいた彼の手が、離れる。

「うわっ！－！」

彼の姿が、シイナの視界から消える。

「フジオミ！－！」

シイナが外へ身を乗り出す。どこにも、その姿はない。

ただ、黒い塊が青い海を目指して小さくなつていくのが見えるのみ。シイナの全身から血の気が退いていく。

「フジオミ！－！」

叫びが、大気を切り裂く。

そして、マナも、その光景を見ていた。

扉から飛ばされるフジオミの姿。遙か下は海。あの高さから落ちたのなら、救からない。

「いや……」

マナが叫んだ。

「いや、救けて、コウー！－！ フジオミを救けて！－！ お願い、死なせないで！－！」

「！－！」

その絶叫は、コウの耳にはつきりと届いた。すぐに動いた。

フジオミを追つて、コウの姿が海へと向かつ。

一人の距離が見る間に縮まる。コウが手をのばす。フジオミの腕を、掴んだ！－！

「コウー！－！」

マナの叫びとともに、激しい水音。飛沫が何度も海面を打つた。

マナはコウがフジオミを捕まえたとき、ほんの一瞬、落下の速度が揺るまったくようにも見えた。

「ユウ……？」

だが、二人の姿は見えない。

マナはじつと待つたが、海はやがて落ち着きを取り戻し、波だけが穏やかにざざめいている。

一人の姿は、見えない。

「いや……」

膝の震えを、マナは止められなかつた。

心底恐怖した。フジオミが死ねば、全てが終わる。
「博士、おじいちゃん 救けて、どうしたらいいの。もし、フジオ
ミが死んでしまつたら、人が、終わるのよ……」

マナ！！

突然マナは強い思念を感じ、振り返つた。

林の影、川と海が交わる場所に、ずぶぬれの人影が見えた。
声を出さずにマナに手招きをしている。

コウだ！！

「

マナはとつと上を見た。

ヘリの位置からすれば自分の姿も、コウの姿も見えないはずだ。
そつとヘリの視界に入らないよう、マナはコウのもとへと急いだ。
「コウ、フジオミは！！」

「 気を失つてたから、水は飲んでない。少し休めば目を覚ます。
それより、すぐにここから離れよつ

マナを引き寄せ、その腕に捕らえる。

「濡れてるから少し気持ち悪いけど、我慢してくれ
待つて、コウ、フジオミはどうするの？」

「おいていく。当たり前だつ

マナはもう一度フジオミに視線を戻す。

「そんなの駄目よ。お願ひ、彼も連れていつて

「マナ、こいつならドームの連中が見つけてくれるさ。気を失つて
るだけだ」

「見つけてもらえなかつたらどうするの？ このまま目を覚まさな
いことだつてあるかもしないわ。死んじゅうかもしないわ。そ

なんのいやよ。それに、彼にほざいても聞きたいことがあるの。
お願ひ

潤んだ瞳で訴えられると、ユウは弱い。

「田を覚まして無事なことがわかれれば気が済むのか?」「ええ。それからドームに帰せばいいわ。お願ひ、ユウ」

「わかったよ」

ユウは吐息をついてマナから身体を離した。横たわるフジオミを抱きあげる。

「三人を連れて跳ぶのは自信がないけど、今の俺は一度跳ぶなんてことはできない。マナ、俺から離れるな。手が離れたらどうなるかなんて、俺にもわからないから」

「わかったわ」

ユウの腕にしつかりと自身のそれを絡ませながら、マナは己れを恥じた。危険を顧みずにフジオミを救ってくれた彼よりも、自分はフジオミを心配していたのだ。

人類を滅亡から救うというその崇高な使命が、彼女自身気づかなかつたほど深く自分を縛っていることに驚愕した。

それ以外の全てを排除するように。

それだけを優先するように。

いつも、そう言われてきたのだ。

それまでは何の違和感もなく受けとめてきた言葉を、今マナは初めて疑問に思った。

(じゃあ、排除されたものはどうなるの?)

ただ一つの大切なもののために、他を切り捨ててもいいのか。それは真に正しいことなのか。

フジオミを救うためなら、ユウが犠牲になつてもいいのか。マナの内に芽生えた疑問は、徐々に彼女の心に侵食していく。聞かなければならぬ。フジオミに。この疑問の全ての答えを。

「行くよ、マナ」

ユウの声に、マナはきつと瞳を閉じた。

彼女はまだ信じていた。

子供である自分の疑問の正しい答は、老人がそうであつたように、大人であるフジオミが知つてゐるのだと。

廃墟に帰つたマナとユウは、すぐにフジオミをユウの部屋へと移した。すぐに使える部屋はユウとマナの部屋の他は老人のしかなかつたのだが、そこを使うことをユウは許さなかつた。

今日のところはフジオミにはユウの部屋を与え、ユウは老人の部屋を使うこと、その場は収まつた。

ユウは意識のないフジオミの上着を脱がせると、それを壁に掛けた。マナの服と同じで特殊加工されているので、濡れても水を弾く。これならば表面の水分が乾けばすぐに着られる。替えの服は必要ないだろ？

呼吸は穏やかだが、ショックが強かつたらしい。

頬を叩いても起きる気配はなかつた。この分では明日になるまで目を覚まさないだろ？

ベッドに寝かせると、すぐにユウは濡れた服を変え、部屋を出た。斜め向かいのマナの部屋に向かつ。

「マナ。入つていいか」

返事よりも先に、扉は開いた。

「ユウ、どうだつた？」

「心配ない。明日になれば目を覚ます。今はまだ、無理だ」

「そう　ああ、ごめんなさい。こんな所で立たせたままにして。入つて、ユウ」

ユウの手を引くと、マナは扉を閉じた。ユウはその手慣れた仕草に声をたてずに微笑つた。

「？　何がおかしいの？」

「マナも、ここに生活になれたと想つてた」

「マナはさつと顔を赤らめた。

「ユウの意地悪……」

来たばかりのときには、マナは自分で扉を開けるところを知らなかつた。いつでも、自動で開いてくれるものと思い込み、じつと立つたままのときもあつたのだ。

「ごめん、ごめん。マ

「ユウ！…」

突然、ユウの膝が崩れた。とつとつマナは腕を伸ばしユウを捕まえたが、支えきれなかつた。そのまましゃがみこむ。

「どうしたの、ユウ！？」

「ごめん、少し、疲れただけ」

ユウの顔色が悪いことに、マナはその時初めて気づいた。

「ああ、どうしよう。あたしのせいだわ。ごめんなさい、ユウ。あたしが無理なお願いをしたから」「いいよ。マナだから。どんな無理でも、聞いてやる」

かすかに微笑んだユウに、マナの胸が熱くなる。

「じゃあ、あたしがユウの願いを叶えるわ。言つて。どうしてほしい？」

「ああ。このまま、少し、休ませて……」

ユウはそのまま、マナに身体を預けた。マナの背が、ユウの重みで壁に触れる。労わるように、マナはその背をなでた。

天井の明かりを避けるように手で目を隠し、ユウはそのまま動かなくなつた。

どのへりこむつしていたのだろう。

「マナ。シイナはさつたよ

「ああ、ユウは感心した。」

「？」

「『どうして死ななかつたの』って。憎しみでも憐れみでもなく、俺にそう言つたよ。あの人は可哀相な人だ。ただ一つのこと以外、心を占めない。それ以外何もない。全て切り捨てる」

静かに床に手について、ユウは体を離した。

じつとマナを見据えるユウの眼差しは、哀しみをたたえていた。
「俺はどうすればよかつたんだろう。シイナの望むものになれなかつたのが、いけなかつたのか。

俺はシイナが好きだった。マナと同じように、彼女が本当に好きだつたんだ」

「ユウ」

とつさに、マナはユウを抱きしめた。彼が泣きたいのが、わかつたから。

憎むことで、彼は生きてきたのだ。

今はもう、ユウの心に憎しみはなかつた。

あつたとしても、それは微妙に形を変えていた。

ユウが憐れだつた。痛みしかない、彼の心が。

なぜこんなにも、彼は傷つかなければならぬのだろう。

どうしてもつと、全てが彼に優しく在れないのだろう。

「ユウ、大丈夫よ。泣かないで。もう忘れるの。あたしが傍にいるから。もう誰も、憎まないで」

何でも知つていて、何でもできるはずのユウは、時折子供のように愛おしい。

だから、マナは氣のすむまでユウを優しく抱きしめていた。
せめて自分だけは、彼に痛みを与えることがないようだ。

光を感じて、フジオミはゆっくりと目を開けた。逆光の中、長い髪が陽に透けている。

「…ナ…」

かすれた声がもれた。

「フジオミー！」

あたたかい滴が、頬に落ちた。それがマナの涙だとわかるまで数秒要した。

「…マ、ナ、僕は、生きてるのか……」

「ええ。生きてるわ。よかつた」

マナの頬から涙がこぼれ落ちる。フジオミの指が、マナの涙をすくいあげた。指が、あたたかさと同時に現実感を身体に伝える。

「泣かなくともいい、マナ」

ゆつくりと、フジオミは身体を起こした。痛みはどうにもない。かすかな嘔吐感に眉根を寄せる。が、軽く頭を振つて感覚を追い払う。ようやく、周囲が視界に入ってきた。

「」

身体には、洗いざらしの掛布がかけてあった。身を動かすたびにぎしぎしきしきしむスプリングベッド。彼の知らない微かな黒臭さが鼻につく。天井と壁は壁紙で覆われてはいるが薄汚れていた。荒廃をとどめるために「一テイリングはされているが、今にも崩れそうなコンクリートの建造物。いずれも骨董品とも言える代物だ。

「ここは」

「廃墟よ。あなた、海に落ちてからずっと目を覚まさないから、ここまで運んだの」

視線をさまよわせ、フジオミはマナの背後にユウを見つけた。

「」

マナが気づいて声をかける。

「彼がユウよ。あなたを救けて、運んでくれたの」

フジオミは、じつとユウを凝視した。

見れば見るほど不可思議な赤い瞳に、銀色に輝く髪。まるで別の人からやってきた異種族のような違和感。

「ああ 知っている。 ユウ だね」

ユウは、そんなフジオミの視線を鋭い眼差しで受けとめている。それから、不機嫌そうに目を逸らした。

「マナ。外に行くる」

答えも待たずに、ユウは出ていった。マナは不思議そうにユウの消えたドアを見つめている。

「 嫌われたみたいだね」

笑いながらそういうフジオミに、マナは更に腑に落ちない表情をする。

「どうしてユウがフジオミを嫌うの？ 会つたばかりなのに」

「彼はもう大人の男だからね。天敵というものは、見ただけでわかるのや」

フジオミはベッドから出ると、窓へと向かった。剥出しのガラスの向こうには、荒廃の名残をとどめた風景が広がっている。

「ここは一体どちらへんなんだ？ このぐらいの廃墟なら相当大きな都市だつたはずだ。ここは、あの海からそんなに離れていないのか？」

「わからないわ。ユウがあたしたちを連れてきたんだもの。あれだと近いのか遠いのかなんて全然わからないのよ」

「彼が連れてきたって、歩いて運んだんじゃないのか？」

「いいえ」

「じゃあ、どうやって？」

「跳んだのよ」

「とんだ？」

「ユウはそう言つてるの。ユウにしかできないわ。思つだけで好き

な所に行くのよ」

「まさか、瞬間移動を！？」

「シュンカンイドウ？ そういう名前なの？じゃあ、ユウに教えるわ」

無邪気に、マナは言った。だが、フジオミはマナほど寛容にその事実を受け入れられはしなかつた。

超能力は研究としてはだいぶ前の時代にもではやされたものだが、それも被験者がなくてはならない。人口が減少をたどる一方となってからは、対象となる人材はほとんどいなかつた。研究は下火となり、それまでの研究結果と仮説だけが残つた。

「そうか、シイナの言つていた特殊能力とはそれか？」

考え込むフジオミを、マナはずっと凝視していた。

「ねえ、フジオミ」

「あ、ああ、何だい、マナ？」

「あたし、あなたに聞きたかったの。あなたなら知つてるんじゃないかと思って」

「何をだい？」

戸惑いつようなそぶりを、マナは一瞬だけ見せ、けれど思い切つて尋ねる。

「博士は、小さなコウを殺そうとしたの？」

真つすぐに、マナはフジオミを見つめた。彼のどんな微妙な変化も見逃すまいとするかのような真摯な眼差しで。

「」

だが、フジオミは顔色一つ変えなかつた。だから、内心の動搖は微塵もマナには悟れなかつた。それでも、彼女は再び問う。

「教えて、フジオミ。あたし知りたいの」

「それを知つてどうする？」

フジオミの声は意外なほど穏やかだつた。何の違和感もなくマナから視線を外し、外の風景を見やる。

「それが事実なら、君はシイナを憎むかい？ 君に見せている面だ

けが、彼女じゃない。君の考えているシイナと違つたら、君はもうシイナを好きじゃなくなるのかい？」

「

振り返ったフジオミの言葉が、逆にマナに問いを投げかける。答えを知つてどうするのかと。

だが、どうもできない。できるはずもない。時を戻すことも、ユウの心に刻み込まれた傷を消すことも、かといってシイナを裁くことも、何も、マナにはできない。自分にできることは、ただ事実を知ることだけだ。

マナはシイナが好きだった。自分で育ててくれたのは彼女だったし、一番歳も近く、何でも話せる女性だった。

今、彼女がユウを殺すというなら、自分は彼女を許せないだろう。だが、今ユウは生きている。生きて、マナとここにいる。それが、マナだけの真実だ。

彼女は顔をあげ、フジオミに向かう。

「もしそれが本当なら、とても哀しいと思つ。だって、あたしは二人ともとても大好きだもの」

比べられないほど、今はシイナもユウも大事だった。

「でも、博士はあたしにひどいことなんかしなかったわ。いつも、博士は優しかった。あたしはやつぱり博士を嫌いにはなれない」毅然と言い切るマナを、フジオミは驚いたように見つめていた。

「まいったな。僕は君を見縊つていたようだ」「何も考えていない、愚かな子供だと思つていた。

実際、シイナはそう育てていた。ただ優しく、何も考えないように。幸せで、今ある自分の立場を疑いもしないようだ。だが、自分が初めて会つた時と、この子はなんと違うのだろう。なんて大人になつたことが。

「君が、眞実を見極める力を持つていて嬉しいよ」

「ありがとう。あたしもフジオミが優しくて嬉しいわ

「優しい？ 僕が？ そんなこと言われたのは何年ぶりだろうね。

懐かしい響きだよ

「だつて、博士の話してくれるフジオミはいつだつて優しかったわ」

「シイナが？」

「ええ

フジオミは苦笑した。

シイナが自分をよく話すのは当然だ。マナに話して聞かせる自分が、いつも彼女が言う傲慢で勝手な男であつてはならないのだ。

脚色された自分は、マナの憧れと理想を兼ね備えた男として彼女の中にインプットされている。そして自分はその通りに振る舞う。全てはマナのために。マナだけのために。

「博士は、きっとフジオミのことが好きなのよ。フジオミをとてもよくわかってる」「あ

その言葉に、フジオミは浅く微笑つた。無邪気なマナの考えを、浅はかだとは思えなかつた。仕方のないことだ。猜疑や不信から遠ざけて、シイナは育ててきた。

「さあ、どうかな。よくわかっていることと愛することは、決して同じにはならないんだよ、マナ。彼女は、きっと僕より君のことをずっと好きだよ」

フジオミは立ち上がり、落ちてきた前髪を無造作にかきあげた。「シイナは、君に自分を重ねているんだ。なれるはずだつた自分を、君に見ている。彼女には、君こそが全てだ」

ガラスの向こうの見慣れぬ風景を、フジオミはただ見つめていた。

「

遠くまで来た。

シイナのいない、今まで自分の知らうともしなかつた世界へ。

思い起すのは何故か彼女のことだけだ。

自分が死んだと思つただろうか。そうなれば、冷ややかな仮面の下で、きっと自分自身を責めている。

どんな人間よりも、シイナはフジオミにとつてあざやかな色を持つた、確かに存在に思えた。その冷酷さも、残酷さも、傲慢さも、

彼にとつては全てが深い感慨を呼び起^こす。

「 フジオミも、博士のこと好きなのね」

呟くマナの言葉を捕らえ、フジオミは我に返つた。奇妙なものを

見るよ^うにマナを振り返る。

「 マナ ？」

「 そうよ。だから博士とあたしが仲良くするのいやなのよ。やきもち妬いてるんだわ」

マナはむくれた顔つきでそっぽを向いた。

「 好きって、僕が、シイナをかい？」

「ええ」

「 君は凄いことを思いつく子だね、マナ。一体、どうしてそんなことを考えたんだい？」

「わかるわ。あたし、何故かなんてわからないけど、でもわかる。フジオミは博士のことを好きなのよ」

きつぱりと言い切るマナに、フジオミは啞然とした。論理も何もない、けれど物事の本質を見抜くことに長けた少女は、今、見事にフジオミの 自分自身考えることさえもしなかつた シイナに 対する想いを、曝け出したのだ。

「それは 気づかなかつたな」

氣抜けしたようなフジオミの声に、マナは本当にいやそうな顔をした。

「驚いた。フジオミは意外と鈍感なのね」

その時、二人の背後にいるドアが開いた。ユウが顔を出す。

「 マナ。お鍋、ふいてるよ」

「 そうだ、ご飯の支度が途中だったのよー じゃあね、フジオミ、もうすぐお昼だからユウと後から食堂に来て」

マナは急いでかけていく。

後にはフジオミとユウが残る。

「 食堂は階段を下りて廊下を左にまっすぐ行った突き当たりだ。すぐわかる」

それだけを言つとユウはフジオミに背を向けた。ドアを閉めかけ
るユウに、

「君は僕が嫌いらしいね」

フジオミが言つ。

「振り返ったユウは不機嫌そうにフジオミを見返す。フジオミは肩
を竦めて微笑つた。

「顔に書いてあるよ。マナが好きだから近寄るなって
ユウの顔がさつと赤らんだ。

「そんなこと、あんたに関係ないだろ！－！」

笑いを、フジオミは押さえられなかつた。感情を隠せない少年を、
フジオミは少々からかつてやりたくなつた。悪い癖だ。これだから
シイナにも煙たがられるのだと、フジオミは思つた。

「君は自分のことをどれだけ知つている？」

ユウは答えない。

「

「君とマナが遺

「言つた！」

「ユウの叫びが、フジオミを遮る。その眼差しは、今にもフジオミ
を射殺してしまくらゝに鋭かつた。

「そりが。知つていたのか」

本当に、悪い癖だ。フジオミは自嘲する。自分は彼の一一番痛いと
こりをついたのだ。

「　言わないよ、マナには」

さらりと、フジオミは言つた。ユウは怪訝そうにフジオミを見つ
めている。感情を隠せないユウを、フジオミは好ましく思つた。な
ぜかシイナに似ていても、思つた。

「言つたから、どうなるわけでもない。惹かれる心は止められない。
君がそうであるように」

「

「僕と君が、逆の立場だつたらよかつたのに。そうすれば、お互に、もっと自由に生きられた。僕は君が羨ましいよ。本当にね」

「あんた、何を」

戸惑つたように声をかけるコウに、フジオミはあいまいな笑みを返した。

「さあ。マナのところに行くんだ。僕にとられたくなかったら、しつかりとマナを捕まえておくことだ。人の心だけは、努力ではどうにもならないから。僕はしばらくここで休んでいる。食事はいらない。行きなさい」

戸惑いながらも、コウは言われた通り部屋を出た。フジオミは足音が遠ざかっていくのを確かめると、ゆっくりと窓辺へと向かった。古びた鍵を解き、窓を開け、彼のそれまで知らなかつた異臭を風で追い払う。

薄汚れた灰色の瓦礫から身を乗り出す緑の群れ。高いものは建物の一階をすでに越えている。続く草原が風の方向を優しく示す。

「なんて原始的な世界かね、ここのは。とてもじゃないけれど、長居はしたくないな」

フジオミは周囲を見回して、もう一度眉根を寄せた。

マナは初めてここを見た時、とても美しいと思った。しかし、フジオミは違つた。彼は、この風景に違和感以外の何をも感じることはできなかつた。彼の知つている、美しいと思える自然の風景というのは、ドームの温室の中にしかない。

帰りたい。

今ほど強く、そう思つことはない。

全てが統制化されたあの銀色のドームへと、フジオミは今すぐにでも帰りたかった。

濃い緑は、彼の心を落ち着かせはしない。あるのは見慣れぬ違和感と強烈な色に対する不安、そして嫌悪だけだつた。

彼は、人の力の及ばぬ世界の生み出す命の群れより、人の手が造り出した人工物を愛していた。

もしかしたら、自分達は、とっくの昔におかしくなつていいのか
かもしれない。そう感じつゝも、不可解とは思えなくなつている。

自然の恩恵を忘れて、一体幾世紀たつたのだろう。美しさや懐か
しさより違和感を感じるほどに、もうこの風景から自分達はかけ離
れたものとなつてしまつたのだ。

「まいつたな」

窓を閉め、鍵をかける。これ以上何も見たくなかった。ベッドに
身を投げ出して、目を開じる。

目眩のように、思考が駆け巡つた。

忘れかけた苦い痛みさえも甦つてくる。

どう対処していいのかもわからない。

「

フジオミは途方にくれた。

だがそれも、無理はなかつた。今まで一度も考えもしなかつたこ
とに彼は直面したのだ。

きっとこの世界で一番彼を嫌つているだらう女を、愛したという
事実に。

「まいつたなあ。本当に」

意外にすんなりと、彼はその事実を受けとめていた。苦い痛みと
ともに。

嫌われていることは知つていた。だからこそ、「ことある」といふに彼
女の前に姿を見せた。彼女の神経を逆撫であるようなこともわざとし
た。彼女のきつい眼差しも、激しい言葉も、その全てが、彼を惹き
つけて離さなかつたからだ。

だが、愛されるための努力など、今更できそうもない。自分はす
でに、完成されてしまった。もう変われない。死ぬまで、このまま
生きていいくしかない。

そして、シイナもだ。彼女も、もはや変われない。それしかない

のだ。

「

何もかもが、もう意味がないように、フジオミには思えた。生きることも、子供をつくることも、未来も、義務も、責任も、全てが色褪せていく。彼女以外の、全てが。

「シイナ……」

痛みしか呼び起こさない言葉を、フジオミは口にした。

今初めて、彼は自分が一人であることを思い知った。見知らぬ世界では彼を護るものは何もない。彼を知る人も、彼が親しんだものも、何も。

ただ一人であること、それはなんという孤独だろう。なんという苦しみなのだろう。

痛みしか伴わぬこの感情。彼は誰に教えられなくとも知っていた。

これが、愛だ。

ずっと昔から、彼女を愛していたのだ。

「

今更、気づくなんて。

フジオミの部屋を出て、ユウはそのまま外へと向かつた。薄暗い廊下を足早に進んでいく。今は一人でいたかった。

フジオミの投げかけた言葉が、ユウの中で燻つている。

フジオミの言葉は、わかりやすそうでいてわからない。頭上から差し込む光を徐々に感じながら、そう思った。わかっていることは、自分が彼にはかなわないということだ。

「ちくしょう」

彼は、自分とは全然違う大人の男だ。直感で、そう確信した。

知識や体格など、そんなものでは太刀打ちできないものが確かに

ある。

生きて重ねてきた年数には、どうあがいてもかなわない。
どんなに自分が歳を重ねても、相手はその分また歳を重ねる。
そして、その分その思考にも年輪を重ねていくのだ。
距離は決して縮まらない。それが、悔しかった。

「あいつが、マナの相手か」

風が不自然に騒めいた。彼の動揺を表すかのように。

「あいつを、選ぶのか。マナ」「

マナがわざわざ部屋まで運んだ朝食に、フジオミはほとんどの口をつけなかつた。

だが、マナはそんなに深刻には考えなかつた。
初めてここに来た時の自分と照らしあわせ、フジオミも拒絶反応を起こしていると思つたのだ。

だから、無理には勧めなかつた。

そんなことをしなくとも、何日かすれば思惑を無視して空腹が堪え切れなくなる。人間は一、二日食べなくとも死ぬことはない。

それよりも、マナはフジオミと話をしたかった。

老人亡き今、彼女の問いに答えてくれる大人はフジオミしかいな
い。

ユウは食事を終えると、いつもどおり姿を消した。きっと、地下へと行つたのだろう。

だから、老人が生きていた頃のように、マナはフジオミを外に連れ出し、散歩がてらに話を切りだした。シイナからでもなく、ディスクからでもない、新たな知識を得るために。

老人の言葉は、一つ残らずマナの中にある。

自分が何者であるか知ること。

そして、自分で決めること。

それを実現するためには、もっと知らねばならなかつた。

「ねえ。フジオミ。あたし、ずっと考えていたのよ

穏やかな風に吹かれて、フジオミは『れの思索に耽つていたが、
マナの声に呼び戻される。

「マナ　？」

「ドームから離れ、3日経った。

この廃墟群にも慣れ、ようやくフジオミの強い色彩に違和感だけではないおぼろげな美しさを感じるようになってきていた。振り返ると、自分よりも立派にこの世界に順応している少女は、常はない真剣な目をしていた。

「もしあたしとあなたの子供が産まれても、結局人類は滅びるんじゃないのかしら」

フジオミが息をのむ。

「ねえ。そうでしょう、フジオミ？」

「マナ、言つた。それは考えてはいけないことだ」

「でも、考えずにはいられないわ。子供を産めるのは、もつあたしあきないわ。あたしとあなたの子供は、伴侶を迎えることもできずに、独りで老いていくのよ。それでも、必要なことなのかしら。博士は、一体どう考えているのかしら」

マナは知らなかつた。フジオミとの子供が生まれた後、シイナが人工受精によつて新たな生命をマナに産ませようとしていることまでは。

凍結保存された卵子と精子による人工受精卵をマナの体内で育てれば、マナとフジオミ以外の血を受け継いだ子供も作れるのだ。だが、フジオミは、そこまでマナに話す気にはなれなかつた。それは、あまりにも作為めいた苦々しい現実だつた。

「シイナは最期まで続いてほしいんだ。できうるところまで、我々人間の血が生き続けることを望んでいる」

「あなたも？　ねえ、あなたもそれを望んでいるの、フジオミ？」

「ああ。そうだ」

「それを疑問に思ったことはないの？」

一瞬だけ、フジオミは呼吸を止めた。

だが、無表情なその顔から、動搖が読み取られることはない。

「

感心したよ。フジオミは穏やかに微笑んだ。

本当に、この少女はきわどいことばかり問い合わせ正してくる。まるでこちらの弱みを見透かすかのように。

そして自分は弱みを見せないよに、さらなる嘘を繰り返すのだ。「そんなことは一度もないよ。それが、僕等の使命だから。人間として生まれた限り、血を繋ぐことは義務だ。僕等は数少ない人間だ。最後の瞬間まで、人が生きてきた足跡を作らなければならない。それが、確かに僕等が存在していた証となるように。

自分が幸せであればいいなんて、それは間違っている。個人の幸せの前に、僕等はこの生の意味を、考えなければならぬ。そして、君と僕は次に血を残せる人間だ。生まれながらに責任がある。義務がある。それをなくしては何も考えられない」

シイナがことあるごとに言つて聞かせた言葉を、そつくりそのままマナに繰り返す自分を、フジオミは滑稽な気分で認識した。

(偉そうに、何を言つているんだうつ。そんなこと、微塵も考えていないくせに)

だが、永い嘗みの中で、一体誰が考えただろう。人間が、こんなにも穏やかな滅びを迎えるなど。

フジオミ自身でさえ、今この現状にあっても、信じられないことだつた。

もうすぐ、この地球上から、人間が一人もいなくなるなどとは。そうして、今初めて、シイナの考え方理解する。彼女は恐れているのだ 全てが無に帰することを。

それまで価値のあることが、突然意味を失くすこと。

それまで信じてきたことが、実は意味のないこと。

彼女はそれを恐れている。

だが、理解することとそれに共感することは違う。自分は日に日に嘘を重ねることが苦しくなっている。

元来、フジオミは嘘などつかない性分だった。

自分の思つとおりに振舞い、それが許されただけに、自身を偽る必要もなかつたのだ。冗談なら言うが、それは全て自分の楽しみゆえだ。

しかし、今彼がマナに対して繰り返すそれは、決して彼が望んでいることでもなければ、彼を愉快にするものでもない。

だが、シイナの望みだ。彼女が望んでいることだ。そう自分に言い聞かせる。

マナは思つた以上に人形から脱し始めている。その思想は危険だつた。この社会の制度を、わずかに残つた我々の存在理由を、根本から覆してしまう。

気づいた時から、フジオミはマナの思考の修正を謀つた。ぶつけてくる問いに正論を繰り返し、反論を封じる。

ほんの少しずつだが、マナの考えが以前のように自分の方に感化されていくのを、フジオミは感じている。

マナはもともとシイナが人を疑うことのないように育ててきていったので、その効果も高かつた。頭ごなしに否定するより、穏やかに根気よく説得する方が、考え方を変えさせるには違和感がないのだ。

そんなふうにマナを 教育 していく自分を、フジオミは冷めた感情で認識していた。

自分は、一体何をしているのか。そう、自問したりもする。

自分のしていることは、己れの感情に反している。自分はシイナを愛している。マナではなく、シイナを。けれど、どうにもならないことも知つていた。

多分自分にも、その勇気がないのだ。カタオカがあきらめの言葉

を口にするその裏側で新しい命を望んでいるよう」、全てのじがらみを断ち切りたいと思いながら、そうしてしまったことをフジオミも恐れていた。

今までずつとやつであるよつに生きてきたのだ。

今更どうして変えられる。

変えたとしても、未来などない。

シイナは他人を愛せない女だ。憎んでいる相手を今更愛せるとも思わない。

そして自分も、未来を繋ぐことだけを最優先とするよつに教育されてきた。

シイナを愛していても、それには逆らえない。

(だが、わからないのか、シイナ　?)

すでに未来など、ないことが。
もはや意味など、ないことが。

予定された絶望。

考えればわかることだ。

すでに扉は閉ざされている。

それでも、人を、どんな形でも残したいのなら簡単だ。

クローンを、残せばいい。

人が死んでも、クローンなら残せる。寿命も短く、障害も多く出るだろうが、ただ存続させようとするのなら、最善の方法だ。

「だが、それではきっと、意味がないんだろうな

」

「　フジオミ?」

呼ばれて、フジオミは我に返つた。

「どうしたの？」

「いや、何でもない。それよりマナ」

フジオミはマナに手を差し伸べる。

「帰ろう、ドームへ」

「フジオミ」

「もう十分ここでは楽しんだらう？ シイナが心配しているよ。帰ろ」

差し伸べられた手をとるうとして、しかし、マナは思って出したよう
にそれをやめる。

「でも、コウが。コウを独りにしてはいけないわ」

「連れていけばいい。シイナは僕が説得するよ。君はコウを説得す
ればいい」

「コウを連れて？」

それは、マナにとつて意外な提案だった。

コウとともにドームへ帰る。

考えたこともなかつた。

だが、言われてみると一番いい考え方のようにも思えた。

「そんなこと、本当にできると思つ？」

「シイナなら心配いらなつや。君と僕とで頼めばきっと聞いてくれ
る」

「ともなげなフジオミに、マナは小さく呟く。

「本当に？ もしそれができたら、みんな幸せになれるのよね
マナの言葉に、なぜかフジオミはやるせない気持ちをおぼえた。

幸せ。

幸福とは、一体何なのか。

何を基準に、誰を基準にそれを決定づけるのか。

無垢な少女を、フジオミは憐れに想つた。

そして、彼女を欺き続ける自分も、憐れな人間であると、痛感した。

可哀相なマナ。

可哀相な自分。

可哀相な人間達。

何という愚かで憐れな生命体。

それでも、生き続けねばならないのか。

もうどこにも、救いすらないのに。

絶望と孤独とを携えて、滅びの瞬間までがき続けねばならないのか。

なぜそれが、自分達でなければならないのだ？

犯した過ちなら、それをしておいたものが携えていけばいい。それをしたものが足掻けばいい。

なぜ今、自分達が過去の人間のための贖罪を背負わねばならないのだ。

現状に溺れ、誰も未来を視ようとしなかった結果が、これが。答えの出ぬ問いを、それももうあきらめでしか、自分達は迎えられない。

怒りをおぼえるには、フジオミはたくさんのことを行うとは知らずにあきらめちぎってきたのだ。

「じゃあ、コウを説得するまでは待つよ。でも、あまり時間がないことも忘れないでくれ。君がいない間、シイナはとても心配していくんだから」

「ええ。ごめんなさい」

「シイナは君を娘のように思つてゐる。あまり心配させてしまい

よ」

フジオミの言葉に、不意にマナは思い出した。

「ねえ、フジオミ。あたしのお母さんって、どんな人？」

「え？」

「あたしにも、お母さんがいたんでしょう？ どんな人だったのか知りたかったの」

「ごめん、よく知らないんだ。僕は君の母親とは違うドームで育つたから」

「じゃあ、コウのお母さんはどうしたの？」

「死んだよ。事故らしい。僕にも詳しいことはわからないんだ。あつという間のことだったから」

「会つたことある？」

「ああ。きみに、そ？」

不自然に、フジオミは言葉を切った。

「そう きみに、よく似ていた」

「だが、マナはその不自然さには気づかなかつた。」

「じゃあ、みんな独りぼっちなのね。みんな淋しいんだわ」

「さあ、もう戻ろう」

「ええ」

フジオミに促され、マナは廃墟へと戻つた。

コウがそれを見ていたことは気づいていなかつた。

その日の夕食も、ユウとマナの一人だけだった。

フジオミは早々に部屋へとこもり、食事をとる様子を見せない。ユウの様子も変だった。いつもより口数も少なく、何だか不機嫌だった。

後片付けも、気まずい空気が流れ、いつもの中分の時間で早々に終わってしまった。

黙つて老人の部屋へと向かうユウ。

「ねえ、どうしたの、ユウ？」

「なんでもない」

すぐに返つてくる返事が、なんでもないことぐらい触れなくてわかつた。

「おやすみ」

短く言つて、ユウはドアノブに手を伸ばし、ドアを開ける。中に

入りかけるユウに、マナは追いすがる。

「待つてよ、ユウ。さつきから絶対変よ。何かあつたんでしょう？」
言つてよ

「だから、何でもないんだ。俺が勝手に怒つてるだけなんだ。別に、マナには関係ないことだよ」

「嘘。なんでもないわ。だったら、あたしに話してくれるはずだもの。どうしてあたしを見ないの？ あたしのこと嫌になつた？ 傍にいるの、邪魔？」

「違うつー！」

振り返つて、けれどユウはすぐにマナから視線をそらした。

「 だってあんたは、フジオミと話をする方がいいんだろう？」
不機嫌そうに、ユウが言つ。

「一緒に話してるのを見たんだ。あいつは俺より大人だし、マナ、

あこつとこると楽しそうだ

マナは瞳を、瞬かせた。

どうやら、ユウはマナがフジオミと話すのをいやがついているのだ。

(だって、フジオミは 大人 じゃない。おじいちゃんと話しても怒らないのに、どうしてフジオミだとダメなの?)

心の中ではそう思つたが、実際にユウはいやがつていてる。

「もしかして、ユウ、妬いてるの?」

「違つ」

視線が合つた瞬間、ユウはまた言いかけた言葉を飲み込んだ。

「ユウ?」

「 そう、かもしだれない。わからない。」

ただ、あんたとあいつが一緒にいるのを見るのは、いやなんだ」

ユウの腕が伸び、マナの一の腕をきつく掴んだ。

「マナはあいつがいいのか。あそこへ帰るのか。あいつの子供を産むために!?

触れられた部分から、伝わってくる感情。狂おしいほどに激しい想い。

心臓が大きく鼓動を響かせるのがわかつた。

だが、それは自分のものなのか、ユウのものなのかはわからなかつた。

ただ、確信した。自分とユウの想いは、同じものなのだと。

「 フジオミには、博士がいるわ。フジオミは、博士が好きなんだもの。あたしには、ユウがいるわ。あたしはユウが好きよ。ユウはあたしのこと好き?」

ユウは大きく首を振る。

「 好きだよ、好きだ。マナが一番。これ以上の気持ちなんて、どこにもない」

ぶつけるよづこ、告げられる言葉。

それが心を熱くさせる。

「じゃあ、いいわ。あたしはずっとコウとこむの」

コウが驚いたようにマナを見つめた。

「ずっと？ ほんとだ？」

「ええ。ずっとよ。本当に」

「何があつても？」

苦しそうな表情を浮かべ、コウはこきなじマナを抱きよせた。驚いて身動きできない彼女の肩に顔を埋め、自分も動かない。

「コウ？」

戸惑いつマナに、苦しげに彼任せやこた。

「マナ。キスしてもいいか」

「キス？ どうするの？」

「触れるんだよ。唇で」

マナが答える前に、コウは動いた。

「」

言葉以上、唇でふれいだ。強く抱きしめたまま、身動きもさせない。

押しつけるよつこ深く、何度も、マナに触れた。舌を絡められ、貪るように求められて背筋がぞくぞくした。

「俺とこうするの、いや？」

キスの合間に、コウが問う。乱れた吐息の中、マナは喘ぐようつい。

答えた。

「いやじゃ、ない……」

体中が熱かった。

何も考えられない。コウのこと以外は。

「マナが好きだ。死んじまうそうなくらい好きだ。もう、ビリにもやらない。どこにも、帰さない」

甘こさをやさきに身体が震える。

「うん……そうしてもいいわ。コウと一緒にこる。ずっと、ずっとよ。

もつ、どこにも帰らない……

ほんの一瞬、マナの脳裏にはフジオミの言葉が甦ったが、それもすぐに消えた。

初めての行為に衝撃を受け、思考は冷静には働かなかつた。きつく抱きしめ、キスを繰り返すコウにしがみつくこともできずに、ただ身体を預けていた。

「我慢、できないよ、マナ。俺だけのものこしたい。独り占めしたい。これじゃ、足りない」

「どうすればいいの？ どうすればあたし、コウだけのものになるの…？」

「セックスするんだよ」

その言葉なら、マナも知っていた。
セックス
生殖行為

ドームでの学習の中で出てきた。

子供をつくるのだ。

未来へ繋がる新しい命を。

コウと自分で。

「そうすれば、あたし、コウだけのものに、なれるの？」

「ああ。しても、いいか…？」

そのとき初めて、マナは腕を上げてコウを抱きしめ返した。ためらいはなかった。

「いいわ

」

鳥の声が、遠くで聞こえた。

マナが目を開けると、コウが上半身を起こして自分を覗き込んでいた。

優しい眼差しに胸が熱くなる。

「目が覚めた？」

「ええ。夢を見てたの」

「どんな夢？ 僕は出でた？」

「ええ。 素敵な夢よ」

夢を見ていた。

幸せな夢だ。

少し歳を重ねたコウとマナと、たくさんの子供達が楽しげ笑い合つていてる。

子供達はみんな、一人の子供だ。

幸せな夢の名残が、マナに不注意な言葉を口に出させた。

「コウ、あたし、はやくあなたの子供がほしいわ」

「！！」

聞いた瞬間、凍りついたよう、コウは動かなくなつた。
見る間に責めしていく彼の顔を、マナは身体を起こし、心配やつに覗き込んだ。

「コウ、心うつたの？」

「……」

「コウ？」

手を伸ばして触れた肩は、小さく震えていた。

恐ろしいほどの後悔と動搖が、マナに伝わった。

「駄目だ……」

絞りだすような、かすれた声がもれる。

「俺どじや、子供はできな……」

「どうして？ だって」

「どうしてもだ……」

マナの手を振り払はれてコウは離れた。黙つて床に落ちた衣服を身につけはじめる。

「コウ？ 怒つたの？」

無言で部屋を出てこようとするコウに、マナは必死で呼びかけた。

「ねえ、待つて。どうして怒つてるの？ ちゃんと教えて、あたし悪いこと言ったの？ 听ってくれなきゃ、わからないわ、ねえ、コウ

ウ――」

泣きだすマナを、ユウは振り返った。

そして歩み寄り、抱きしめた。

「ごめん。マナ。泣かないで」

「だつて、ユウが、怒つてるから」

「違う。マナが悪いんじゃない。ごめん。俺が悪いんだ。こんなこと、するべきじゃなかつた」

「それつて、後悔してること? あたしのこと、嫌いになつたの?」

「違うよ。マナが好きだよ。ずっと好きだよ。死ぬまで変わらない。でも、やつぱり、こんなことするべきじゃなかつたんだ……」

身体を離すと、ユウはそのまま部屋を出ていった。後にはとり残されたマナが一人。

ここに来て初めて、マナは一人で食事をした。

それまでは必ず老人とユウと三人で話をしながら食事をしていた。老人が死んでからは、ユウと一人で。

フジオミは朝食をとらない。ユウは部屋を出てからどこに行つたのか、戻つてこない。

しばらくマナはユウを待つていたのだが、空腹に堪えきれず、ユウの分を残して一人で食卓へついた。

だが、少し口にしただけで、すぐにやめてしまった。

「一人でする食事つて、こんなものだつたかしら」

呴いて、マナはそれを片づけ始めた。いつもと同じように味付けをしたはずだ。だが、とてもまずく感じられた。飲み込んで、まるで石を飲むように喉につかえる。これでは、食べないほうがましだ。

マナにはわからなかつた。なぜユウが突然、あんなことを言いだしたのか。好きだといながら、自分のものにしたいといながら、

そうするべきではなかつたと言つた。

(昨日はあんなに優しかつたのに、今日は傍にも来ない)

「　　涙がこぼれた。やりきれなさとやるせなさが同時に込み上げてくる。

身体がまだ、ユウを憶えている。

肌を這う、あたたかな手。声をあげずにはいられないほど執拗に触ってきた唇と舌。身体を貫き、突き上げてきた熱い欲望。痛みの後に来た、激しいほど快楽。

あんなにも幸せだつたのに、どうして今自分はこんな切ない気持ちで一人、ここにいるのだろう。

そうだ。田を覚まして、言葉を交わすまで、ユウは穏やかだつたのだ。あの時は混乱してうやむやになつたが、子供が欲しいという自分の言葉の何が、ユウをあんなに恐れさせたのか。

「　　マナは自分が、ユウのことを何も知らないことに気づいた。知っているのは三歳までドームについて、その後、老人達と暮らしていたことだけだ。それ以外、本当に何も知らない。

そもそも、わずか三歳だつたユウがシイナに撃たれることになつた原因は何だつたのか。

ユウは意図的に隠したがつてゐる。その部分に関するだけは。そう考へると、今度は違う疑問もわいてくる。以前は氣にもとめていなかつた、あの地下のことだ。

先日、フジオミはユウが新しいシーツとタオルを持つて、地下へと降りていつたのを見たと言つた。そして、マナに聞いたのだ。あそこには、人がいるのではないかと。

言われて、マナは驚いた。食事は自分達の分しか作つてはいない。人がいるのだとしたら、一番に食事はどうしているのだ。何より地

下に誰かがいるなどと、老人もユウもおわせることをえしなかつた。それに、なぜ、マナに隠す必要があるのだ。マナに会わせては困るわけでもあるのか。

考えれば考えるほど、わからないことばかりだ。以前なら、自分には関係のないことだとすませてしまつていただろう。だが、今は違う。マナはユウのことが知りたかった。脆く、傷つきやすいあの孤独な魂を理解したかった。そして、癒してやりたいと思つていた。自分は知らないではない。もっと、たくさんのこと。

強烈な焦燥感にかられ、マナはフジオミの部屋へと急いだ。ノックもそこそこにドアを開ける。

「おはよう、マナ。どうしたんだい？」

「ねえ、フジオミ。昔のことを知りたい時は、あなたたちはどうしていたの？ ユウがおじいちゃんに聞いていたみたいに、あなたたちも年配の人聞くの？」

唐突な問いに些か驚きつつも、フジオミは答える。

「いや。それはドームのメインコンピュータにアクセスして情報を引き出すのさ。でもマナ、一体何を知りたいんだい？」

「ここのことよ。ここが廃墟になる前は、どんな所だったのか、知りたいの」

しばしふジオミはマナを見つめていたが、肩を竦めると、「いいよ。ここにも端末はあるはずだ。教えてあげよう」

そう言つて、マナを階下に促した。エントランス近くのカウンター奥の小部屋には、コンピュータが一台、備え付けられていた。これも、ユウが廃墟の貯蔵倉庫から持ち出してきたもの一つだ。フジオミは電源を入れて、コンピュータを起動させた。

「ずいぶん年代がかつていてるが、これでも使えるだろ？ 何せ基本構造はどれも同じだからね」

マナはフジオミがコンピュータの端末を操作するのをじつと見つめていた。それは思つた以上に簡単だった。ある程度キーをたたら、あとは自分の望みを話すだけでいい。情報はすぐにプリント

アウトしてくれる。今まででは気象状況など、あまり重要な用途に使われていたようで、情報を引き出してもばれることはなかつたのだ。

「マナ、情報を引き出すときは気をつけるんだ。重要な情報を覗けば、こここの場所が見つかってしまう恐れがある。まだ、戻りたくはないんだろう？」

「ええ」

「じゃあ、僕はその辺を散歩でもしてるよ。またわからなくなつたら聞きにおいて」

「ありがとう、フジオミ」

フジオミが部屋を出ていったのを見届けてから、マナは端末に向かつた。はやる気持ちを押さえてコンピュータにアクセスする。

ユウに関するデータを。
自分に関するデータを。

もちろん、データは機密としては扱われていなかつた。無理もない。ドーム内の人間なら、マナ以外の誰もが知つている公然の秘密だ。そしてマナは、通信と学習以外のコンピュータの扱いを知らなかつた。シイナも、マナに必要不可欠なこと以外は教えなかつたのだ。

ユウに関するデータに目を通した時、マナはユウの秘密を知つた。三年間だけの記録であつたが、老人でさえ知りえなかつた情報が次々明らかになる。

サカキという血族の血をひくユウ。両親は極めて近い近親者兄妹だったのだ。

父親の名はマサト。

母親の名はユカ。

アルビノという遺伝病を抱え、生殖能力もない彼は記録上では生まれて三年後に病死したことになつていて。

コウの持つ能力の発現は、ちょうどビー一歳の時、その身を宙に浮かせたことによつて明らかになつた。

記録の大まかな点だけを読み取ると、マナはすぐには次のデータを呼び出しプリントアウトした。

「だから、コウはあんなこと言つたのね……」

生殖能力がない。

子供をつくれない。

それは未来を断ち切るということだ。

だが、マナには実感がわかつた。

それはフジオミになげかけた疑問が、どうしても心に根付いていたからだ。

フジオミを選んでも、いずれ人間はこの地上からいなくなるのだ。それなのにどうして、シイナはあんなにも強く、自分とフジオミの子供を望むのだろう。

マナは知りたかった。自分には、知らないことが多すぎる。もつともつと多くのことを知りたい。自分のこと、コウのこと、フジオミのこと、シイナのこと、自分達をとりまく、この世界のこと。

ドームに帰つても、きっと誰も老人やコウのように何かを教えてくれるものはないんだろう。そう、シイナでさえ、マナには必要以上のこと教えてはくれなかつた。

作業が終わりしだい、マナはすぐに通信を切つた。

はきだされた紙には、自分の記録もある。

マナは自身の項目を見つけ、田を通そつと初めの部分を視界に入れた。

視線が、一点で止まる。

「

マナは自分の身体が冷えていくのがはつきりとわかった。

「…嘘…」

彼女の手から、プリントアウトしたばかりのデータが滑り落ちた。

『マナ ユカ＝サカキの一世代クローン。』

部屋へ戻るうとしたフジオミが足音を聞きつけて振り返ると、角を曲がってこちらへ来るコウを見つける。

「コウ。どこにいたんだ？」

「外だ。マナは、どうした？」

「コウの顔色は冴えない。フジオミには何かあったのかとすぐわかる。

「喧嘩でもしたのかい？」

「そんなんじゃない」

コウはフジオミが嫌いだつた。

彼の前では、いつも自分は何もできない子供のように思える。出来得るなら、自分は彼になりたかった。

フジオミであれば、何のためらいもなくマナとともにこいられるのに。

「あなたは知ってるんだろ？ 僕は、どうすればいい？」

不意に縋るように問いかけられて、フジオミはコウを憐れんだ。可哀相なコウ。

決して結ばれてはならない女を、愛した。

わかつていても、愛さずにはいられない気持ちは、フジオミにも理解できる。

だが、この恋は、決して実つてはいけないものだ。

「君にはもう、わかつてゐるはずだ」

「

「マナには、果たさなければならぬ義務がある。それを放棄することはできない」

「でもつ、マナは俺といってくれるって言つた……」

「なら眞実を話すといふ。全てを知つても、マナが君といたいと言

うのなら、僕は一人で帰ろ。」

「 つ！」

「じゃあ教えて、ユウ、フジオミ。あたしはクローンなの？」

不意打ちのマナの声に、二人はすぐに動いた。二人の背後に立つマナ。青ざめた表情が今にも倒れてしまいそうなほど儂げに見える。ぎこちない足取りで、マナは一人の前へと近づいた。手には握りしめられくしゃくしゃになつた書類があつた。

「マナ……」

「教えて。あたしは、ユカという人のクローンなの？ ユウはユカの子供なの？ あたしの、子供なの？」

フジオミは、そんな彼女をじっと見つめていた。

偽りを、言つこともできた。

嘘ならいくらでも言える。顔色一つ変えずに。

マナはユウに惹かれている。ユウもだ。自分の言葉が、これから二人の指針を決定するだらうことは十分にわかつていた。

「ああ、そうだ」

だからこそ、フジオミは真実を告げた。

「君はサカキの血をひくユカという女性のクローンだ。ユウはユカの卵子とその兄マサトの精子との人工受精から産まれた子供だ。遺伝子上では、ユウは君の息子になる。

君達は、純粹な親子だ

「
マナは動かなかつた。

動けなかつた。

世界が、永遠に時を止めたかと思つた。

「
親子

その言葉が小さくもれるまで、どれほどの時間が経つたのだろう。不意に老人の言葉が甦る。

母と息子。父と娘。彼等は最も惹かれあつてはならないもの同士だ。なぜなら彼等はその身に最も近い血を宿しているからだ。

惹かれあつてはならない。

それは、伴侶としてはならないこと。

ああ。何といふことだろ？

では、昨日の自分達の行為は 混乱と後悔で、思考がかけめぐる。それは、ユウが今日の朝感じていたものと、よく似ていた。知つていたのだ、みんなが。

知つていながら、教えてはくれなかつた。

ユウの求めるものは、決して手に入らないもの。手に入るはずがない。ユウが求めているのは、母親なのだから。だが、自分がいる。母親のクローンである自分が。だからさらつてきたのか。自分は、身代わりか。

混乱の中、それでもマナは氣づいてしまつた。ユウが、自分にだけは隠しておきたかった最後の秘密にも。

「ユウ、あそこにいるのは誰！？ ねえ、一体誰なの、教えて！…

立ち尽くすユウ。怯えたようにマナを凝視してゐる。

「マナ、何を言つてるんだ？」

訝しげなフジオミの声。だが、そんなことはもうどうでもいいのだ。自分は氣づいてしまつた。氣づいてしまつたのだから。

踵を返し、マナは走りだした。

「マナ、駄目だ！！」

哀願するような悲鳴が、背中に響いた。だが、マナは止まらなかつた。自分の予感が正しければ、あそこにいるのは

マナは階段を駆け下り、地下への扉を開けた。光量を絞り込んだ明かりが、足元の階段を暗闇に浮かび上がらせてゐる。駆けおりながら、心の何かが止めていた。それ以上先へ進んではいけないと。一番最後の扉は、あつけないほど簡単に開いた。ロックさえ、されていなかつた。

広い室内は、倉庫を改造したものなのだろう。地下でありながら、高い天井は何だかがらんとしていた。

「

そして、マナは見た。部屋の中央においてあるベッドに横たわる女の姿を。

マナの知らない機器が、ベッドの横に備え付けられ、作動していた。

剥出しの腕には点滴のためのチューブがのびていた。

そつと歩みを進めても、女はみじろぎすらしなかった。規則正しい機械音に紛れて、かすれた吐息がもれていた。

マナは、見なければならなかつた。

多分、年を重ねればそつなるであろう、自分自身の顔に^{よわい}齡を刻んだ、女を。

マナの瞳と、何処か虚ろな眼差しが、一方的に会つた。

それは、マナ自身。

たつた一目で確信できる、マナのオリジナル。

ユカ＝サカキ だつた。

「……いや……」

マナの視界が淡く滲んだ。

次の瞬間。

絶叫が、その部屋に響いた。

「マナ、部屋を出るんだ！！」

座り込んだマナを抱えるように部屋から連れ出すコウ。

マナは両手で顔を覆つて激しく泣いていた。

追いついたフジオミが見たのは、泣きじゃくるマナを抱きしめるコウと、ベッドに横たわったままの、少し齡を重ねてはいるが、や

つれてはいたが、彼の憶えているユカの姿だった。

「生きていたのか！！」

フジオミもまた、新たに知る事実に、衝撃を隠せなかつた。

ユカは事故で死んだのではなかつたのか。一体なぜ、こんなところに。

だが、自分はユカの死を確認したわけではなかつた。ただ、そうと知らされただけだ。

「どうして、こんなことが……」

驚きながらも、フジオミはユカに近づいた。

「ユカ、僕を憶えているか。フジオミだ」

だが、ユカは彼を見はしなかつた。定まらない焦点は空を見据えたまま動かない。

触れようと伸ばした手が、彼女の視界に入るほど近づいても、ユカは無反応だつた。

フジオミの手が彼女の目の前で訝しげに振られても、視点すら重ならなかつた。その様子は、どう考へても彼の知つてゐるユカとは違つていた。

彼女は、何の感情も示さない。

「ユウ、どういうことなんだ。なぜ、ユカがここにいる？」

「……俺がシイナに撃たれた時、彼女もそこにいたんだ」

絞り出すような、苦しげな声だつた。

「ユカは片時も俺を傍から離さなかつた。だから、シイナも俺を殺す時、ユカと一緒に連れていくしかなかつた。

二人で、谷を見ていた。繋いでいた手が離れたほんの一瞬だつた。俺は撃たれて、谷底に落ちていつた。多分、ユカは俺を追つて谷底に飛び込んだんだ。おじいちゃんたちが見つけた時、ユカは俺をしつかり抱いていたつて……」

フジオミは顔を背けた。

多分、シイナにとつても計算外のことだつたのだろう。

彼女にとつて、ユカはまだ必要だつたに違いない。

だが、ユカはユウを救けに谷底へ飛び込んだ。

ユカにとつて、彼は己れの命にも等しかつただろう。

あんなにも待ち望んでいた命。未来へ繋がる、命だつたからだ。

「でも、ユカはもう、俺が憶えてるユカじゃなくなつてた　おじいちゃんは、落ちた時か流される間に、頭を強く打つたんだろうつて　それでも、子供みたいになつて、俺を忘れても、まだ元気だつたんだ。半年前までは」

半年前のある日、ユカは倒れたまま何日も意識不明のまま生死をさまよつた。そして、ようやく田を覚ました。

だが、それだけ。

田を覚ましたまま、彼女はもう誰も見なくなつた。誰の声も聞かなくなつた。

永遠に失われたかけがえのない存在。ユウにはわからなかつた。

なぜ、こんなにも突然に、全てが自分から奪われなければならなかつたのだろう。

全ての元凶は、シイナだ。

そう思つしかなかつた。

憎むしかなかつた。

でも、本当はもうそんなことはビリでもよかつたのだ。十三年かけて増した憎しみも、忘れられると思つたから。

マナが、彼女が傍にいてくれれば

「」

マナはきつつく目を閉じていた。

だが、不意に目を開け、押し退けるように身体を離し、黙つて口
ウを見た。青ざめて、かける言葉を探せずにいるコウを。

「あたしの、子供なのね。あなたは」

「マナ」

擦れたユウの声。

マナは強ばつたような笑いを浮かべていた。

「親子だなんて…あたし、クローンだなんて 子供を産ませるため、再生したのね。そうよね。そうしなきゃ、人間は、滅びてしまつんるもの」

「」

互いの姿が目の前にあるのに、マナもユウもその姿が見えないか
のようだった。そんな二人を見兼ね、フジオミが近づく。

「マナ。落ち着いて、よく聞くんだ」

「さわらないで！！」

触れようと伸ばしたフジオミの手を、マナは強く払い除けた。怒
りに満ちたまなざしが、フジオミを見据える。

「マナ、話を」

「あたしが何に対して怒っているか、あなたにはわからないでしょ
うね、フジオミ。こんなこと何でもないって、そう思つてるんでし
ょう？」

マナの瞳から、涙がこぼれた。

「あたしたちの責任だから。義務だから。どうしても、人類を存続
させなきゃいけないから。

うんざりするくらい言われてたわね。

でも、あたしとあなたが子供をつくって、それからどうなるの？
あと五十年もすれば人間はここからいなくなるのよ。今度はあた
したちの子供同士を実験動物みたいにかけあわせようって言うの？

わかつてることじやない、未来なんて何もないってことじがらい。子供なんかつくつたつてどうしようもないってことじがらい。たかだか半世紀生き残るだけのことが、そんなことが、一体何になるつて言つのつ！――

フジオミには何も言えなかつた。

「親子だなんて 親子だなんて！――」

マナは溢れる涙を拭いもせずにその場から走り去つた。

「マナ！――」

ユウがマナの後を追う。

残されたフジオミは、それを見ていることしかできなかつた。ユウの瞳は、狂おしくマナを、彼女だけを求めている。自分にはわかる。永遠に手に入らないものに濾がれること。多分、もう自分達しか感じることができないもの。

フジオミはシイナを愛していた。

マナでも誰でもなく、ただ、彼女だけが、欲しかつた。

彼女だけを、抱きたかった。

彼女が決して自分を愛さないだらうとしても、それでも愛していたのだ。

「 シイナ。僕等は共犯だ。ただ一つの目的のために、あの二人を傷つけた。それでも、正しいことなのか」

風が、フジオミを通りすぎていつた。

彼は低く嗤つた。嗤い続けた。そして思ひ。生き続けること、何の意味があるのだと。

人が滅んでも、世界は変わらず美しいだらうに。

「コウがマナを見つけたのは、廃墟から少し離れた草地だった。座り込んだまま、動かない少女の傍へ、ゆっくりと近づく。

「マナ」

マナはじっと、遠くを見つめていた。振り返りもしなかった。

「じつちへ来て、コウ」

ぎこちなく、けれどコウは言われるままに従い、マナの傍へ来て座った。

マナはそんなコウに両手をのばし、抱きしめた。小さな子供にするように、胸に抱いた。マナの胸の鼓動を、コウの耳が捕える。

「あなたがこんなに懐かしいのは、あたしの遺伝子が憶えている記憶なのかしら」

マナの声は、どこか虚ろに響いた。

「十四歳のあたしは、まだあなたを産んでもいいのに、こんなにあなたを懐かしく思つてる。こんなことって、あるのかしら」

「」

「『めんなさい』……」

「マナ……？」

「あなたをちゃんと育てられなくて。あたし、あなたを淋しくさせたわ。『めんなさい』、ずっと独りにして」

「マナのせいじゃない……」

「ううん。あたしのオリジナルだった人だもの。あたしと同じ顔の、同じ声の、きっと同じ心の人だったわ。コカは馬鹿なことをしたわ。本当に、馬鹿なことをしたわ」

涙が止まらない。

「コウ。あたし、データを見たの。あたしもあなたも、実験動物と同じなんだわ。あたしはコカ以外に子供を産める女がないからク

ローニングされた。あなたは、近親者同士でどの程度の障害が出るか試された。こんなひどいことって、あるかしら？

「マナ。ユカを責めちゃいけない。ユカは俺を大事にしてくれた。

とても、愛してくれてたよ。」

「だつてわかるの、きっとユウやおじいちゃんに会う前のあるあたしは、ユカと同じことをしたわ。未来のために、人間が少しでも長く生き続けるために、平気で同じ犠牲を出したんだわ。」

「違う、マナ。それは誰のせいでもない。仕方ないことだったんだ」

ユウは身体を離し、マナを見つめる。

「俺は、初めから全部知つてたんだ。だから、マナをさらつた。マナに会いたかったから。初めからマナに言うべきだったんだ。俺が悪いんだ。マナのせいじゃない。だから、マナはもつと俺を責めていい」

「言わないで」

目を伏せたまま、マナは首を横に振った。

「もう言わないで。あなたを責めるなんてできないわ。いいのよ。言つたでしょ。何があつても、ユウのこと好きだって」

「」

「こんなにあなたが愛しいのは、きっとあなたがあたしの子供だからなのね」

ユウの表情が強ばつたのが、マナにははつきりとわかつた。彼を傷つけたのだ。そして、ユウを傷つけることによつて、自分をも傷つけている。

心が痛い。

傷ついた部分が、悲鳴をあげてやまない。

それでも、マナはこの思いを振り切らねばならなかつた。

これは、肉親に対する愛情なのだ。

それ以上で、あつてはならない思い。

老人の語つた言葉が、マナの胸に突きさわつたまま抜けない刺となつて彼女を痛めつける。

母と息子。父と娘。それは一番に惹かれ合つてはならない者同士だ。なぜなら、彼らは最も濃い血を、その身体に等しく宿しているから。近親相姦は古代から現在に至るまで、人類の犯してはならないタブー——最大の禁忌なのだ。

禁忌を犯して生まれたユウ。

なんという皮肉だろう。自分達はさらなる禁忌を犯した。だが、罪は自分達にだけあるのか。

ただ愛しただけではないか。

それを罪だというのなら、自分達を創りだした者こそが最も罪深いのではないか。

「どうして、あたしたちここにいるのかしら……」

「マナ……」「いくら考えても答えなどではないこともわかつていた。全てを知ることのできるものはいないのだ。

それを、今、こんな残酷な形で知られようとは。

「もう戻るわ。一人にしておいて。今はもう、誰とも会いたくない

の

「わかった

」

数日後、ユカの容体は急変した。

慌ただしく、事態は悪化の一途をたどつていても思えた。眠り続けるユカ。やつれた頬は青ざめて、残された時間が少ないと確信させる。

介抱しようにもここには何もなかつた。傍にいるだけで、ユウにもマナにもどうすることもできない。

傍について、はつきりとわかつた。

ユカは死ぬ。もうすぐ。確實に。

マナはただ、ユウを思つた。

彼はまた、失わねばならないのだ。

自分の母を。

彼があんなにも望んだ、かけがえのない、唯一のものを。彼女に触れた時、マナは理解してしまつた。彼女もまた、誰にも言えない影を心に持つていたことを。

自分に課せられた使命に対する誇り。

裏腹に失われていく生命への絶望。

それでも望まれる生命への重圧。

そして、隠された愛憎。

マナにはわからぬさまざまな感情が、残り火のように彼女の中に沸き上がり、消えていく。

義務と自分自身の想いの中で、ユカは少しずつ壊れていった。

彼女はたくさんの子をなし、けれどもユウ以外の誰も、生かし続けることはできなかつたのだ。

(可哀相なユカ)

ユカを見下ろし、マナは思う。

彼女の求めたものもまた、決して手に入らないものだつたのか。そして自分は、一体誰を失おうとしているのか。もう何もわからなかつた。

何を信じていいのかも。

自分は一体、どうすればいいのだろう。

マナには母親であつた記憶などない。ましてや息子など知らない。

マナにはマナの記憶しかない。

それでも、確かなのだ。自分とユウは、最も近い血を繋ぐ親子なのだ。

この想いは、決して許されない。

許されないのなら、なぜこんなことをしているのだろう。心も、身体も、全てがコウを求めているの。

「おじいちゃん、救けて……！」

「見つけた？」

研究区の一画で、シイナは連絡を受けていた。
すぐにディスプレイの右下に周辺の地図があらわれる。
映し出されたのは、ドームからかなり北東にある廃墟群だ。比較的新しい年代のものだったので、資料として特殊コーティングされ、それ以上の崩壊を免れた一つである。

「ああ。なんてことなの。こんな遠くにいたなんて」

フジオミをあの海で見失つてから、シイナはマナだけではなく、
フジオミの捜索も行なわねばならなかつた。
海へ通じる川口で、一いつの足跡を発見した。
多分、これはマナとコウのものだ。

そして、何か重いものを川から引きずつた跡もあつた。多分、マナとコウはフジオミも連れていつたのだ。

マナとともに、フジオミも生きていると確信して、シイナは安堵した。

だが、今回のことでのシイナはもう捜索をクローン任せこなすことができなかつた。

再度議会を召集し、捜索の全権を自分に移させた。
廃墟群の捜索もあとわずかになつて、ようやくコウ達の潜伏場所もわかつたのだ。

「新たに編成しておいた捜索隊に準備しようと伝えなさい。管理区には話を通しておぐ。それから、ヘリの用意も。捜索隊の準備が出来次第出発する」

シイナは通信を切り替え、管理区の保管を担当するクローンを呼び出した。

「ここにある武器で一番威力のある、しかも持続性の高い銃と弾薬をあるだけ用意しなさい。すぐに取りにくるはずだから」

通信を終えると、シイナは立ち上がり、着替えるために自室へと向かった。

「攻撃の時間となるべく長く保てるように、レーザーと交替で銃も使えばいい。力を使えばそれだけ疲労する。疲労が限界を越えるなら、力も出せなくなるはずよ」

自分に納得させるように、シイナはひとつ「ちた。

残されたユウのデータは全て頭に入っていた。ユウの力も全能ではありえないのだ。勝機はそこにある。

今度こそ、終わりにしなければならない。

強い想いを感じた。「みあげるよつ」。

あなたを探している。

様々な感情が漂い、移ろい、どじまることもなく。そんな中で、唯一確かなもののよつ。

あなたを、探している。

違う。これは自分ではない。

自分の感情ではない。

すぐにわかった。

限りなく近く、それでも重ならない。

マナは自分がどこにいるのか、なぜ、ここにいるのかわからなかつた。

白く反射する世界。

ドームの内壁に似ていた。白く、ゼンマイでも白く続く、静かに死

に絶えたような世界。

振り返ろうとした。

その時、視界の片隅に何かをとらえた。

背の高い、痩せた男が立っていた。

その姿を視界にとらえた時、泣きたくなるほど寂かしさを感じた。

知らないはずなのに、ずっと昔から知っていたように思えた。

彼を、探していたのだ。
彼を、待っていたのだ。

確信した。

多分それが、ユカがずっと愛していた男だ。
顔が見たかった。

オリジナルであるユカがそんなにも愛した男の顔を、見ておきた
かつた。

だが、遠ざかる自分を感じた。

もう一度と逢えない。

これが、最後なのに。

胸が痛くなるほど愛した。

マナは、自分が誰なのかもわからなくなるほど強い想いに、た
だ翻弄された。

にわかに現実に立ち返ったのは、自分を見据える瞳に気づいてだ。
同じ瞳が、自分を見つめていた。まるで、鏡を覗くかの如く。
椅子に背をあずけたまま、うたた寝をしていたのだ。
でも、ただの夢ではない。
ただの夢ならば、こんなに胸は痛まない。
これは目の前の、ユカの深層意識に同調したためだ。

「…ぜ、泣…の？」

なぜ、泣くの。
初めて聞く声。

なんとこゝ、無垢な声。

声音さえ、自分と似て聞こえた。

「あなたのせじよ…あなたがあたしたちをこんなひどい目に合わせたのよ…どうして どうして、こんなことしたの…？ 何が望みだつたの…教えてよ…」

「ほれる涙は後から後からシーツを濡らした。
ぎゅっと目をつぶり、マナは涙を堪えようとした。
不意に、頬に何かが触れた。

驚いて目を開ける。そして、マナは自分に触れている、ユカの手を感じた。

「ユカ…？」

「なぜ…泣く、の…」

夢見るかのような虚ろな眼差し。

だが、触れる指は確かだ。

指尖から、流れこむあたたかな感情も。

何の苦しみもない、ただ、愛しさにあふれた感情。

胸が痛い。

彼女の中には、もう愛しか、なかつた。

愛とともに生きることしか、できなかつた。

そうだ。どんなになつても、生きることを望んだのだ。

どんな姿でもいい。

どんな人生でもいい。

こんなに絶望しかなくとも。

それでも、生きていきたい。

生きていてほしい。

そう思えるまで、ユカは何度涙を流したのだろう。

何度絶望し、それを越えてきたのだろう。

生きることさえできなかつた命を、彼女はたくさん通り過ぎてきたのだ。

愛してこると、皆さうとすらできなかつたか弱く愛しき命達。

そんな中で、ようやく出会えた新しい命。

愛さないわけがない。

愛せないわけがない。

「…コウ…」

愛したい、胸がつまり。
こんなにも、愛していたのだ。
切ないほどに。

痛いほどに。

だから、コウも何年経つても、色褪せる事なく憶えているのだ。
あまりにも大きな、深い愛情だから、失った哀しみを癒せず
にずっとあがいていたのだ。

でも、愛は今もここにある。

彼女の内側に、今も変わらず、愛は生き続ける。

「コウ…来て…」

マナは我知らず呼んでいた。

「コウ、来て…！　お願い、今すぐ…！」

今しかないのだ。

今を逃せば、もうない。

(今なら伝えられる　　だつて、この人は自分だもの)

「マナ、どうした…？」

強い思念に呼ばれて、空間から不意に現われるユウは、切迫したマナの声音に戸惑っているようにも見えた。

「来て、ユウ、今しかないの！…」

手を伸ばして、マナはユウに叫んだ。それに応えるユウの大きな手を、マナはしつかりととらえた。

触れた瞬間、ユウは感電したかのように身を震わせた。
そして気づく。マナを通して、ユカに触れていることを。その心に、触れていることを。

初めての感覚に無意識に身をひきかけるその手に、マナはあいつたけの想いをこめた。

今感じているものが、真っすぐに、正直に、ユウに届くことを願いながら。

「マナ

「ユカの心よ。あなたへの想いよ。今しかないわ。受け取つて
触れた肌から伝わる、確かな感情。
伝わる愛。

涙がこぼれる。

見失い、求め続けた愛が、還つていく。

愛されていたのだ。

今も、少しも変わることなく。

ユカの想いに融けて、ユウの想いもまた、彼女に還つていく。
あふれる涙を拭いもせずに、ユウは一言、呼んだ。

「…かあさん つ…！」

虚ろな瞳が、一瞬だけユウに向かって焦点を結んだような気がし

唇が、かすかに笑みを刻んだような気が、した。

明け方近くに、ユカは息をひきとつた。眠るように静かな死だつた。

ユカは、やはりみんなと同じように墓所に埋葬された。

埋葬にはユウとフジオミが立ち合つた。

マナは、墓所が見える離れた場所から、一人に氣づかれぬようそつとそれを見ていた。

全てが終わりユウとフジオミが去つた後、マナは静かに歩みより、墓所へと向かつた。

墓所の一番端の、老人の墓の隣に、ユカの墓は作られていた。盛り上げられた新しい土。

添えられた花。

死はなんて呆氣ないのだろう。そう感じずには、いられなかつた。老人が死んで、まだ一月も経つていない。

こんなに簡単に、死はやつてくるのだ。特別なことでも何でもなく。

いつか、自分も死ぬだろう。

このユカのように、唐突に、逃れようもなく。だが、マナには、まだわからなかつた。

今ここにいる自分は、何なのだろう。

今朝死んだ女の細胞のひとかけらから生み出されたクローン。生命の理から外れた作為の結果。

それが、自分か。老人が言つた、これが自分が何であるかということなのか。

「おじいちゃん、教えて。自分が何であるか見極めること」こと、「どん

な意味があるの？ 意味はビコにあるの？ どうやって納得すればいいの？ こんなことなら、あたし、何も知らないほうがよかつた。知らないまま、おじいちゃんとユウヒ、ずっと一緒にいたかった……

答える声はない。

マナの視界が、涙で滲んだ。

老人に会いたい。

教えてほしい。

「ユウが好きなの。こんなに、好きなの。なのに、どうしていけないの……？」

帰りがけの吹き抜ける風は、いつもより冷たかった。マナは気づかなかつたが、かつてこの地には冬が存在したのだ。空から白い粉雪が降りてきて、視界の全てを白銀に染める。そんな失われた季節の名残をかすかにだが思わせる、冷たさだった。

「寒い……」

身を震わせて、マナは中へ入った。

長い廊下を抜けて階段に歩を進めた時、マナは踊り場に立つフジオミの姿を認めた。

「

今はフジオミとも話したくなかった。マナは俯いたまま階段を上り、フジオミの前を通りすぎる。

「一人で、一緒に戻ろう、マナ」

静かに背後に響く声。マナはゆっくりと振り返った。さほど狭くもない踊り場で、フジオミの眼差しどぶつかる。

「フジオミ

「これ以上彼とここにいても、つらいだけだ。君には義務がある。責任がある。僕等はいわば運命共同体だ。決められた義務から決して逃れることはできないんだよ

そう言つフジオミは、無感動な口調の中へ、どこか痛みを宿しているようにも思えた。彼もまた、どうしようもない運命に縛りつけられたよつた。

「あたしは、いけないわ。コウと約束したもの。ずっと一緒にいるつて。何があつても、彼といふの」

「一緒にいても、苦しいだけだよ」

視界がかすんで、フジオミの輪郭がぼやけた。

「でも、会えなくなるよりいいわ。一緒にいられるもの。一緒に、いたいんだもの。あなただけ、そうでしょう……？」

涙が、マナの瞳から溢れる。堪えきれない痛みが沸きあがるのを、止められなかつた。

胸が、痛いのだ。痛くて、苦しくて、つらくて。

でも、つらくても、いつか慣れる日が来るかも知れない。穏やかに、また前のよつと過ごせるかも知れない。

「」

声を殺して泣くマナを、フジオミは優しく抱きしめた。そしてマナが泣きやむまで背中を撫でていた。

「ありがとう、フジオミ。ごめんなさい」

マナは身体を離し、泣き腫らした瞳でフジオミを見上げた。
「急いで答えを出さなくていい。ゆっくり考えて決めるんだ。いいね」

フジオミは大きな手でマナの頭を撫でた。優しい感触だった。

「ええ。ありがとう、フジオミ」

マナは小さく微笑つた。

「いい子だ」

フジオミは笑い返し、階段を上がつて自分の部屋へと消えた。マナはじつと、それを見送つていた。

(あの人を、愛せればよかつたのに)

そう思わずにはいられなかつた。

フジオミは優しい。彼を愛することだが、きっと正しこことなのだ。
正しいことなのに、自分はコウを愛した。同じ血を持つ、自分の息子を愛した。

「マナ」

ためらいがちにかかる声。間違えるはずのない声。マナはゆっくり視線を向けた。立ちゆくその場に、階段を上つてコウが現われた。

「」

堪えていた涙がまた溢れた。

どうして哀しみは、いつも、こんなにも、溢れてくるのだらう。間違いだとわかつていても、この想いは哀しみと同じ強さで溢れてくる。

「コウ……」

胸が、痛い。こんなにも、痛い。

縋りつきたいのに。

抱きしめてほしいのに。

想いの全てが、許されないことだなんて。

「マナ、泣かないでくれ……」

感情を殺した声がもれる。だが、マナにはわかつていた。そうでもしなければ、コウもまた禁忌を忘れて、マナを抱きしめたい衝動を押さえきれなくなることを。

マナは涙を堪え、頬を手の甲で拭つた。

「じめんなさい。みつともないわね。泣いてばかりで

「いいや。あんたは綺麗だ、マナ。とても、綺麗だ……」

そつと近づいてマナの長い髪の一房を取り、コウはくびづけた。愛しさを隠さず。

ゆつくりとその手は離れた。

「マナ。海へ行こう」

「え？」

唐突な誘いに、マナは驚いた。

「明日、二人で海へ行こう。一日だけでいいんだ。何もかも忘れて、俺と過ごして。前みたいに、笑つて過ご」
「みづ」

かすかに、ユウは笑つた。

そんな切ない笑みを、マナはより一層愛しく思つた。
許されるはずもないのに。

よく晴れた一日だつた。

風は強すぎることもなく、眩しい日差しに穏やかな余韻を残えて
いる。

「ユウ、海だわ」

マナが浜辺へかけていく。途中、靴を脱ぎ捨て、海へと入つてい
こうとする。

「マナ、危ないよ」

「大丈夫よ。こうしてみたかったの。いい気持ちよ。ユウもどう?」
「まだいい。行つていいよ。ここで見てる。見て、いたいんだ」

マナは頷いて、海へと駆け出した。

打ち寄せる波にためらうことなく入り、浅瀬を歩いていく。

風が長い髪を後ろにさらり、靡いていた。

楽しそうに、マナは笑つていた。

そんなマナを見て、ユウも知らず穩やかに笑つていた。

初めて海を見てくれたのは、老人だった。

でも、その時は、もつとたくさんで来たのだ。大勢で、お弁当を
持つて。

だが、自分は今のマナのように明るく楽しむこともせず、ただじ
つと、海を見ていた。

ユカを失った痛みを癒せずに、差し伸べられていたあたたかな手
を拒んでいた。

そんな自分にも、みんなは優しかつた。惜しみない愛情をそそい

でくれた。

優しい想いに満たされて、癒されない傷も、やがて忘れることが
覚えた。

流れしていく、穏やかな日々。

本当に、たくさん的人が、ユウの人生にかかわってくれた。
ユカが自分を見てくれなくても、幸せになれることも知った。
だが、自分はいつでもおいていかれる者なのだ。
どんなに愛されても、彼らは死んでいく。自分よりも確実に
はやく。

たくさんの死を見てきた。

本当に、たくさんの死を。

おいていかないでくれと、一緒に連れていってくれと、何度も泣いて
締つただろう。
それでも、願いは叶うことなく、一人、また一人と逝ってしまう
た。

いつしかおいていかれることにも慣れ、静かに、死を受け入れる
ようになつた。

本当は、ずっと恐れていたのだ。

一人になつてしまふことを。

老人を失つた。
母親も失つた。

それでも、まだ生きている自分がいる。
恐怖さえ、今はもうない。

マナがいるからだ。

マナがいるから、まだ生きていられる。

老人の言葉が、今あざやかに脳裏に響く。

私達が与えてやれなかつたものを、マナがおまえに、惜しみなく与えてくれるだろう

その通りだつた。

癒されないと思っていた傷も、渴いた孤独も、自分に欠けた全てのものを、癒してくれたのは、あの少女だつた。

マナでなければ、駄目だつたのだ。

なぜこんなにも、彼女だけが、特別なのだろう。愛せるものなら、いくらでもいたといふのに。

(みんな優しくしてくれた。
みんな大好きだつた)

それでも、愛せたのは母親だけだ。
母親しか、愛せなかつた。

だから求めるのか、あの少女を。
もうすでに、復讐のためですらなく、ただ彼女が欲しいから。
彼女しか、もう愛せないから。

「ユウーーっ、見てえ、こんな大きな貝殻あ！」

遠くで手を振る少女に、ユウは笑つて手を振り返す。
彼女を愛していた。

誰よりも、強い想いで。
自分はもう、こんなに強く誰も愛せないだろう。
この少女以外、愛しいと思えないだろう。
例えどれほどの人間が、再び自分の傍にいるとしても。

「ユウもこっちに来てみてえ！ 本当にすいこのよおー」

「今行くよ」

コウは自分も靴を脱いで立ち上がった。そしてゆっくりと海辺へ向かつ。

幸せだった。

例え罪だとしても、まだ、愛せる自分が幸福だと理解した。

彼女を愛する度に、心の内に沁みわたる、このやるせない泣きたくなるほどのあるたかな感情を、嬉しいと思えるから。

陽が、傾いていた。

一日が終わる。

一人は裸足のまま砂浜を歩いていた。

両手に靴を持って、まだあたたかな砂の感触を確かめるように元気いっぱいに走り回る。

「マナ

」

小さな声に、コウよりもほんの少し先を歩いていたマナは、静かに振り返る。

「何?」

「帰つても、いいよ

」

聞き返したマナに、コウは繰り返す。

「帰つてもいいよ。今なら、止めない。あなたは戻りたい場所がある。フジオミと、行けばいい

」

その言葉に、マナは驚きを隠せなかつた。

彼の口から、そんな言葉を聞こうとは思つてもいなかつたのだ。

コウはマナと目を合わせないままだ。

「コウ、あなたはどうするの」

「俺は、もとに戻るだけだ。ただそれだけだ」

そう言ひと、コウは再び何もなかつたかのように歩きだした。マナを通り過ぎ、ただ静かに。砂を踏む音も波に重なり聞こえない。

マナはしばし、その場に立ち尽くした。

コウの気配がそつと離れていくのがわかる。

もとに戻る。

簡単な言葉だつた。

けれど、そんなことはもうできはしないのだ。
それを、一人が一番よく知っていた。

老人はもういない。

自分がドームへ帰つたら、彼は一人になるのだ。

「諸に行脚せよ。」。そのよ。博士に頼むわ。あ

「たゞ、おまえが一緒に暮らすのはよつ

振り返りながら、マカロニた

振り返る。警戒するが、口調は甘い。さうして

かかへて、木にねむからなかた。三に打てし力革をがり出し

二 人 な ん て、 だ

「總」第 15 号

つばー？

マナの言葉を、コウが遮る。

両手を伸ばし、力を込めマナを引き寄せた。

5

マナの驚く間もなく歓か重なった

「アーティスト」

強くマナを抱きしめて、ユウは呟いた。

「あなたが好きだ。誰にも渡したくない。でも、わからないんだ。

これがどの気持がなのがお父さん母親として愛してゐるのか、運う女として愛してゐるのかつからぬ。さぞ、あんな子が子をさう。それ

しかないと

彼の身体は、震えていた。

「好きだ 好きなんだ、マナ。こんなに好きなのに、どうして黙
田なんだ……っ！」

激しい感情が伝わる。

ぎりぎりの理性を、危つい激情を、相反しながら内に保つこと、ユウもまた疲れていた。

愛しているのに、こんなにも求めているのに、許されない想いに。マナは、そんなユウが愛しかった。だから、腕をのばして彼を強く抱きしめた。

ユウの身体が強ばつたのがわかつた。

「ユウ。あたしも好き。あなたが一番好き。この気持ちは、なかつたことになんてできない。あなたを愛してる」

「マナ」

「あたし、もうドームへは帰らない。あなたと生きるの」
ぎこちなく、ユウは抱きしめていたマナの身体を離した。

狼狽えた瞳が、見返す真撃な眼差しのマナを見下ろしていた。

「マナ。俺はあんたに未来をやれない。残るもの、与えてやれない。それでも、俺を選べるのか」

「選ぶのではないの。そんな感情じや、ないの。あなたを好きなの。一緒にいたいの。未来の何も、関係ないの」

一途な想いで、マナはユウを見つめた。

それを感じとったユウは、恐れるように震える手でマナの頬に触れた。

「本当に、マナ……？」

「ええ」

「不便な生活しか、ないよ……」

「あなたがいるわ」

「子供も、やれない……」

「あなたがいればいい。ドームにあるどんな幸せより、あなたがいる幸せのほうがいいの」

「本当だ」

ユウはきつくる唇を噛みしめた。泣きだしそうな顔で、マナをずつと見ていた。

「俺も好きだ。あんたを愛してる。あんた以外欲しくない。こんなに、好きだ……」

そのまま、二人は唇を重ねた。

マナは、これを罪だとわかつていた。

ユウも、わかつっていた。

けれど、二人とも溢れる想いを止められなかつた。

そして罪だとわかつっていても、それでも二人は幸せだつた。

「ユウ」

「愛してる、マナ……」

ささやきだけで、こんなにも嬉しい。

抱きしめてくれるだけで、こんなにも愛しい。

自分達は、会つてはいけなかつた。

惹かれてはならなかつた。

けれど、会つてしまつた。

惹かれてしまつた。

波の音が聞こえる。

自分達は、たつた一人でなんて遠くまで来てしまつたのだらう。

もう戻れない。
戻れないのだ。

遠くで、自分を呼ぶ声がする。

マナはその呼び声に、驚いた。
これが夢なのだとこいつことを忘れていた。
近づく声は、やがて懐かしい姿を現す。

(おじこちゃん!—)

マナはかけより、老人に抱きついた。

これこれ、マナ。

(会いたかったの。おじこちゃんに、本当に会いたかったの)

しがみついたまま、マナは顔を上げた。
前と何ら変わることのない、懐かしい老人の顔がある。

(今おじこちゃんはどこにいるの? 死んだ人達が行く場所に、いるの?)

私達はどこにも行かないよ。ずっとここにいるんだよ。おまえた
おと回じ世界に。

(十一、なつたの?)

やうでもあるし、それがないと生きられない。私達は、地球と同化し
たのだ。

(地球? 今、あたしが立っている、球体のことよね?)

そうだ。死もまた消滅ではありえなかつた。肉体は失われても魂はここにある。私達は、全ての命を産み出した世界へ、もう一度還つたんだよ。

(命つて、何なの? ビニから来るの?)

聞いた瞬間、マナは風を感じた。海から来る、あの風を。さあつと足元を水が包んだ。下を見ると、マナは海にいた。足首までの水が風にざめいていた。

命は、太古の海から産まれた。海は、地球から産まれた。地球は、宇宙から。たくさんのほんの些細なきつかけから、たくさんの奇跡が産まれた。今ここにおまえさんやコウが存在していること、これがこそが、奇跡なんだよ。

(海の向いには何があるの)

老人は静かに腕を上げ、指差した。

ありのままの命が。全ての命が存在する世界が。

(そこでなら、あたしたち生きていける?)

マナの言葉に、老人が満足げに頷いた。

マナ。自由になりなさい、全てのことから。全てのじがらみを断

ち切つて、ただ、あるがままに。どこまでも続く海の向こうへでも、おまえさんは行ける。コウが、連れていってくれる。

(おじいちゃん。あたし、コウと一緒にいてもいいの?)

老人は答えなかつた。ただ、微笑んでマナを見ていた。

憶えておきなさい。例えどんなことが起きよつとも、私達の遺る場所は、この世界しかないのだということを。

光が降ってきた。

そろそろ、行かねばならんようだ。

(おじいちゃん?)

老人の身体が、光に融ける。同時に質感がなくなる。

いつもおまえさんたちが幸せであるように祈つているよ。

声すら希薄になる。

マナは老人を捕らえようと必死で手を伸ばした。

(待つて、おじいちゃん! -! -)

マナの願いは届かなかつた。

光がマナの視界から老人を奪つた。

そしてそのまま輝き、全てを隠した。

「…ナ」「

ユウの声に、マナは田を開ける。

心配そうに覗き込むユウ。

手を伸ばし、確かめた。

「ユウ」

木のはざる音。

焚火があたたかに周囲を彩っていた。
風の当たらぬ場所に起こした焚火を前に、寄り添つたまま眠つてしまつていたのか。

「泣いていた。何か、恐い夢でも見たのか？」

「ううん。おじいちゃんが、来たのよ」

「おじいちゃんが？」

「自由になつて行きなさいって。全てのしがらみを断ち切つて、ただ、あるがままで。そう言つたの」

マナは腕を伸ばしてユウにしがみついた。抱きしめかえす強い腕を感じる。

この少年とともに生きると、自分で決めたのだ。

「遠くへ行きましょう」

微笑つて、マナは言った。

「マナ　？」

「ここを離れて、もう誰もいない海の向こうへ行きたいの。ユウ、連れていって」

「本気なのか、マナ？」

「ええ」

ユウは身体を離し、不安げにマナを見つめていた。

「何があるかわからないよ。食べるものだって、ないかもしない」
マナは笑つて首を横に振つた。

「あなたがいればいいの。だから、一人で行きましょう。海を越えて、世界の果てへ」

「マナ」

幸福な未来を確信して、マナはまだ見ぬ世界を思った。

「あなたと見るなら、世界はきっとどこでも美しいでしょうね。そうして、一人で生きていくのよ。まだ見たこともない世界で、まだ見たことのない美しい色と、光と、たくさんの生命の群れを、あなたと見るのは」

ノックの音に、フジオミは田を覚ました。

「はい？」

まだ夜明けには時間があるのだろう。ほんのりとうす明るい室内でそれを理解する。

急いでベッドを出、フジオミはロックを解いてドアを開けた。

「お早よつ、フジオミ。」めんなせこ。こんなに早くに

「いや、いこよ。どうぞ」

身体を引いて、フジオミはマナを中へ迎え入れた。ドアを開じるなり、

「フジオミ、あなたをドームへ帰すわ」

マナの澄んだ声が耳に届く。秘かな確信とともに振り返る。

「君はどうするつもりだ？ ユウと残るのか？」

「ええ」

確信でおひの答。

マナは微笑んだ。あどけない表情で。

次にかける言葉を、フジオミは一瞬で考え直さねばならなかつた。

「そうだな。君なり、できるな」

この笑顔の前に、それ以上何が言えようかと、フジオミは笑つた。

「あなたはあのドームで一生を終えるの？」

「僕は君とは違う。あそこでしか生きられない。だから帰るよ」

「後悔はないの？」

「ない。僕は僕にしかれないから、ありのままを受けとめる。例えそれが、君にとって歪んで見えても」

「博士と、生きるのね」

「できることなら」

「あなたがいれば、博士はきっと大丈夫よ」

無邪気なマナを、フジオミは心底羨ましこと思つた。

彼女は幸せになれる。その幸せを邪魔することはできない。
だが、シイナはどうなる。彼女の幸せは、マナにかかっている。
マナがいなければ、シイナの幸せはありえないのだ。

(だが、マナが永遠に、彼女のもとから去つたら ？)

そうして、もしも、シイナが全てをあきらめくれたら、もしかしたら、彼女は自分を振り返つてくれるだろうか。
浅ましいと思いながらも、都合のいい夢を見る。

その時。

「！？」

太陽とは違う一瞬の光が視界を掠めて消えた。

聞いたことのない音が連続して重なった。続く轟音。床が揺れた。
フジオミはとつそにマナの腕を掴み、引き寄せた。

「これは何！？」

マナは揺れる床で必死にフジオミの腕にしがみつき、バランスを保とうと努力した。

「銃声だ。爆発音もした。シイナが、ここを見つけたんだ！！」

心臓が、痛い。

いやな感覚だ。そして、これは気のせいではない。

「ユウ！？」

マナは外へと走りだした。

「マナ、危険だ！？」

ガラス張りのエントランスの外に、小さくコウの姿が見えた。

「ユウ！？」

「マナ、来るな！？」

振り返らず、ユウが叫んだ。見えない壁がたくさんのレーザーを反射し、遮っていた。ついでたくさんの銃声にかき消され、すでに声などとどかない。

「マナ、危ない、下がれ！！」

追いついたフジオミに腕を捕まれ、マナはそれ以上ユウの傍へ行くことはできない。

攻撃を仕掛ける方も仕掛けられる方も必死だつた。

だが、ユウには攻撃を受けとめるだけで精一杯だつた。自分に対する攻撃があまりにも集中しすぎて、反撃できないのだ。そしてその攻撃は、一向に衰える気配がない。

マナには、ユウは極度に疲労しているように思えた。

ユウのあの力は無尽蔵ではない。使えばその分身体に負担をかける。

そして、彼はたくさん武器を前に、たつた一人で戦わねばならないのだ。

ついに、ユウの身体がぐらりと前に傾ぐ。同時に、彼を取り巻いていた見えない力が弱まった。

一瞬の後、ユウの身体を一本の光の筋が貫いた。ユウの膝が落ちた。

「ユウ！！！」

「マナ、よせ、出るな！！」

フジオミの静止も聞かずに、捕まっていた腕を振り払い、マナはユウのもとへ走った。見えない壁はまだ完全に消えてはいない。時折壁を突き抜けるレーザーを奇跡的にも避けながら、ユウへとかけよる。その姿をとらえたのか、レーザーも銃も攻撃をやめた。

「マナ、来るなって…」

胸を押さえていたユウは、顔をあげてそれだけを言った。そして、そのままユウはマナの腕を掴み、廃墟の入り口にいるフジオミのもとへと跳んだ。

「ユウ、マナ！！」

廃墟内に、突然現われた一人に驚いたものの、フジオミはすぐに
ユウの身体を焼いた傷を見た。

右胸と左腿が肉の焦げた臭いを放つている。

レーザーで焼かれた傷は治せないと聞いたことがあったのを、記憶の片隅が覚えていた。レーザーは細胞を殺すのだと。再生不可能になるまで。今の医学でも、再生是不可能だ。

ユウは蒼白な顔で、苦痛を堪えるように目を閉じて動かない。

「いや、ユウ、いや、死なないで……」

口に出して、マナはその言葉の恐ろしさに身震いした。

死。

それは全てを無に返すもの。

愛した命を永遠に奪い去るもの。

「いや、ユウ、ユウ、死んじゃ駄目、そんなのいや……」

「マナ、そばにいてくれ。最期まで……」

すでにユウは死を覚悟している。

外は奇妙なほど静かだった。

だが、強い、たくさんの感情が伝わってくる。困惑いや、恐怖、焦り、悲しみ、一人のものではない、たくさんのクローン達のものだった。

感情がないと教えられていた彼等は、ユウの力を恐れると同時に、シイナを恐れていた。自分達にこのようなことをさせる彼女を。その時、徐々に大きく、近くなつてくるヘルの音に気づいた。

「マナ、シイナが来る」

フジオミとマナは目を見合せた。

時間がない。

このままではシイナ達がここへ踏み込んでくるだろ。

ユウは動けない。シイナがどう行動するかは目に見えている。

こんなふうに、自分達は終わるのか。

まだ何も始まっているない。

まだこれからなのに、こんなふうに終わるのだろうか。

「いいえ」

毅然とした声。

「違うわ、ユウ。あたしたちは生きるの。一人で、生きるのよ。そしてどこまでも行くのよ。この世界の果てまでも」

「マナ…」

「あたしをおいて死ぬつもりなの？ あたしをたった一人、ここに残して？」

そんなこと許さない。

生きるのよ。ここでこんなふうに死ぬのは絶対に許さない」

マナは強く、ユウの手を握りしめた。その指先にくちづける。

「だから、今は戻るわ。死んでは駄目。きっと迎えにきて。あなたが本当にあたしを欲しいのなら。あの日あたしをさらつたように、もう一度連れにきて」

「マナ…」

「ユウ、あなたがいないのなら、この世界に意味はないの。あなただけがあたしの生きる意味なの。

だから、待ってる。あなただけを、待ってる」

二人の手が、離れる。

マナは一番低い可能性に賭けた。

今、ユウを死なせないこと。

このままほおっておいたら死ぬかもしけない。

でも、今ここでシイナを止めることもできずに彼の死を確實にするよりは、助かる可能性はある。

自分の言葉なら、シイナは聞いてくれるはずだ。

「行きましょう、フジオミ」

「マナ！」

崩れかけた廃墟から出てくる一人の姿を見て、シイナはヘリを下りてかけよつた。

そうして、小さな少女の身体を強く抱きしめた。

「博士」

対するマナは、複雑な表情で抱擁を受けとめた。

「ああ、よかつた。よく無事で」

「彼はもうすぐ死ぬわ。レーザーが心臓を貫いていたの。もう意識もないもの」

乾いた声音に、シイナは鋭い眼差しを向けた。

「マナ、それは本当なの？」

「ええ。ちゃんと確かめたわ。だから逃げてこれたの。博士。今なら逃げられるわ。はやくここから逃げましよう。すぐにドームへ帰るの。もう帰りたい。博士が迎えにてくれるの、ずっと待つてたの。今すぐあたしを連れて帰つて」

「ええ、ええ。すぐに連れて帰るわ。行きましょう。フジオミ、あなたも乗つて」

「ああ」

動きかけたフジオミの視線が、ふとマナを捕らえた。マナもまた、フジオミの視線に気づき、互いの眼差しが揺らいだ。

本当にいいのか フジオミの瞳が問う。

博士には何も言わないで マナの瞳が哀願する。

二人は無言のままへりに乗り込んだが、フジオミはマナほど現状を楽観視していなかつた。

あのシイナが、マナの言葉一つで、コウの死体を確認もせずにこの場を去ることがあるだろうか。

自分は、マナよりもシイナという女を知っている。彼女は目的の

ためには手段を選ばない。

そして、失敗に対しては、同じ轍を一度は踏まない。

さらにそれ以前に、フジオミにはユウが助かるとはとても思えなかつた。あの状態で傷が回復するなどとは思えない。

マナは愚かなことをしたのではないか。彼女だけを求める魂を、たつた一人で置き去りにするなど。

一方、フジオミの言いたげな思いを、マナは敏感に感じ取つていた。

後悔が、彼女を侵食し始める。

本当に、これでよかつたのだろうか。今ユウと離れて、本当によかつたのか。

できることなら、今すぐに引き返していくしかつた。だが、戻つてどうなるだろう。

今のユウではマナを連れて逃げることはできない。ましてや自分がユウを守り、連れて逃げることも。だから、今はユウの能力と、あの言葉を信じるしかなかつた。

マナのためなら、何でもしてやる。

脳裏に響くユウの声。

心は、これが正しいと知つている。

ユウは約束を破らない。決して。

信じている。他の誰でもなく、ユウを、ユウだけを信じている。

(おじいちゃん。どうか、ユウを守つて)

だが、その思いは背後で起つた遠い爆発音に断ち切られた。

「!?

振り返つたマナが窓越しに見たものは、たちのぼるコンクリートの灰色の粉塵のみ。

記憶にある懐かしい廃墟は、ヘリがさらりと高く飛びたつた後にさえ、見ることは叶わなかつた。

「博士、どうして……！」

「あんなものを、放置しておいたからよくなかったのよ。滅びを迎えた醜い廃墟はもつ意味がないものよ、マナ。いつそ壊してしまつたほうがいいのよ」

平凡と、シイナは言つた。

「こんな原始的な世界で今まで生きていたこと自体が異常なのよ。もつと早く気づいて始末しておるべきだったわ」

その時、マナは語つた。シイナの内にある壊れた優しさを。欠けた愛情を。

そこにいるのは間違いなくマナの愛した、けれど幼いユウを殺せた女なのだ。

田の前が暗くなるのを、マナは感じた。

「……」
弦きは、マナを抱きとめたフジオミにしか聞こえなかつた。

救けて、ユウ。

そう、マナは呼んだのだ。

マナは意識を失つたままドームに戻つた。高熱が続き、じょりくはシイナ以外は面会謝絶の状態だつた。

フジオミは密かにユウ達のいた廃墟群を搜索させたが、崩れて見る影のないコンクリートの残骸の下からは、いつさいの生命反応は確認されなかつた。フジオミは一体この事實をマナにビラビラすればいいのか悩んだ。

そして、さうして三日が過ぎた。

「あら、フジオミ」

マナのいる研究区域のメディアカルセンターの前で、フジオミはシンイナと鉢合させした。

「やあ、シイナ。マナはどうだい？」

「お見舞いにきたのなら生憎ね。マナは今朝部屋へ戻ったわいつもと違い、シイナは上機嫌だった。

「マナはどこが悪かったんだ？ 疲労か？」

「それもあるわね。でも、それだけじゃないわ

「？ どういうことだい？」

「女になつたのよ」

「何？」

「本来なら、初潮を迎えてからしばらくは生殖能力はないの。身体がまだできあがつていないのでね。けれど、促進剤を使ってマナの女としての成長を速めたわ。検査の結果、マナは完全な女性よ。生殖能力もユカと変わらない。私の役目も終わりよ。これからはマナがあなたの正式な相手になるわ」

瞳を輝かせ、子供のようにシイナは語る。

フジオミは苦痛を堪えるようにそれを見ていた。理解はしていた。それでも、心がついでいかない。

彼女は自分を愛していない。

彼女は、誰も愛せない。

わかつていながら、それでも愛した。今、痛みを残すだけの事實をいやというほど思い知らされながら、まだフジオミはシイナを愛している自分を知っていた。

「シイナ。それが君の望みか？」

「ええ。そうよ。私はこの時をずっと待っていたのよ。まだ、私達は救われる。

あなたとマナが、救うのよ」

フジオミが部屋へ入ると、マナはベッドに腰掛けたまま、空をじつと見据えていた。

「やあ、マナ」

ゆうべつとフジオミはマナへと近づいた。一人の視線が絡み合いつ。 「僕がここへ来たことの意味を、もう君はわかつていいだろ？」「マナは答えない。フジオミの手が、マナの頬に触れる。マナは抗わなかつた。

今これから、抱こうとしている少女を前にしても、フジオミは平靜だつた。実際に行動すれば何か感じるものがあるかも知れないとかすかに期待していたのだが、それも裏切られたようだ。

フジオミはなげやりな態度で、マナに唇を重ねよつとした。

「フジオミは、あたしを好き？」

唇が触れる寸前に、そう問われ、フジオミは身体を引いた。突然のマナの問いに、一瞬戸惑いはしたものの、微笑つて答える。

「ああ、好きだよ」

「愛してるの？」

鋭い口調。

「マナ？」

真つすぐに見据えるマナに対し、フジオミは奇妙な違和感を覚えた。マナであつて、マナではないような、そんな違和感を。

「答えて、フジオミ。あたしを愛してる？」

真摯な眼差し。偽りを容易く見抜いてしまいそうなほどだ。

偽るつもりも、フジオミにはなかつたのだが、こつも率直に問われようとは思つていなかつた。

「いいや。好きだが、それは愛じゃない。僕は君を愛していな

い

穏やかな口調で、表情も変えずにフジオミは言つ。

「それでも、あたしを抱くの？」

「愛して、いるから抱くんじゃない。これは義務だ。愛情で成り立つ行為なんて、もう存在しないよ。そもそも、愛情なんて、僕等の中にはありはしないんだから」

フジオミは穏やかな言葉の奥で、何かが荒れすさんでいくのを止められなかつた。

不毛な会話と、意味のない義務感が、精神を磨耗していく。

フジオミは全てに疲れていた。もう何もかもが意味すらないようだ、そんなふうに。

だが、田の前にいる、この少女は何なのだろう。自分と同じ人形でありながら、その瞳の、なんと若々しい力に満ち溢れていることが。

そしてさらに、少女はその力で、残酷な真実で、フジオミに堪え難い苦痛を刻みつける。

「違うわ。愛しているから抱くのよ。心も身体も、愛しているから欲しいんだもの。フジオミは、博士を好きだから抱くのよ。子供をつくれなくとも、博士が好きだから抱きたいと思うのよ。あたしを抱いても、それは博士の代わりなんだわ。フジオミはいつだって、博士のことしか考えてなかつたじゃない」

「そんな話をしにきたんじゃないんだよ！..」

反射的に、フジオミは叫んでいた。だが、すぐに我を忘れ取り乱した自分を恥じた。

「すまない」

マナは怯まずにじつとフジオミを見据えていた。強い意志を宿した瞳を、していた。

「フジオミは、本当はどうしたいの？ 博士を好きだから、博士の望みをかなえてあげるの？ あたしを愛してもいいのに？ そんなの、間違ってるわ」

フジオミは驚いたようにマナを凝視した。

ここにいるのは、出会った頃の何も知らない愛くるしいだけの少女ではなかつた。

それまで残つていたあどけなさも、今はもうビビリも見られない。シイナの投与した薬物は、マナの身体のみならず、精神までも変化させたのだろうか。それとも

「君を変えたのは、ユウか……」

一瞬、マナが息をのむのがわかつた。

堰を切るように、見る間に瞳に涙が溢れた。

「ユウ　そう、彼を愛してる。誰よりも、愛してる。想うだけで、涙が出るほど。

彼があたしに教えてくれたの。全ての意味を、彼が教えてくれた。理屈ではない言葉を。

偽りではない心を。

義務ではない愛情を。

愛情がないから、欲しないのよ。欲しないから愛せないの。

欲望は、何かを強く愛することだもの。それがないから、希望も未来も闇ぞられたのよ

「

「あたしは何も知らなかつた。だから、氣づけなかつた。ずっと信じていたのよ。あなたと博士は何でも知つていて、何でもできる、大人なんだつて」

マナは小さく微笑つた。涙が頬からこぼれ落ちた。

「でも、そんなのみんな嘘。

あなたたちは子供のままなんだわ。

何も考える必要もなく、生きるために何の苦労もない。だから、今を生きることの意味を考えられない。だから、生き続けることしか執着できない。そうやって何かを犠牲にして踏み蹕ってきたの

よ。

人の痛みをわかれないので、自分のことだけは正当化できるの。
そんな人間が大人のはずがないわ。

あなたたちは永遠に子供のままなの。この閉鎖された空間の中で
しか生きられない、可哀相な子供なのよ！！

フジオミはひどく腹立たしい思いで聞いていた。だがそれは、マ
ナの言葉が全て真実であるのをわかつていてるからだ。

マナは正しい。

おかしいのは、狂っているのは、自分達の方なのだ。
自虐的な思考に傾いていくのを、フジオミは敢えて止めなかつた。
そう感じることなど初めてではない。今まで、幾度となく味わつ
てきたことだ。

だが、それがどうしたというのだ。

今更それを突き詰めて何になる。マナだとて知らないだろう。シ
イナの絶望を。

意味のないこと。何も残せないこと。そうであるはずだつた自
分に、なれなかつたこと。

それ故の絶望をマナには理解できまい。彼女は、全てを持つてい
るからだ。

だが、シイナには何もない。

そして、彼女から全てを奪つたのが、他ならぬ自分だということ
も、今のフジオミは、痛いほどにわかっているのだ。けれども、そ
の事実を、マナに非難してほしくはなかつた。

「 全てわかつたような顔をするのはやめてくれ」

何もないからこそ求め続ける痛みを、決して理解することもでき
ないのに。

「 君がユウを愛していても、彼には生殖能力はない。しかも君とユ
ウは親子だ。決して結ばれてはいけない。近親相姦は、人類にとつ
て最も許されない行為だ。獸にも劣る。それが現実だ。」

君は君であるけれど、責任がある。義務がある。僕と同じように。

愛情だけで、責任を放棄できるのか。僕と君に、人類の未来がか
かっていても

「」

「ユウは死んだんだ。あの爆発では、どうあっても助からない。き
みに残された選択は一つだ」

それ以上の言葉を封じて、フジオミはマナを引き寄せると強引に
くちづけた。そして、そのままベッドに倒れこんだ。

苦しかった。

愛していない女を抱くことが、こんなに苦痛だと、フジオミは
知らなかつた。そんなことにさえ気づかないほど、以前の自分は幸
せだったのかと、改めて思い知る。

もしも、シイナが完全な女性であつたならば、マナを待たずに自
分を愛してくれたのだろうか。

そんなくだらない仮定が頭の中に浮かんだ。

「」

マナを組み敷いたまま、フジオミは動かなかつた。動けなかつた。
シイナを想つことでマナを抱こうとしたけれど、それが逆に、より
一層マナとシイナは違つたのだと認識させた。

抱けない。

フジオミは唇をきつく噛んだ。

シイナ以外、自分は誰も欲しくない。

マナもまた動かなかつた。ただ身体を強ばらせたまま、顔を背け
ていた。フジオミはそんなマナを見て、いつそうシイナを想つた。

「 そんなに、ユウが好きか」

それは自分への問いと同じだつた。

きつく目を閉じて、マナは頷く。

「ユウでなければ駄目か」

マナは両手で顔を覆つて、声を殺して泣き続けた。フジオミは黙

つてそれを見ていた。

マナと自分は同じだ。

互いに、愛してはならないものを愛した。

愛をなればならぬはずのものを愛せなかつた。

「 僕等はどうしても、こんなふうに生まれなければならなかつたんだろ?」

吐息のような溜め息の後、フジオミは言った。
マナはそつと口を開け、フジオミを見上げた。

「 本来なら、僕等はもっと自由に、もつと楽に、生きりれるはずだつた。

いつから狂つてしまつたんだろう。

どこからおかしくなつたんだろう。

僕等はもつと優しく、誰かを愛せるはずだった

ゆつくつと、フジオミはマナから離れた。

「 彼は、生きてくるかもしない

咳くよつな言葉。

「 フジオミ?」

「 あの後、廃墟を捜索させたが、彼の遺体はかけらも見つかなかつた。僕にわかるのはここまでだ。信じるのも信じないのも、君の自由だ」

そして歩きだす。

「 フジオミ、生き続けること、何の意味があるの?」

背中に届くかすかな声に、フジオミは肩を竦めた。
部屋を出していく彼の咳きは、ひどく虚ろに響いた。

「 さあね。もしかしたらそんなものはないのかもしれない。
だって、僕等が滅んでも世界は終わらない。

きっと僕等がいなくなつた後でも、世界は変わらずに美しくま

存在し続けるだろう。

あるのは、僕等だけの終わりだ。ただ、それだけだ

シイナは研究室の備え付けの小部屋で「コーヒーをいれていた。その横顔を、フジオミはじつと見ていた。

「

シイナは美しかった。だがそれは、全てを排除する美しさだった。他を受け入れない孤高の、それこそがシイナ自身を表すもの。フジオミはしばらく彼女を見つめて、それから中に入った。

「フジオミーー？」

彼に気づいたシイナが立ち上がる。

「やあ」

「こんな時間に、こんなところで何をしているの！」

「答える前に、コーヒーを、いきそつしてもらいたいんだがね」

部屋に漂うコーヒーの香り。シイナは少し戸惑つたようだが、結局フジオミを迎えた。

「ブラックでいいわね」

「ああ」

シイナはメーカーを作動させた。ほどなくしてコーヒーの香りが一層濃く部屋に漂う。

黙つて手渡されるカップに、フジオミも黙つて手を伸ばす。

「こんな時間まで、君は何をしていたんだい？」

「ああ。先月第一ドームで起きた事故の記録を見ていたのよ、あなたの方が詳しいんじゃない？」

「あの、配水管の故障かい？」

「ええ。最初の報告書にはドームを通る配水管の故障としかなかつたけれど、原因の究明にかなりの時間がかかって、被害が大きくなつたのよ。実際は動力炉の異常過熱による負荷が原因だそうよ。起つてしまつたものは仕方がないけれど、こんな簡単な報告書でミ

スを隠そなんて馬鹿らしくて。もう少ししましな言い訳のできる者がないものかしらね。これから無能な者に管理を任せられないといつゆよ」

溜め息をつくシイナを、フジオミはじつと見つめていた。
不用意な言葉さえ口にしなければ、彼女を怒らせたりはしないのだ。

「うして見ていらっしゃるだけで穏やかな気持ちになれる」とも、フジオミは初めて知った。

「何を見ているの、フジオミ？」

問われて、我に返る。

「ああ。仕事となると、君はまるで人が変わったようだと思つて」「あなたにはおかしいでしょうね。でも、これが私の役目ですもの」「いや。君はたいしたものだよ。ここを仕切っているのは実際君なんだし、君の決定がなければ僕を含めた他の人間は、何一つ満足に決められはしないだろ？。君がここまで、僕等を導いてきたんだ」

「フジオミ　？」

「本当に、君はすばらしい女だ」

真つすぐに見つめる眼差しに、シイナは珍しくも狼狽えるそぶりを見せた。今までのフジオミとは違う　そう感じているのが表情でわかつた。自分でも驚くほどだ。

「フジオミ、あなた

だが、シイナが問い合わせるより先に、フジオミは席を立つた。

「もう行くよ。邪魔をしたね」

「あなた、ただコーヒーを飲みに来たの！？」

「いいや。ただ、君の顔を見に」

その言葉さえ、普段のフジオミならば皮肉げに響いたことだらう。だが、今シイナが聞いたのは、偽りのない真摯な告白だった。

「待つて、フジオミ」

部屋を去りかける彼を、シイナは呼び止めた。フジオミが振り返る。

「あなた、マナの所へ行った帰りだったんでしょ。どうだったの？」

「何も」

シイナの表情が訝しげなものに変わる。

「どういうこと？」

「何もなかった。マナとは、セックシしなかったのさ」「どうして！？」

「そんな気に、なれなかつた。僕等は互いを愛してない。マナはユウを愛してる」

「恐ろしいこと言わないで。マナとユウは親子よー？」

「だが、事実だ」

真つすぐに見つめるフジオミの瞳に、シイナはその言葉が眞実であると悟った。

「なんてことなの。フジオミ、あなた、一体何をしていたの！？一緒にいた間に、ただ黙つてそれを見ていたの！？」

怒りを露にして自分を見上げているシイナに、フジオミは深い吐息をついて答えた。

「君がどう言おうと構わないが、僕も努力はしたつもりだ。君の言うように、僕にも義務と責任がある。

だが、止められなかつた。誰にも恋する気持ちは止められないよ、シイナ。どんなに強い義務をもつしてもね」

「なんてことなの」

「まわりがどう騒いでも、マナは僕を拒み続けるだろう。君はユウとマナが親子だと言うが、それは違う。彼等は全く違う、一個の存在だ。マナは確かにユカのクローンだが、ユカじやない。ユカの記憶さえない。彼等の間に、親子の関係は存在しないんだ。

これまでずっと、そんなものは僕等にだつて存在しなかつたじゃないか。なのにどうして、血が繋がっているというだけで、遺伝子がそうであるからといって、縛られなければならないんだ。

シイナ、彼等の間に子供は生まれないんだ。なら、一緒にいたつていいだろ？」「……

シイナはフジオミの言葉を聞きながら、頭の中では全く別のことを考えていた。

彼女にとつてはそんな詭弁はどうでもよかつた。

必要なのは事実だけ。

狂いが生じた計画を、どうやって軌道に戻すか、それのみだった。「いいわ。私からマナに話すわ。それでも駄目だというのなら、仕方がないわ。マナには人工受精を受けてもらつ。その方が確実だわ」

独り言のように呟く。

「シイナ！！」

「わけのわからない話はもういいわ。コウは死んだのよ、あなただけ見て見たんでしょう？」

今更一人の話なんてどうでもいいじゃないの。マナは私が説得する。昔からあの子は聞き分けのいい子だったもの。私の言うことなら聞くわ。もう、あなたには頼まない

それだけ言うと、シイナはもうこの会話に興味を失くしたようにフジオミを見上げた。

「もう用はないはずよ。出ていいって

「いやだと言つたら？」

「私が出ていくわ」

乱暴に言い捨ててフジオミの脇を通りすぎようとするシイナを、彼は腕をつかんで引きとめた。

「こんなことをして、何になるんだ？」

「フジオミ、痛いわ、放して」

「君にはわからないのか。わかれないのか。君の絶望は、そんなにも深いのか。僕では、救いになれないほど

シイナはいつにないフジオミの苦しげな眼差しに怯えたように身を強ばらせた。

「何を言つているの

「気づかないでも思つていたのか。君はマナに、自分を重ねているんだ。自分にないものを、マナは全て持つていてるから。

そうであるはずだつた自分を、マナに求めるのはよせ。あの子は、君の思ひとおり動く人形じゃない。マナはもつ、君にはなれない

」
強引に、シイナはフジオミの手を自分から振り落つた。

「あなたの言つてることは、わけがわからない」

「なら、わかるように言おう。未来のためなんかじゃない。人類のためでもない。君は、君の望みためにマナを犠牲にしようとしているんだ。君以外の誰も、望んではいない。カタオカでさえあきらめている。マナも、僕もだ。あと五十年もすれば、僕等は確実に滅びるんだ。こんなことが、一体何になるつて言つんだ」

「やめなさいフジオミ……」

絶叫に近い叫びに、フジオミは口をつぐんだ。

「シイナは、傷ついたような眼差しをしていた。

フジオミの言葉の全てを否定していながら、それをどこかで事実として受け入れてしまつたような、そんな瞳を。

「…すまない」

「あなたに、謝つてもらう必要なんか、ないわ」

シイナはそのまま踵を返し、走り去つた。

フジオミは黙つてそれを見ていた。

いつも、彼女はフジオミから逃げていく。

そうして自分はおいかけることもできずに、ただ見送るだけ。いつから一人は、こんなにも隔たつてしまつたのだろうか。ずっと一緒に育つってきた。

あんなにも傍にいたのに、どうして今自分達は一人でいるのだろう。

「

フジオミは背中を壁に預け、自分を抱くように支えた。そうでな

ければ、もう立つていられない。

彼女が欲しかった。

こんなにも、苦しいほどに、彼女だけを求めている。

身体ではなく、心が。

「シイナ……」

これ以上進めないほどに廊下を走り、シイナは呼吸も荒く壁に手をついた。

息を整えようにも、乱れた感情が邪魔をする。

心臓が痛むのは走ったせいばかりではなかった。

フジオミに対する怒りが、これ以上ないといつほどの感情を支配する。

よりにもよって、あの彼が、カタオカと同じように愛を口にしたのだ。

「愛、ですって？ 馬鹿馬鹿しい」

痛む胸を押さえ、絞りだすように言葉をもらいう。

うんざりだつた。

どいつもこいつも、今更のよつに愛といつ言葉を振りかざす。

愛に何の価値がある。何の意味がある。

愛情で、世界は救えない。滅びゆく人間を救えるのは、愛ではない。

それがなぜ、誰にもわからないのだ。わからうとしないのだ。

「 つ！！」

シイナは拳を、壁に振り下ろした。何度も何度も。怒りはすでに限界に達していた。

救う気がないのなら、死んでしまえばいいのだ、誰も彼も。努力もせずにもういいなどというのなら、邪魔をするな。くだらない言い訳などいらない。弁解など、欲しくない。滅びを運命というのなら、あらがつてみせればいい。

救う術があるのに、なぜ行使しない。
なぜあきらめる。

あきらめるのなら、いつともっと早く、あきらめてくれればよかつたのだ。

それこそ、自分が生まれる前に。

この世界を、こんなにも呪う前に

「 いいえ。そんなことは、もうどうでもいい。どうでもいいのよ」

シイナは何度も頭を振り、自分の内に溢れる怒りや絶望を追い払おうとした。

嘆くよりもする」とがあるはずだ。
自分を憐れんで、それで何が残る。

「大丈夫よ。あの子は私を裏切つたりしない。あの子は素直ないい子だもの。今までだつて、私の言つことはよく聞いた。何も心配はないわ。あの子は自分の義務をよくわかっている。今は少し混乱しているんだわ。あまりにひどい環境で、不自由な生活を強いられたんだもの。ここで暮らせば、また元通りのマナに戻るはずよ」

マナがコウを気にかけるのは、たぶん彼女の内にある母性本能の名残に過ぎない。

一緒に暮らしたのだ。多少の情は移るだろ？

だが、それだけだ。そもそも、異性に対する愛情など、マナに育つはずがない。

フジオミの大げさな言いように自分でも思わぬほど動搖したことを、シイナは今更ながら馬鹿らしく思った。

「 」

大きく吐息をついて、シイナは天井を仰いだ。
和らかな明かりも、今は自分には邪魔だった。
腕で光を遮り、シイナはただマナを思った。

マナ。自分が育てた、大切な少女。

彼女は唯一の希望だ。

人類を滅びから救う、たった一人の女性体。

「マナ、私のマナ。救つてちょうだい。私達を。それ以外何も、望まないから……」

シイナは祈るように呟いた。

「フジオミ、一体どうしたんだね。こんな時間に。

顔色が悪い 早く中に入りたまえ」

低く響く優しい声に、フジオミは無言のまま従つた。

明け方近く、最後に彼が訪れたのは、カタオカの自室であった。おそらくは一睡もしていないのであろう。力なく椅子に座り込んだまま、両手で顔を覆つたフジオミを、カタオカはじつと見つめていた。

そして、幾分察してためらいがちに声をかけた。

「シイナか。彼女と何かあつたんだな」

「愛しているんです。僕は、彼女を愛してる 気づかなければよかつた、こんな想いに！」

返つてきたのは、悲鳴にも似た、苦しげな叫びだった。

肩を震わせ、声を殺して泣くフジオミは、以前とはすっかり変わつていた。

そして、憐れだつた。

「

カタオカは、フジオミがシイナに特別な想いを抱いていることに気づいていた。

だが、フジオミ自身がそうと気づくのを、望んではいなかつた。シイナが胸の内に抱えているこの世界への嫌悪を、十分に理解していたからだ。

彼女は何も愛せない。

それどころか、全てを憎んでいる。

そんな人間を愛して、幸せな結末が待つているとは思えなかつた。現にフジオミは「こんなにぼろぼろになつて自分のところへ来たではないか。

「マナを愛することは、できないのだろうな……」

「できません」

即答に、カタオカは大きく吐息をついた。

フジオミの言葉には、強い意志が感じられた。

シイナが持っているものとよく似た、強く、それ故に激しい、一途な想い。

そんな感情を内に持つといつのはどんなものなのだろうと、カタオカは自問した。

自分が持たなかつたものを、どうして、どうやって、彼等は抱えているのだろうと。

「なぜなのだろうな。私にはその強い想いがなかつた。

シイナは私が愛を持たないと言ったよ。誰かを愛せるのなら、あんなにも無慈悲な態度はそれなかつたと、彼女は聞いたかったんだな」

愛を知っているのなら、愛してもいない人間を抱く苦痛も、抱かれる苦痛も、理解できるはずだと。

だが、彼女は何も言わなかつた。

一度信頼を裏切つた人間がそれ以上何を言つのかと、あの時、その背中はカタオカを拒否した。

そして、カタオカも決定をくだした後で知つた。シイナという女が、誇り高く、それ故に、受けた屈辱を決して忘れる事はないのだということを。

カタオカは、自分を慕ってくれる娘同然の子供を、その時失つたのだ。

「だが、愛しているのだよ。フジオミ、君を、そしてシイナを。私は確かに間違いを犯したが、それでも、君達を愛していたんだ」

親が子を見守る如く。穏やかに、優しい感情で。

理解してもらえる時は、来なかつたけれども。

「幸せになりなさい、フジオミ。君がこの世界の中でも幸せになる方法は、きっと見つかる。それを探すんだ」

「だが、僕はマナを愛せない。シイナ以外、愛せないんです。そして、マナもユウ以外を愛せない。それでは、シイナは幸せになれない」

こんな状況であつても、フジオミはまだ自分よりもシイナのことを考えていた。常に己れのことのみを考え続けていた彼が。

本来、愛とはそういうものであったのかもしれないと、カタオカは思った。

己れのではなく、相手の幸せになるべき道を探し、それによつて自身の幸福を見いだす。

そんな愛が、かつては確かに存在していたのかもしれない。

こんな世界でなければ、きっとシイナも、フジオミも、マナも、ユウも、全ての人間が、もっと幸せであつただろう。

ありえないはずの世界を束の間思い描いて、カタオカは力なく頭を振った。

「では、私にはもう、何も言ひ資格はない。フジオミ、君が決めたまえ。君の決定に、私も従つよ。それが例え、シイナの計画に反することでもね」

「カタオカ」

「もう、終わつてもいいんだよ。自由になりなさい。終わることが決まった世界に義理立てすることは、もうないんだ。彼女も、それをわかつてくれればいいのだが」

カタオカはスクリーンの中の濃い闇が、やがて穏やかな光を増していくのに気づいた。

朝が来る。

何が起こるとも、世界に変わりはない。
等しく、誰の上にも朝は来るのだ。

「さあ、少し休みなさい。君は疲れている。私のベッドを使うとい

い

「ですが、あなたは　」

「私は少し仕事を片づけるよ。行つて休みなさい」

促されて、フジオミは素直に従つた。

隣の部屋へフジオミが消えると、カタオカはゆっくりと椅子に腰掛けた。

徐々に明るくなる部屋に、もはや明かりはいらなかつた。
夜明けの光は優しく室内を満たしていった。

「

カタオカは眼を閉じてしばらく動かない。ただじつと、そうして
いた。

これで完全に、未来は断たれたのだと、彼は悟つた。

何が起ころうとも、フジオミとマナは結ばれることはない。

彼等の間には、互いに寄せる愛情がないだから。

どんなにすぐれた科学と技術をもつてしても、人間の心を説き明かすことはできなかつた。

その一番不確かな、すでに失われてしまつたと思っていたものが、
最後の未来を決定づけたのだ。

何ということだろう。

未来のために感情を切り捨ててきた人間が、それ故に滅びを迎えるなどとは。

それは、深い虚無感としてカタオカの内部に組み込まれた。
なぜこんなにも、虚しさばかりが広がっていくのか。

自分には何かを強く愛することはできないのに。

それは、もう失われた感情であるのに。

強い愛情を向けるべきものは、この手に抱くことなく、この世界に生まれることなく去つた。

そしてカタオカも、自覚することなくその感情を失つた。

持てるかもしぬなかつた子供。

もしかしたら、シイナでも誰でもなく自分こそが、一番に新しい命を望んでいたのかもしれない、カタオカは漠然と感じた。

永遠に抱く」とのなかつた、自らの子供の代わりに。

マナがここへ戻つてから、すでに一週間が経っていた。

シイナはフジオミに言つたとおり、マナの懐柔に努めていた。決して無理強いはせず、以前と同じように宥めるように説得を繰り返す。

「ねえ、博士。何度も言つたわよね。あたし、ユウが好きなのよ」「ええ。それはわかるわ。でも、それは問題ではないのよ」

「博士、聞いて」

「ああ。マナ、いい子だから、落ち着いて考えてみてちょうだい。あなたには大切な使命があるのよ。あなたにしか、できないことなのよ。無理強いはしたくないの。あなたはいい子だもの。せつともう少ししたら私の言つていることがわかるはずよ」

そう言つてシイナは部屋を出でいった。

「ゴウ……」

マナは泣きそうになるのを必死で堪えた。

シイナはマナの話を決して真剣に聞いてくれようとはしなかった。子供を宥めるように教え諭すだけだ。マナが何を言つても取り扱ってくれることもない。

マナは失望した。

思つたとおりに、ここでマナと真剣に話をしてくれる者などいない。自分はかごの中で飼われる動物のようだと、マナは思った。シイナには、危険だからと許可してもらえなかつたけれど、せめて外に出たかつた。

風が吹く、土の上に立ちたかつた。

ここは息がつまり。

止まつた時間の中でもつづつ生きていこう、全てが緩慢で、味気ない。

ユウガ来る前に、このままでは自分のほうがおかしくなつて死んでしまうような気さえ、していた。そして、何よりもナは恐れていった。失望が憎しみに変わることを。

かつてユウガシイナを憎んだよつて、自分の想いが憎しみに変わることだけは、いやだった。愛したものを憎むのは、つらいことだ。その愛が強ければなおさらだ。

シイナを、ユウを、愛している。

だからこそ、愛し続けていたかつた。

「ユウ、いつまで、あなたのこと待てばいいの……早く来て……」

何度も、ユウが迎えにきてくれる夢を見たけれど、目が覚めて虚しい現実に引き戻されれば、いつも哀しくて泣いてしまう。いつ来るかわからないものを待つのは、苦痛だった。

このまま、彼が迎えにくるのを待つていいのだろうか。そう、考えてしまつ。何もせずに、ただ待つていてもいいものなのかも。

考えすぎて、嫌な結論を導きだしてしまつやうになるのも一度ではない。

迎えに来ないユウ。

それは来ないのではなく、来れないのだと。

あの爆発に巻き込まれ、もはや生きとはいひないのではないかと。いつも死んでしまおうか。そう考えたこともあった。簡単だ。

ユウがない世界に何の意味がある。

あの声を聞けないのなら、あの微笑みが向けられないのなら、自分を抱く強い腕がないのなら、生きることはもはや死に等しい。

そう思いながらも、自分が踏み切れないのは、心のどこかで、ユウの死を否定しているからだ。

「ユウが自分を一人残して死ぬはずがない。

約束したのだ。

ここを離れて、海の向こうの見知らぬ世界へ行こうと。少しの可能性でも在るのなら、全てを否定することはできない。決して。自分以外の全ての人間がそうしても。

「

そうだ。他人の言つことなど、なぜ信じられる。

老人も言ったではないか。

人の言葉を信じるよりまず先に、それが真実であるかどうか自分が確かめると。

自分の目で、確かめるのだ。

ユウの死体を見るまでは決して信じない。

もし自分達がすれ違つたとしても、彼はきっと見つけてくれるはずだ。シイナ達よりも早く。

「行くわ、ユウ、あなたの所へ」

マナは迅速に行動を起こした。コンピューターにアクセスし、地図を呼び出す。

だが、地図を見てがっかりした。ここからあの廃墟までは相当の距離がある。へりではどのくらいの時間でどのくらいの距離を飛んだのかも、マナにはわからない。

こんなことなら、よく見ておけばよかつた。気を失っている暇などなかつたのに。本当に、自分には知らないことが多すぎる。さらにはコンピューターにアクセスし、近辺の地形、環境のデータを引き出す。

徒歩で行くならマナの足ではまず無理だ。

しかし、徒歩は無理だが、ドームには移動に使うジープがあるはずだ。廃墟まで来たクローン達は、シイナと違つて陸を移動したは

すだ。ならば、車で廃墟まで行くことは可能なはずだ。運転は、教わればいい。これから。

マナは引き出したデータの中から必要なものだけをプリントアウトした。

誰も信じられない。

一人でやらなければ。

その田マナが言い出した『お願い』に、シイナは案の定、不可解そうに問うてきた。

「ジープの運転を教わりたい？」

「ええ。博士」

「どうしたつていうの、マナ？　急にそんなことをいいだすなんて」
シイナの反応は予測済みだった。後はいかに自分がうまく隠せるかだった。

「だって、博士。ここでは何もすることがないんだもの。あたし、退屈で死にそうなのよ。身体を動かしたいのよ。外に出れないのなら、変わったことがしてみたいの。大丈夫よ。倉庫からは出ないから。

あたし考えたの。気分を変えなきやつて。そうすれば、コウのこと忘れて、フジオミのこと考えられるかもしれないわ。だって、あれはもう過ぎたことだもの。コウは死んだんだもの。そうでしょう、博士？」

無邪氣で懶かな少女の振りをする。

それが、シイナを騙す唯一の手段だ。

フジオミと違つて、シイナはマナの変容を知らない。もとより、彼女の固定観念からは、マナは以前どおりの何も知らない人形のような少女を脱しない。彼女の日々のマナに対する接し方で、それはもう明らかだつた。

「気分転換をしたいのね」

「そう。だって、もうディスクだけの学習なんて飽きたやつたわ。もっと面白いことがしたいの」

「……わかつたわ。その代わり、危険なことはしない」と。約束で
きる?」

「ええ、できるわ。ありがとう、博士」

マナは、シイナに抱きついた。あくまで以前の自分と同じように振る舞つた。それはマナ自身にとっては気持ちのいいものではなかつたが。

以前の自分は、本当にシイナの言うままのお人形のようだ。どうして、疑問にも思わなかつたのだろう。

「じゃあ、気分転換は明日から。今日はもう部屋へ戻りなさい。十時には迎えをやるわ」

「はい。約束よ、博士。ああ、今から楽しみ」

マナはパツとシイナから離れて部屋へとかけていく。

「マナ、そんなに急ぐと転ぶわ」

背後からかかる声に振り返ると、マナはにっこり笑つて手を振つた。

シイナも笑つて手を振り返す。その表情からは疑いは微塵も感じられない。マナは表情には出さなかつたが、それを哀しく思つた。シイナとは、わかりあえないのだ。例えどんなに言葉を重ねても。だからこそ、嘘だけを重ねて、自分はここを出ていかなければならぬのだ。

こんなにも大事に思つているのに、こんなにも大事にされているのに、どうして心はこんなにも隔たつているのだろう。

それはとても哀しいことだと、胸が痛んだ。

さらに次の日、マナは今度は迎えに来たクローンに、シイナとは違う『お願い』をした。

「私が指示されたのは、あなたに運転の仕方を教えることだけです

が

声音に変化はないが、かすかに訝しげな表情で男は問い返す。

「ええ。でも、あなたはそれ以外のことも知ってるんでしょ。それを全部教えてほしいのよ。例えば、これが故障したときは、どうすればいいのかとか、そういうことを」

「ですが、それは博士の意志に反します。我々クローンは博士の指示に逆らうことには許されません」

「博士には黙つていればいいのよ。でなければ、あたしがあなたを処分するわよ。それがいやなら、さあ、教えて」

穏やかな脅迫だった。

彼等クローンには、人間に逆らうことには許されていない。触れなくても、マナには目の前の男の怯えが伝わった。罪悪感に、胸が痛む。

処分。

同じ命に対し、そのような傲慢な態度にでの権利を有する『人間』に、強い嫌悪を覚えた。

「ねえ。あたしたちがここで何をしているかなんて、いちいち全部報告する義務はないんでしょう。あたしたちはただ余計なことを言わなきゃいいのよ。ばれやしないわ。そうでしょう？」

「…それは、そうですが」

「じゃあ、教えて。あたし、どうしても知りたいの。お願ひよ」

真摯な眼差しで見上げるマナに、男は小さく溜息をついた。

「わかりました。では、始めましょう」

マナはこの一週間、学ぶべきことを全て完璧に学んだ。マニュアルを全て読みこなし、ここから北へと向かう走行可能な場所、タイ

ヤの交換の仕方、エンジンの故障への対応、バッテリーの点検など、考えられる非常事態にできうるあらゆる対処法を教わった。

「これで、私が教えられることはもう何もありません」

「ありがとう。あなたは立派な先生だったわ。ごめんなさい。無理を言つて。それに、一番最初にひどいことを言つたわ。本当にごめんなさい」

マナを教えた男は、訝しげな表情でマナを見ていた。

「何故、私などに謝るのですか？ クローンに謝罪はいりません」

その言葉に、今度はマナが訝しげに顔を上げた。

「あたしはあなたに悪いことをしたわ。悪いことをしたら謝るのは当たり前でしょう？」

クローンも人間も、関係ないわ」

「あなたは、博士が恐ろしくないのでですか。私達にはとてもできなことです。彼女の意志に逆らうなど」

問うてから、差し出がましい振る舞いをしたかというように狼狽えた男に、マナは何でもないといつぱり微笑つた。

「ねえ。あたしを見て。どう思つ？ 人間に見える？ それとも、クローンに見える？」

「」

いきなりの問いに、なんと答えるべきか、男は迷っていた。

「構わないわ。公然の秘密なんでしょう。あたしもあなた達と同じ。だとしたら、あたしに命令される権利はないってことよ」

「ですが、あなたは選ばれた存在です」

「いいえ。同じ人間だわ、みんな。例え産まれがどうであれ。あたし達はみな平等に、この世界に命を持つて生まれたの。生きることに差はないわ。命に、差があるはずない。あたしは、そう信じてる」

真つすぐに、マナは男の瞳を見返した。

「そんなことを言つたのも、あなたが初めてです」

こんなふうに話す相手に真つすぐに見つめられたことのなかつた

彼は、驚きと感嘆とともに、マナを見つめ返した。

「私には何もできませんが、せめて、あなたの望みが叶うこと、お祈りします」

祈るという言葉に、マナは驚いた。

ここでそんな言葉を使うものは誰もいないと思っていたからだ。もう何度も見て覚えたはずのネームプレートをもう一度確かめる。

「神様に？」

嬉しそうなマナの問いに、男は笑みを返した。それは、とても人間らしい、豊かな微笑みだった。

「ええ。あなたが信じる神に」

「ウ＝サワダ。ここで唯一まともに、自分と話してくれた人だ。忘れないでおこへ。

「ありがとうございます。ウ。あなたが幸せであるように、あたしも祈ってる」

計画を実行するのに、マナには一つだけ気がかりがあった。ドームの見取り図はすでに把握している。問題はどうやって見つからずに管理区域に入り込むかだ。

だが、それもすぐに解決した。

天井を見上げて、気づいたのである。

コンピュータから必要な情報を呼び出し、再度確認する。マナが計画を実行に移してから数十分後、フジオミがマナの部屋を訪れた。

「マナ、いるんだろう。入つてもいいかい」

フジオミは、いくら呼んでも応えないマナに疑問を感じて、ドアを開けた。

「マナ　？」

部屋に、彼女はいなかつた。備え付けのバスルームからシャワーの音がする。

「マナ、話があるんだ。君が出てくるまでここで待っている。いいかい？」

だが、応えはない。

しばらく、フジオミは待つたが、一向にマナが出てくる気配はなかつた。

「マナ」

フジオミは、もう一度、声を大きく彼女を呼んだ。だが、今度も答えはない。

「マナ、いるんだろう？」

ドアを叩くが、反応は返らない。何度ドアを叩いても、マナの声は聞こえない。

「大丈夫なのかマナ。開けるよ」

ドアを開けたとたん眼前に溢れる白い湯気と熱気。

「マナ、大丈」

そこには、マナはおろか、誰の姿も気配もなかつた。

天井を見上げると、湯気の向かう換気用のダクトが開いたままになつてゐる。ここは全ての区域と繋がつてゐる。フジオミにはわかつた。マナはここを出していくつもりなのだ、自力で。

「ユウを待たずに、自分の力で、君はここを出していくのか…」

フジオミは不思議な感慨に囚われた。

自分より一回りも年下のあの少女は、もはや自分達とは違つのだ。自分の目で見、自分の頭で考え、判断し、行動できる。

なんて、強い。

マナは自分達とは違う。とても強い。その強さで、きっと彼女は望むものを得られるだろう。

「

フジオミは、急いで部屋を飛び出した。自分も、動きださなくてはならない。

自分にも、できることがあるのだ。彼女の望みを叶えるために。一つになく気分が高揚しているのを、フジオミは嬉しく感じていた。

自分が何をしたいのか、どうすればいいのかわかることは、とても気分がいい。これでやっと、自分も動きだせるのだ。

「ダクトの中に生体反応がある?」

シイナはその報告を受けた時、一瞬、ユウが生きていたのかと思つた。

「データをよこして」

すぐにコンピューターでダクトの見取り図が表される。赤い点滅が

生体反応だ。ゆっくりではあるが、管理区域を進んでいる。入り込んだ時点で追跡されているにも気づいていない。警報が鳴らないのは、うまく警報装置がある場所を迂回して進んでいるからだ。

「警報装置のある場所を迂回しているとして、ビコに向かっているの？」

「おそらく、1階の倉庫に向かっているのだと思われます」

「倉庫？」

外からの侵入者でなく、居住区にいるマナを狙っているわけでもない。これでは、中から外に出で行こうとしているようだ。

「まさか、マナ……？」

その時、彼女等を照らす明かりが消えた。
続いてけたましい警報が、鳴った。

足元をかろうじて照らす水銀灯をたより、フジオミは暗闇の中を壁伝いに歩いていた。先程の警報でシイナも居住区にいるはずのマナの安否を確認する。そうすれば、マナがいないことに気づくはずだ。

確かに少し行けば、次の角に水銀灯が見えるはずなのだ。そして、その下のボックスには非常事態用の工具がある。ライトもあるはずだ。

ドームの電気系統の配電盤の、さほど重要でない配線を切ったのはフジオミだった。

緊急時には非常用の電源は全てドームの機能を維持するために使われる。住居区は特に後回しだされるのだ。シイナが直接居住区に確認にいくはずだ。それで、少しは時間が稼げる。シイナがマナの不在に気づくその前にマナを見つけださなければならない。

きっと彼女は管理区域の倉庫に向かっているだろう。ここ一週間、車の運転を教わっていると聞いていた。ならば、それで逃げようとするに違いない。

急いでいたフジオミが、突然動きを止めた。暗闇の中に、人の気配を感じるのだ。

「誰だ？」

答える声はない。

「…」「ウ、君か？」

とつさにそう口にしていた。答えはない。ただ動かすにじっと、そこにいる。

だから、フジオミは確信した。

「マナは部屋にはいない。管理区域に行つたんだ。自分一人でここを出でていこうとして」

答えるがなくとも、フジオミは構わず話しかける。

「僕を連れていってくれ。君がマナを愛しているように、僕はシイナを愛している。僕が彼女を止める。だから、彼女を」

傷つけないでくれ。

最後まで言う必要はなかつた。無言のまま、影が動いた。腕に触れる手を感じた時、フジオミは思わず身体を強ばらせた。

「俺がわかるのは研究、居住区域だけだ。この暗闇で、ここが管理区域の何処なのかもわからない。あんたならわかるな」

低い声がささやくようにもれる。

「ああ。だがその前に質問を。一体君は今まで何処にいたんだ？あの廃墟にはいなかつたんだろう。調査させたが、君の死体は愚か、荒れ放題だつたと聞いたぞ」

「簡単だ、ここにいたんだ」

「ここに？ このドームにか？」

「ああ。居住区域には部屋は有り余つてゐる。その一つを使ってたんだ。俺はマナほどあの女を甘く見ない。力の使えない俺じゃ見つからすぐにやられるのはわかつてた」

「傷は、大丈夫なのか」

「ああ。すぐに治した。それからここへ跳んだんだ。力の使い過ぎで疲れてたから、それからずっと眠つてたんだ」

「治癒能力もあるのか。驚いたな」

「それよりも早く、マナのところへ」

「そうだった。君がいるなら簡単だ。」

シイナを追えばいい。彼女は

必ずマナを見つけだす

フジオミが思つたより早く、電源は切り変わつた。

突然の暗闇に慌てはしたものの、廃墟群すでに暗闇には慣れっこだつたマナは、その隙をついて見事に管理区域の2階に入つた。ちょうど非常階段の手前の天井にあるダクトの通気口を開け、慎重に廊下に下りる。

階段をかけ下りるマナの姿に、一、二人のクローン達が気づいた。訝しげな表情で彼女を見ているが、捕まえようとはしない。どうやらまだ気づかれていないらしい。マナは彼等の横を全速力でかけ抜けた。

よつやく一階までたどりついた。後は倉庫へ向かうだけでいい。

「マナ！..」

背後で声が響いた。振り返ると、五、六人のクローンを従えたシイナの姿が目に映る。

「そばに来ないで！..」

追いついたシイナは驚きを隠さない表情でマナを見ていた。

「マナ、どうこう」とー? どこへ行こうつて言つのー?..」

「

見つかってしまった。あとほんの少しだったの。クローンがマナをシイナのもとへと連れていこうと腕を伸ばす。その時。

「マナ！..」

駆け抜ける、強い意志。

懐かしい、心だけに届く声。

「 ユウ、あなたなの…?」

自分を呼ぶ声が聞こえる。

言葉ではなく、思いが、胸に響く。

誰よりも、誰よりも、自分だけを求める想い。

コウが来たのだ。

「」

マナはクローン達の不意をついて走りだした。少しでも早く、近く、コウの所へ行かなければ。

背後でシイナの怒鳴る声がした。きっとクローンを叱咤したのだろう。

ホールを横切り外へでる扉に向かうマナは、樹脂ガラスに区切られた区画の最短距離を駆け抜ける。

「止まりなさい、マナ！！」

背後から銃声がした。

振り返るマナ。

シイナは先程まで天井に向けた銃を、構えたまま立っていた。今はマナに、照準をあわせて。

「博士」

だが、不思議と恐怖はなかつた。シイナが自分を撃つはずがないと、確信しているのではない。彼女は本気だ。

それでも、マナは平氣だつた。

撃たれてもいい。そう思った。

自分の思いを、どうしてもシイナにわかつてもらいたかった。

「マナ、どうしたって言うの？なぜこんなことを？…まさかここを出て行くつもりなの？」正氣じやないわ

「ごめんなさい、博士。でも、あたしは行くわ。ユウと行くの。彼はあたしを連れていくってくれる。どこまでも続く砂漠の果て、海を越えた世界の果てまでも

マナの落ち着いた言葉にて、シイナは無表情な顔をほんの少し歪ませた。

「あなたは、自分が何を言っているかわかっているの？」

「」

「ええ。あたし、彼を愛してるの」

「何を言つてゐるの？ 愛だなんて、あなたは勘違いをしているのよ。ユウと行くなんて、彼は死んだわ。できっこない。生きていたつて許されるわけはないでしょ？」

「あたしが、ユカのクローンだから？」

シイナは驚いてマナを見る。

「マナ」

「知つてゐるのよ、あたし。でも、知つてもユウが好き。親子でも構わない。そんなことにもう意味はないから。どうせあしたちの間に子供は産まれない。あしたちは、ただ一緒にいられるだけでいいの」

「許さないわ、そんなこと！..」

鋭い声と同時の銃声。肩に近い髪の一房を、弾が掠めた。硝煙と髪の焦げた匂い。

「

マナは静かに立っていた。

対して、シイナは肩を震わせ、引き金を引いた自分に取り乱し、動搖を隠せずに立つてゐる。照準を、マナに合わせたまま。「行かせないわ。あなたが必要なの。他の誰よりも、あなただけが必要なのよ。

なぜわからないの、マナ？ あなただけが、私達を救えるの。

あなたに、私達人類の全てがかかつてているのよ」

マナは首を振る。

「博士。わかつて。あたしユウが好きなの。彼を愛してるの。彼じやないと、駄目なの」

「馬鹿なこと言わないで！..」

ヒステリックな声が廊下に響いた。

「ユウはあなたの息子よ。生殖能力を持たないのよ。彼を選んでも子供は産めないわ。

あなただけが、あなたとフジオミだけが子供をつくれるの。ユウ

を選べば、人類は滅びてしまうのよ！」「

その時初めて、マナはシイナを憐れんだ。

彼女にはきっとわからない。彼女もまた、この歪んだ社会の犠牲者なのだ。

誰も、シイナに教えなかつた。知らないまま、彼女はここまで來た。今何を言つても、彼女は理解してはくれまい。そしてそれでも、マナはシイナを愛していた。

どうしてだらう。愛するということは、こんなにもたやすく心に溢れるものなの。

なぜ、ここにいる誰もも、彼女にそれを教えられなかつたのだろう。

「あたしは博士が好きだつた。フジオミも好きだつた。何も知らない頃のこここの生活も確かに好きだつた。

でも、ユウの方がもっと好きなの。

行かせて、博士。あなたを、憎んでしまわないうち

搖るぎない意志。

何があろうとも変わらない、毅然とした態度のマナを前に、シイナは驚愕した。

まるで初めて会つた、見ず知らずの少女を見ているようだつた。

「あなたは、本当に私のマナなの……」

「ええ、博士。あたしはマナ。でも、あなたのじゃないわ。あたしはあたしだけのもの。

たくさんのおみを知つたわ。それ以上の苦しみも。博士が知らないことさえ。

そして、人を愛することも知つたの。何の打算もない、ただあるがままの愛を知つたのよ。だからあたしは行くの」

マナは微笑つた。決してシイナが理解できない、穏やかな笑みで。シイナは決して認めない。

どうして認めることができるか。マナだけが、彼女の唯一の希

望であったのだから。

わかりすぎるからこそ、マナは黙つてシイナを待っていた。

「行かせないわ。絶対に行かせない。あなたには責任がある。人類を救う義務があるの。それは何においても優先されなければならぬのよ」

シイナは震えていた。

銃を構えているのは彼女の方なのに、自分こそが今にも死に曝されているかのように、蒼白だつた。

「裏切らないで、マナ。あなただけは、私を裏切らないで。

あなたは違うはず。頭のいい子だもの。自分がどんな愚かな振る舞いをしているか、落ち着いて考えればすぐにわかることよ。

そう、あなたには考える時間が必要なのよ。落ち着いて考える時

間が

シイナの指が再び引き金を引くその寸前に。

「やめろ!!」

「シイナ!!」

二つの声が、同時に響いた。

それから、彼らの両側に聳えたつ樹脂ガラスが一斉に碎けた。圧力に耐えきれぬように。

瞳を閉じるその一瞬に、シイナは何もない空間からフジオミの姿が現されたのを見た。

「!!」

自分の身体が、大きな腕に抱かれて床に倒れこむのを感じた。身体に響く強い衝撃。

砕けたガラスの散らばる音。

両手で握っていた銃が手を離れて転がる。気が遠くなりかけた。

「マナ!!」

名を呼ぶ声に、マナが視線を向けた。

彼女を避けるように崩れ落ちた樹脂ガラスの向こうへ、コウがいる。

「コウ……」

その声に、シイナと、かばつたフジオミもさりげなく。
「マナ、コウと行け」

「フジオミ、あなた何言つてるの！？」

マナが振り返る。

フジオミはマナに、もう一度告げる。

「君はもう自由になつてい。自分で判断して、自分の一番望むところに行けばいい」

数秒、二人の視線が絡み合い、

「あたし、行くわ」

マナは一人に背を向けて走りだした。

「駄目よ、マナ、戻つて！！」

悲鳴のようなシイナの声にも振り返らなかつた。

マナはガラスを越え、コウの胸に飛び込んだ。

「連れていつて、コウ」

「ああ。連れてく。今度こそ、放さない」

抱き合つて一人の姿がそのまま空に融けるように見えなくなつた。

それが最後だった。

「なんのことなの……」

シイナは茫然とマナとコウがつこいつまでいた空間を凝視していた。

「行かせてやれ。マナはもう、一人の人間として生きはじめたんだ。僕等には止められない」

静かなフジオミの言葉に、シイナは鋭い視線を向けた。

「何を言つてるの、気でも狂つたの！？ マナは唯一の女性なのよ、彼女だけが人類を滅亡から救えるのに！！」

シイナはフジオミの腕を払い除け、立ち上がり立つとする。フジオミが引き止める。

「どうする気だ」

「決まつてゐわ。追うのよ！…」

「やめろ！… まだわからないのか、君には」

「あの子は外の世界でなんて生きられないわ！… ここが、こここそが唯一私達の生きられる場所なのよ。ここを離れて、どうやって生きていけるって言うの、あの何もない地で」

青ざめて、いつもの平静さをなくしているシイナを、フジオミは憐れむように見つめていた。

「そう、僕等はここからどこへも行けない。ここでしか、生きられない。

だが、どこにも行けないのは僕等だけだ。

マナは行ける。全て捨てて、新たなものに立ち向かえる強さを、彼女は持っている

「信じられない。あなたもマナも、コウに何かされたの！？ 義務を放棄するなんて、なんて恐ろしいことを

「どうして、今まで未来にこだわるんだ。君は君だ。今現在のこ

の瞬間にしか、存在しない。老いて死ねば何も残らない。だからこそ、この瞬間瞬間が大事なんだ。君が君のために生きて何が悪い

「何を言つてるの、あなたは」

「わからないふりをするのはよせ。君だつてとっくにわかつっていたんだ。ただ、気づかないふりをしていただけだ。自分を守るために

静かな、けれど厳しい言葉に、シイナは反論できない。

青ざめたまま、じつと彼を見つめている。何を言われたのかさえ、理解できていないかのように。

フジオミはそんなシイナの頬にそっと触れた。

「君を愛してる」

竦んだ身体が、自分の言葉を受けとめたことをフジオミは知った。

「やめて」

「君を愛してる。ずっと愛してきた。君が望むのなら、マナを選んでもいいと思うほど、ずっと愛してきたんだ」

「やめて、聞きたくないっ！…」

耳を塞ぐ彼女の腕を捕らえて引き寄せる。

「聞くんだ。この世界には人間の力ではどうしようもないことも確かに存在する。滅びは平等に訪れる。誰の上にも。

人類が長い歴史の中で何をしてきたか考えてみるがいい。我々は過去にどれほどの種を絶滅に追いやり、自然を破壊し、大地を穢してきたか。

そして今、大きな目に見えない力が人類を滅ぼす。

これこそが運命だ。いくら足搔いても変えられない。人類が誕生したときから、決められていたことだ。
僕らは滅びる運命だった

「そんなの嘘よー」

フジオミの言葉に、シイナは今、全身全霊で抗っていた。

認められない。

認められるわけがない。

フジオミの言葉が真実なら、自分達は　自分がこれまでしてきたことは。

「じゃあ、私達の意味は！？　今、私達のしていることは、生きていることは無駄なことなの！？　意味がないの！？
滅びが初めから決められていることなら、どうして生まれてきたの　意味もないのに、どうして生きているのよ…！」

フジオミは強く、シイナを抱きしめた。

シイナは今、子供のように泣きじやくつていて。そんな彼女が、フジオミには愛しかつた。だから、強く強く抱きしめた。逃れようとするシイナを決して逃がさないよう。

「意味がないのなら、生きられない。

私には何も残せない。たつた一人で、消えていくだけなのよ。

マナは違う。あの子は私ができなかつた夢を継げる。未来を残せる。それなのに……」

「マナも苦しんだんだ。本當だ。義務と愛情のどちらも選べず」、彼女は泣いていたよ。コウを愛するのと同じくらい、彼女は君を愛していたから。

マナは確かに、僕等の希望だつた。

だが、それも決して永遠に続くことはないだろう。

命ある者がいつか死を迎えるように、人類にも終わりが必ずある。僕等は最後のあがきを繰り返しているんだ。死を恐れる老人のように

うに　」

いつしか抗うのをやめ、シイナは虚ろに言葉を繋ぐ。マナはもう戻らない。深い絶望が彼女から全ての感情を奪つたかのようにからつぽだつた。

「そうよ、恐かったのよ。

もうすぐ私達は死ぬの。何も残せずに、ただ死ぬの。

それだけのことが、どうしようもなく恐ろしかった。何も残せず死ぬだけなら、どうして生きているの。

意味がないのなら、どうして生まれたの。

あなたはいいわ。未来を残せる。その能力がある。あなたには、意味がある。

私はどう? 女として生まれて、でも私に意味はないわ。何もないのよ。私に確かなものは何もない。

それがどんなに虚しく、恐ろしく、孤独なものかはあなたにはわからない。

私は意味が欲しかった。

今、ここにいる意味が、生きることを許されるための意味が、欲しかった

「意味なら、あるよ」

静かに身体を離したフジオミの手が、シイナの頬に触れる。

「君は、僕のために生まれた。

僕が愛するために。

君が必要だよ、シイナ。

君には、意味がある 意味がある。

僕が君を、愛しているから

「

「僕もやつと気づいたんだ。

今この瞬間に存在している君を愛してる。

例え何も残らなくとも、君以外、僕はいらない。愛してくれと強要したりしない。君がいやなら、もう抱かない。僕が今まで君を苦しめてきた分の償いをするから。

ただ、僕が君を愛し続けることだけは許してほしい。君を愛しているということを、認めてほしい。それだけで、いいから

シイナの瞳から、新たな涙がこぼれた。

「 私には誰も、何も愛せない。あなたが愛する価値すらないわ

……

フジオミは穏やかに微笑つた。

「価値も何也要らない。そんなものを考える間もないくらいの時から、ずっと君が好きだつたから」

フジオミはもう一度シイナを優しく抱き寄せた。シイナは抵抗しなかつた。する気力さえなかつた。穏やかな時間が、二人を流れる。

「こんな簡単なことにさえ、ようやく気づいたんだ。僕はずつと、こんな気持ちで、君を抱きしめたかつた」

「あなたは、馬鹿だわ……」

シイナは瞳を閉じた。

こぼれ落ちた涙が乾くまで、一人は動かなかつた。

彼等は高台の上に立っていた。

言葉を交わさなかつた。ただじつと互いの顔を見ていた。
幾度も夢に現れ、離れている時間をもじかしく思つた日々はすぎ
たのだ。

「もう一度と、離れないで」

「ああ」

抱き合つ彼等を、風が優しく過ぎていく。

二人は身体を離し、風の方へと視線を向けた。

高台から望む景色はもう秋の装いを始めよつとしている。
やがて色づいた木々の葉が、また新たな季節を迎えるのだ。
マナはじつと、その風景を見つめていた。

「きっとこの地上から人間が全て消えても、ここは変わらずに美し
いでしょうね」

言葉は、流れるように風が運んだ。

「風は変わらず吹いて、水は変わらずに流れ続けるの。ただ、そう
いうことなのよ」

循環する生命を、再生する魂を、マナは愛していた。

全でが失われたとしても、それは本当の意味での喪失ではないの
だ。

ましてや、消滅でもない。

全ては循環する。

かつて肉体から離れた生命もまた、気の遠くなるような時の中を
何度も再生し、循環した。

その生命あるものの中で、意味のないものは何もなかつた。

意味がなければ、存在するはずがないのだ。

マナは今、それを知り、理解した。

隣には、コウがいる。

愛しい存在が。

そして今、彼女は何より、自分自身であることを愛していた。
今この瞬間の自分であることを。

コウを愛し、コウの隣にある、このかけがえのない生命と身体を、
感謝した。

「行こう、マナ」

コウがマナに手を差し伸べる。

マナは穏やかに微笑んで、その手をとった。

「行きましょう、コウ。
連れていくて、何処までも」

37（後書き）

最後までお付き合っていただきありがとうございました。
一応、この物語は続編があるので、準備ができたらまた連載したい
と思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9709z/>

ETERNAL CHILDREN ~永遠の子供達~

2012年1月13日15時48分発行